名勝名古屋城二之丸庭園
発掘調査報告書

第１次（2013）～第３次（2015）

2017

名　古　屋　市

二之丸庭園から天守を望む（東から）

中御座之間北御庭惣絵

御城御庭絵図

巻頭図版 4

多春園　オルソ画像

巻頭図版５

権現山東　（上から）

多春園　化粧三和土遺構

兵舎跡（権東-02）　完掘状況（南東から）

兵舎跡（余-01）　完掘状況（南から）

出土遺物（施釉瓦）

出土遺物（施釉兎文軒丸瓦）

出土遺物（三葉葵文軒丸瓦）

例　言

1　本書は、名古屋市中区二の丸に所在する、名勝名古屋城二之丸庭園（名古屋市および愛知県の登録遺跡名は名古屋城跡（市遺跡番号7-1、県遺跡番号007001）および那古野城跡（市遺跡番号7-3、県遺跡番号007003））で実施した第１次調査から第３次調査までの発掘調査の報告書である。成果については平成28年３月31日時点のものである。

2　調査は名勝名古屋城二之丸庭園の整備に伴って実施した。

3　調査面積および調査期間は以下のとおりである。

第１次調査：面積 187㎡

調査期間 平成25年７月22日から11月30日

第２次調査：面積 1,160㎡

調査期間 平成26年６月５日から12月26日

第３次調査：面積 718㎡

調査期間 平成27年７月２日から12月28日

4　調査に関わる調整事務は、名古屋市市民経済局名古屋城総合事務所整備室嘱託員　今井孝司が担当した。第１次調査の現地調査は名古屋市市民経済局名古屋城総合事務所管理課学芸員　市澤泰峰が担当し、第２次および第３次調査の現地調査は市澤の監督の下、株式会社イビソクに委託して行った。

5　発掘調査は、平成25年度は名古屋市市民経済局名古屋城総合事務所から調査支援委託、平成26および27年度は調査委託により発注を行った。調査担当者は下記のとおりである。

第１次調査：受 託 業 者　株式会社イビソク

調 査 担 当　市澤泰峰

調　査　員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　近藤真人

第２次調査：受 託 業 者　株式会社イビソク

監　督　員　市澤泰峰

調　査　員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　近藤真人

調査補助員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　今西菜見

第３次調査：受 託 業 者　株式会社イビソク

監　督　員　市澤泰峰

調　査　員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　近藤真人

調査補助員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　今西菜見

整 理 作 業

監　督　員　名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所　市澤泰峰

調　査　員　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　近藤真人

整理担当者　株式会社イビソク文化財コンサルタント事業部　鈴木裕子

6　第２次調査で出土した赤色の三和土等については、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存修復科学センター分析科学研究室長 早川泰弘氏に分析を依頼した。

7　第２次調査で出土した主要石材については、岐阜大学工学部社会基盤工学科教授　小嶋智氏に石質の鑑定を依頼した。

8　第２次調査で出土した兵舎基礎のレンガについては、北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科教授　水野信太郎氏に実見および助言を得た。

9　調査の記録や遺物の整理作業は、第１次調査の一部については市澤が行い、名古屋市教育委員会見晴台考古資料館の協力を得た。第１次調査の一部および第２次・３次調査については、市澤の監督の下、株式会社イビソクへ委託して行った。

10　本報告書の作成は、市澤の監督の下、株式会社イビソクに委託して行った。本書は、第６章第１節を近藤が、第６章第２節を鈴木が、それ以外を市澤が執筆した。執筆にあたっては文化庁、名古屋城全体整備検討会議庭園部会の助言･協力を得た。遺構写真は近藤が、遺物写真は横山亮（オフィスメガネ）が撮影し、全体の編集は近藤が行った。

11　調査および本書では、方位、座標系は世界測地系（国土座標Ⅶ系）を、水準はT.P.（東京湾平均海面）を使用した。

12　トレンチ名については、報告書作成時に再整理を行った。そのため、調査時とはトレンチ名が異なる場合がある。

13　北園池においては、平成27年度にトレンチ調査を行うとともに、余芳に伴う調査の中で、昭和49～53年にかけての調査で確認されていた、北園池の東端部分を再度確認をした。本報告の中ではトレンチ調査についても報告すべきであるが、限られた面積の調査であるため全体像についての把握ができていない。一方で、平成29年度に北園池全体での調査が予定されている。成果の齟齬を排するため、本報告では北園池東端の成果についてのみ報告することとし、北園池全体については平成29年度の調査成果を以って報告を行うこととする。

14　調査の記録、出土遺物等は名古屋城総合事務所が保管している。

15　巻頭および報告書中に掲載している『中御座之間北御庭惣絵』は名古屋市教育委員会蓬左文庫の所蔵資料である。
巻頭および報告書中に掲載している『御城御庭絵図』は名古屋市教育委員会蓬左文庫の所蔵資料である。
本文中に掲載している『御城二之丸図』は名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所の所蔵資料である。

16　所属はすべて調査時のものである。市民経済局名古屋城総合事務所は、平成28年４月１日より観光文化交流局名古屋城総合事務所となっている。

17　調査参加者は以下のとおりである。

第１次調査　梅本英夫、久保征二、中村雲上、山岸豪雄

第２次調査　岩室一栄　梅本英夫　浦谷斉　粕谷和美　久保征二　窪田比呂志　近藤怜子
柴山香代子　竹中秀謙　田黒幸仁　立川守　中村雲上　土方晶博　百瀬詔子
森憲彦　山岸豪雄　山田修　山之内なつ子

第３次調査　岩室一栄　梅本英夫　浦谷斉　粕谷和美　北島万紀　窪田比呂志　近藤怜子
澤田洋子　柴山香代子　滝川かすみ　田黒幸仁　竹内翼　竹中秀謙　中村雲上
水谷久子　百瀬詔子　森憲彦　山岸豪雄　山田修　山之内なつ子　渡辺崚

18　調査及び報告書作成に際して、以下の方々にお世話になりました。（敬称略・五十音順）

尼崎博正　荒木麻理子　五十嵐大　伊藤厚史　伊藤正人　内田恭司　内堀信雄　梅本博志
柿田祐司　木村慎平　木村有作　桐原千文　今野和浩　佐竹康太郎　庄田孝輔　杉浦康浩
鈴木正貴　髙田徹　髙橋方紀　滝川重徳　田中城久　辻広志　中川郷子　長林大　服部哲也
町田義哉　三尾次郎　森重幸　森允　山田哲也　横山薫　吉田一美　吉村龍二
愛知県文化財保護室　愛知県埋蔵文化財調査センター　石川県金沢城調査研究所　岩間造園株式会社
株式会社環境事業計画研究所　株式会社三五郎園　株式会社中根庭園研究所
公益財団法人愛知県埋蔵文化財センター　名古屋市文化財保護室　名古屋市見晴台考古資料館
名古屋市蓬左文庫

凡　例

1　本書で用いた土色は、小川正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2006 年版を使用した。

2　出土遺物は全て層位、遺構毎に遺物カードを付して取上げている。

3　本書での遺構、遺物実測図の縮尺は、図版毎に設定している。

4　本書での写真図版の縮尺は任意である。

5　名古屋城二之丸庭園については『保存管理計画書』の中で、以下のように地区の大区分がなされている。

名古屋城二之丸庭園：文政期の絵図に描かれた庭園の範囲で、東庭園および外縁を含めた範囲。（下図青線で囲った範囲）

名勝名古屋城二之丸庭園：名古屋城二之丸庭園のうち、昭和 28 年に名勝指定された範囲。（下図灰色で着色した範囲）

北御庭：江戸期に造営された庭園が現存し、名勝指定範囲の北側を含む地区。

東庭園：昭和 48 年に整備された東側の芝生広場一体を指し、霜傑遺構、暗渠遺構を含む地区。

南　池：遺構展示されている南池周辺地区。

前　庭：明治期に作庭された庭園が現存し、名勝指定範囲の南側を含む地区。

外　縁：上記 4 地区（北御庭、東庭園、南池、前庭）の外周地区。

二之丸御殿跡：東門からの園路と二之丸庭園に接続する地区。

保存管理上の地区区分及び施設等位置図

目　次

例言
凡例
第１章　名勝名古屋城二之丸庭園の概要……1
　第１節　名勝名古屋城二之丸庭園の沿革……1
　第２節　指定状況と概要……3
第２章　事業の実施体制……5
第３章　調査に至る経緯……7
第４章　名勝名古屋城二之丸庭園の位置と環境……8
　第１節　地理的環境……8
　第２節　歴史的環境……8
第５章　既往の調査と調査方針……15
　第１節　既往の調査……15
　第２節　調査の方針と方法……15
第６章　調査の成果……16
　第１節　発掘調査……16
　　A　笹巻山……16
　　（１）基本層序……16
　　（２）検出遺構……19
　　B　栄螺山……20
　　（１）基本土層……21
　　（２）検出遺構……21
　　C　多春園……26
　　（１）基本土層……27
　　（２）検出遺構……27
　　D　御文庫……35
　　（１）基本土層……35
　　（２）検出遺構……35
　　E　二子山……38
　　（１）基本土層……38
　　（２）検出遺構……38
　　F　権現山……42
　　（１）基本土層……42
　　（２）検出遺構……42

G　権現山東……49
（1）基本土層 ……49
（2）検出遺構 ……58
H　余芳……66
（1）基本土層 ……66
（2）検出遺構 ……66
I　外縁……72
（1）基本土層 ……72
（2）検出遺構 ……72
第2節　出土遺物……77
第7章　まとめ……113

参考文献
報告書抄録

挿図目次

保存管理上の地区区分及び施設等位置図
第１図　二之丸庭園地割図……3
第２図　名古屋城二之丸庭園位置図……6
第３図　名古屋城二之丸庭園遺跡周辺の過去の調査……9
第４図　御城二之丸図……11
第５図　調査区位置図（第１次～第３次調査）……12
第６図　遺構完掘図（第１次～第３次調査）……13
第７図　御城御庭絵図（第１次～第３次調査範囲拡大）……14
第８図　笹巻山　遺構平面図・オルソ画像……17
第９図　笹巻山　遺構平面オルソ画像合成図……18
第10図　御城御庭絵図（笹巻山拡大）……18
第11図　栄螺山（栄-02・03）　土層断面図……20
第12図　栄螺山（栄-01）　土層断面図……21
第13図　栄螺山　遺構平面図……22
第14図　栄螺山　オルソ画像……23
第15図　栄螺山　遺構平面オルソ画像合成図……24
第16図　御城御庭絵図（栄螺山拡大）……25
第17図　多春園（栄-04）　土層断面図……26
第18図　多春園　遺構平面図……28
第19図　多春園　オルソ画像……29
第20図　多春園　遺構平面オルソ画像合成図……30
第21図　御城御庭絵図（多春園拡大）……31
第22図　多春園（多-03・04）　土層断面図……32
第23図　御文庫　遺構平面図・オルソ画像・合成図……36
第24図　御文庫　土層断面図・御城御庭絵図（御文庫拡大）……37
第25図　二子山（二-01・02・08）　土層断面図……38
第26図　二子山　遺構平面図・オルソ画像……40
第27図　二子山　遺構平面オルソ画像合成図……41
第28図　御城御庭絵図（二子山拡大）……41
第29図　権現山　遺構平面図・オルソ画像……44
第30図　権現山　遺構平面オルソ画像合成図・御城御庭絵図（権現山拡大）……45
第31図　権現山　遺構平面図（Detail①）……46
第32図　権現山（権-05）　飛び石群平面図（Detail②）……47
第33図　権現山（権-01・03）　土層断面図……48

第34図　権現山東　遺構平面図……50
第35図　権現山東　オルソ画像……51
第36図　権現山東　遺構平面オルソ画像合成図……52
第37図　御城御庭絵図（権現山東拡大）……53
第38図　御城御庭絵図（権現山下御席拡大）……54
第39図　権現山東　土層断面図……55
第40図　権現山東（権東-02）　遺構平面・断面図（Detail⑤）……56
第41図　中御座之間北御庭惣絵（権現山東付近拡大）……57
第42図　権現山東（権東-01）　遺構平面・断面図（Detail③・④）……58
第43図　権現山東（権東-01）　権現山下御席　平面図（Detail⑧）……60
第44図　権現山東（権東-02）　遺構平面図（Detail⑦）……61
第45図　権現山東（権東-01）　権現山下御席と便所跡　遺構平面図（Detail⑥）……65
第46図　権現山東（権東-02）　兵舎 西壁立面図（西面外側）……65
第47図　余芳 遺構平面・南壁面土層断面図……67
第48図　余芳 オルソ画像……68
第49図　余芳 南西角壁面土層断面図……68
第50図　余芳 遺構平面オルソ画像合成図……69
第51図　御城御庭絵図（余芳拡大）……70
第52図　外縁（外-05）　遺構平面・断面図・オルソ画像・合成図・御城御庭絵図（外縁南西拡大）……73
第53図　外縁（外-03）　遺構平面・断面図・オルソ画像・合成図……74
第54図　外縁（外-01・02）　遺構平面・断面・オルソ画像・合成図……75
第55図　御城御庭絵図（外縁北側）……75
第56図　遺物実測図（１）……82
第57図　遺物実測図（２）……83
第58図　遺物実測図（３）……84
第59図　御城御庭絵図（余芳部分）……117
第60図　塀及び水路位置推定図……119

表　目　次

第１表　遺物観察表（実測図掲載遺物）……85
第２表　遺物観察表（写真図版のみ掲載遺物）…87

写真図版目次

巻頭図版１　二之丸庭園から天守を望む（東から）
巻頭図版２　中御座之間北御庭惣絵
巻頭図版３　御城御庭絵図
巻頭図版４　多春園　オルソ画像
巻頭図版５　権現山東　（上から）
　　多春園　化粧三和土遺構
巻頭図版６　兵舎跡（権東-02）　完掘状況（南東から）
　　兵舎跡（余-01）　完掘状況（南から）
巻頭図版７　出土遺物（施釉瓦）
巻頭図版８　出土遺物（施釉兎文軒丸瓦）
　　出土遺物（三葉葵文軒丸瓦）

写真１　笹巻山 調査着手前（南から）
写真２　笹巻山 南礫集積前景（南から）
写真３　栄螺山（栄-01）完堀状況（南から）
写真４　栄螺山（栄-02）完堀状況（東から）
写真５　多春園（多-01）池跡検出状況（東から）
写真６　多春園（多-03）西壁　土層断面（東から）
写真７　多春園（多-03）南壁　土層断面（北から）
写真８　多春園（多-04）土間状遺構・
　　化粧三和土遺構・飛び石列検出状況(南から)
写真９　化粧三和土遺構　南縁立面（南から）
写真10　多春園　三和土下の建物跡
　　礎石列検出状況（三和土南側）
写真11　多春園　三和土下の建物跡
　　礎石列検出状況（三和土東側）
写真12　御文庫（外-04）基礎跡検出状況（東から）
写真13　御文庫（外-04）基礎跡検出状況（南から）
写真14　御文庫(外-04) 石垣天端検出状況(南から)
写真15　二子山（二-03）飛び石出土状況（北から）
写真16　二子山（二-02）飛び石出土状況（東から）
写真17　二子山（二-06）完掘状況（西から）
写真18　二子山（二-01）完掘状況（南西から）
写真19　権現山（権-03）礎石検出状況（南から）
写真20　権現山（権-03）区画状遺構・
　　基壇状遺構検出状況（南西から）
写真21　権現山（権-05）鳥居基礎・
　　飛び石群検出状況（北から）
写真22　権現山（権-02）愛宕社基壇検出状況
　　(北西から)
写真23　権現山（権-05）鳥居基礎検出状況
　　(南西から)
写真24　権現山(権-05) 階段跡検出状況(南西から)
写真25　権現山東 撹乱坑内土層断面（東から）
写真26　権現山東　土層断面（南から）
写真27　池跡（権東-02）検出状況（西から）
写真28　井戸（権東-01）半截状況（北から）
写真29　権東-礎石列２、溝２・３ 完堀状況
　　(南東から)
写真30　権東-溝１・権東-礎石列１ 完掘状況
　　(北西から)
写真31　権東-溝２ 土層断面（南東から）
写真32　権現山下御席(権東-01) 検出状況(東から)

写真33　権現山下御席（権東-01）
洗い出し検出状況（西から）
写真34　権現山下御席（権東-01）
柱穴跡検出状況（南から）
写真35　石組遺構（権東-01）土層断面（西から）
写真36　石列遺構（権東-02）権東-礎石４
検出状況（西から）
写真37　石列遺構（権東-02）権東-礎石３・４
検出状況（北から）
写真38　石組遺構と石列遺構（権東-02）
完堀状況（北から）
写真39　石組遺構（権東-01）間詰め石検出状況
（北西から）
写真40　兵舎跡(権東-02）レンガ検出状況(南から）
写真41　便所跡（権東-01）完堀状況（北西から）
写真42　兵舎火災跡（権東-02）検出状況（南から）
写真43　便所跡と下水管（権東-01）
完堀状況（西から）
写真44　便槽（権東-01）完堀状況（南から）
写真45　レンガ刻印１
写真46　レンガ刻印２
写真47　レンガ刻印３
写真48　レンガ刻印４
写真49　レンガ刻印５
写真50　余芳（余-01）池跡（元和期）範囲
写真51　余芳（余-01）手水検出状況（北から）
写真52　余芳（余-01）手水検出状況（南から）
写真53　外縁（外-05）完堀状況（南から）
写真54　外縁(外-05）塀跡(礎石)検出状況(北から）
写真55　外縁（外-05）西壁土層断面（東から）
写真56　外縁（外-05）瓦出土状況（南西から）
写真57　外縁（外-02）完掘状況（西から）
写真58　外縁（外-02）外-溝１検出状況（北から）
写真59　外縁（外-01）完掘状況（南西から）
写真60　外縁（外-01）南蛮練塀下の整備跡
検出状況（南から）

遺物写真図版１　磁器（１）
遺物写真図版２　磁器（２）
遺物写真図版３　磁器（３）
遺物写真図版４　陶器（１）
遺物写真図版５　陶器（２）
遺物写真図版６　陶器（３）
遺物写真図版７　陶器（４）　陶器（５）
遺物写真図版８　陶器（６）　陶器（７）
遺物写真図版９　陶器（８）
遺物写真図版10　陶器（９）
遺物写真図版11　陶器（10）　陶器（11）
遺物写真図版12　土器　他
遺物写真図版13　施釉瓦（１）
遺物写真図版14　施釉瓦（２）
遺物写真図版15　施釉瓦（３）
遺物写真図版16　施釉瓦（４）　瓦（１）
遺物写真図版17　瓦（２）
遺物写真図版18　瓦（３）・漆喰製品・近代の遺物（１）
遺物写真図版19　近代の遺物（２）・中世以前の遺物

第１章　名勝名古屋城二之丸庭園の概要

第１節　名勝名古屋城二之丸庭園の沿革

名古屋城二之丸庭園は、藩主が居住し、藩政の中心であった二之丸御殿に接して造営された大名庭園である。初代藩主徳川義直によって造営され、何度かの改修・改変や管理者の交代を経ながら、昭和28年(1953)に国の名勝に指定され、現在まで受け継がれてきている。

二之丸庭園の時代区分は『名勝名古屋城二之丸庭園保存管理計画書』（名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所2013、以下『保存管理計画書』）の中で、江戸期は史資料を根拠として第Ⅰ～Ⅲ期に区分し、明治以降は管理者の変更に基づいて、明治～終戦までの陸軍省所管時代を第Ⅳ期、終戦後の大蔵省所管時代を第Ⅴ期、名古屋市が管理団体となった昭和40年（1965）から現代までを第Ⅵ期と設定している。『保存管理計画書』で記載された沿革を基とし、以下にまとめる。

【江戸期】

名古屋城の築城は、慶長15年（1610）に家康によって縄張が決定し、加藤清正を初めとする北国・西国を中心とした20大名に普請が命じられ、２年後の慶長17年（1612）には天守が完成した。同年には本丸御殿の作事も開始され、３年後の元和元年（1615）には本丸御殿が完成したと考えられる。当初二之丸北部には家老である平岩親吉の邸宅があり、南部には寛文３年（1663）ごろまで家老である成瀬家と竹腰家の邸宅が位置したと『金城温古録』には記される。

本丸御殿の完成後、断絶した平岩親吉の邸宅に代わり、二之丸御殿の整備が本格化したと考えられ、『源敬様御代御記録』の元和３年(1617)11月20日に「二之丸　御殿御取立御作事出来」とあり、元和６年(1620)には「一此年、二丸江　御移徙有之」とあることから初代藩主義直（当時義利）が二之丸に移り住んだと考えられる。寛永初年頃までに、二之丸御殿は「表」、「中奥」、「奥」という体裁を整えたと考えられている（内藤1985）。

〔第Ⅰ期〕　二之丸に移徙した義直は、庭園の造営に着手したと考えられる。『源敬様御代御記録』の寛永５年（1628）６月26日に「二之丸御作事大形出来」とあり、庭園も含めた完成は義直の移徙から８年後にあたるこの時期であると考えられる。この元和期の庭園を描いた絵図が『中御座之間北御庭惣絵』として残されている。

〔第Ⅱ期〕　義直が逝去した翌年の慶安４年(1651)、二代藩主光友が二之丸御殿に「御祠堂」を、庭園には「聖堂」を建立したとの記録が『敬公実録』に記されており、光友は義直の没後すぐに庭園の改修に着手したものと推察される。また、『尾州御城絵図』や『金城温古録』に収録されている「北御庭古図」がこの時代の庭園の変遷を示しているものと考えられる。

〔第Ⅲ期〕　文政期になって十代藩主斉朝により庭園は大きく改変された。この時期の庭園を描いた絵図として、『御城御庭絵図』が残されているが、光友から斉朝までの170年間における庭園を記録した資料は確認されておらず、その間の変遷は明らかでない。『御城御庭絵図』に描かれた庭園は、『中御座之間北御庭惣絵』と比較すると、北御庭の改修に加えて東側にも大きく拡張され、茶席を伴う庭園や園池等が設けられた。文政期の改変から50年ほどで幕末を迎えると、明治３年（1870）には二之丸御殿の取り払いが決定し、二之丸庭園を含めた二之丸の姿は大きく変わることとなる。

【明治～昭和期】

〔第Ⅳ期〕 明治６年（1873）、陸軍省管轄となった二之丸城には兵舎が建設された。庭園内に建てられていた茶席や庭石、燈籠等は民間に売り払われ、権現山や北御庭園池、栄螺山の一部が削平を受けるとともに、一部に土塁が築かれ庭園は東西に分断された。庭園東側には園池を埋め立てて兵舎が建設され、庭園としての姿は失われた。

一方、北御庭の園池および築山の大部分は、将校集会所の庭として保存された。園池底は明治13年(1880)に鯉を飼うために三和土に改められ、池水が溜められたとされる（澤田1980）。集会所の南側には、吉田紹和により新たに前庭が造営された。また、明治14年（1881）には三之丸庭園を築造するため、二之丸庭園の石材が持ち出された。権現山正面に架けられていた自然石の石橋についても持ち出され、切石橋に架け替えられた。この石橋を含めて持ち出された手水鉢や石組の一部が、三之丸庭園に現存している。

なお、明治26年（1893）と明治42年（1909）に、本丸・西之丸・御深井丸が順次宮内省に移管され、名古屋離宮となったが、二之丸は引き続き陸軍省所管のままであった。

昭和５年（1930）に名古屋離宮が廃止され、本丸・西之丸・御深井丸が名古屋市に下賜されると、昭和６年（1931）に名古屋城管理事務所が設置され、名古屋城は一般公開を開始した。昭和７年（1932）には名古屋城が史跡指定を受け、昭和27年（1952）に特別史跡へと指定替えされる。

二之丸庭園では、昭和８年（1933）に陸軍によって栄螺山に戦没者を祀る忠霊祠が設置され、栄螺山は「忠霊ヶ丘」と名付けられた（歩六史編集委員会1968）。栄螺山の名の由来となった螺旋状の園路は、『日本庭園史図鑑』の昭和12年実測図によると形状が改変されており、この忠霊祠建立の際に付け替えられたと考えられる。

〔第Ⅴ期〕 昭和20年（1945）、戦災により天守等本丸建造物の大半が焼失した。終戦後、二之丸は大蔵省（現財務省）の所管となり、兵舎等の建物は昭和23年（1948）から38年（1963）まで名古屋大学の校舎や、昭和24年（1949）から48年（1973）まで財団法人学徒援護会の運営する学生寮として利用された。

昭和28年（1953）に庭園として保存された北御庭の一部と前庭が名勝指定を受け、昭和28～30年に文部省により北御庭の池底が玉石敷きに整備された（澤田1980）。

〔第Ⅵ期〕 名勝指定範囲は、昭和40年（1965）に名古屋市が管理団体となった。昭和41年（1966）に庭園周辺部の緑地帯等を整備し、昭和42年（1967）から一般公開を開始した。昭和44年（1969）には二の丸茶亭が建造された。昭和48年（1973）、49年（1974）と学生会館２棟が続けて火災により焼失した。

昭和49年に、大蔵省所管の二之丸の北半が大蔵省から名古屋市へ無償貸付され、名古屋市土木局緑地部が復元を視野に入れた検討を目的とした調査を開始し、『名古屋城二之丸庭園　調査計画報告書』を刊行した。また、昭和50年（1975）には試掘調査を実施した。昭和51年（1976）には名古屋市教育委員会による発掘調査が実施され、これらの調査により北御庭の園池東端、東御庭の霜傑、暗渠、南池といった庭園遺構が検出され、『御城御庭絵図』に描かれた庭園の一部が地下に保存されていることが確認された。昭和53年（1978）に遺構の展示を含めて東庭園が整備され、ほぼ現在見られる二之丸庭園の姿が整うこととなった。

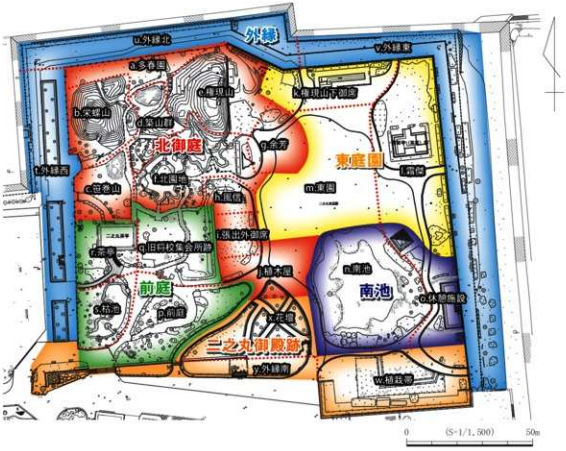
第２節　指定状況と概要

名古屋城に関わる指定は戦前にまで遡る。二之丸庭園以外では、名古屋離宮が名古屋市へ昭和５年(1930)12月11日に下賜されると、国宝保存法に基づき天守および本丸御殿等の建物24棟が、城郭として第１号の国宝に指定された。しかし、昭和20年（1945）５月14日、戦災により指定を受けていた建物のうち、表二之門、東南隅櫓、西南隅櫓、西北隅櫓を除く、天守等本丸建造物の大半が焼失した。焼失を免れた櫓三棟と門一棟と昭和50年（1975）に指定された名古屋城旧二之丸東二之門、名古屋城二之丸大手二之門が重要文化財（建造物）に指定されている。

昭和７年（1932）７月には、西之丸に生えるカヤの木が国の天然記念物の指定を受ける。このカヤの木は樹齢600年とも言われ、『金城温古録』には正月の膳に供されたと伝わる。昭和20年５月14日の戦災で半焼したが、現在は樹勢を回復している。

昭和７年（1932）12月には、名古屋城の城域が史蹟指定を受ける。この時の指定では陸軍用地の内、実際に利用がなされていた部分は史跡範囲から除外され、兵舎などが立ち並んでいた二之丸、三之丸と三之丸の北東の土塁は指定から外れていたようである。その後、昭和10年（1935）５月に御園御門の堀南側の一部が追加指定をされている。昭和27年（1952）３月には特別史跡へと指定替えされる。

二之丸庭園については、昭和28年（1953）に、陸軍将校集会所の庭園として利用されていた北御庭の一部と前庭が現存する城郭庭園として貴重であるとして名勝指定を受けている。以下に名勝名古屋城二之丸庭園の指定状況をまとめる。



第１図　二之丸庭園地割図

種　　別：名勝　　名　　称：名古屋城二之丸庭園

指定年月日：昭和28年(1953) 3月31日　　所　在　地：愛知県名古屋市二の丸2番

指 定 面 積：5,137.18㎡

管　理　者：名古屋市（昭和40年10月28日付　文化財保護委員会告示第63号）

説　明　文：元和元年二之丸御殿の経営にともなって作庭されたものと考えられる。もと同御殿北側に一区域を劃して設けられていたが、当時の建築物はすべて失われ、庭園もかなりの変遷を見ている。しかし現在の庭園には大形の庭石青石等を多く用いた石組が保存されて、その豪宕多彩な感触はよく当代の作庭精神を現わしている。城郭庭園であって現存するものは甚だ少く、本庭園の如きは比較的よく保存され、貴重な一資料を提供するものというべきである。

昭和28年(1953)の指定当時においては上記の様な評価がなされていた。昭和28年の指定から60年が経過する中で周辺環境が変化するとともに、各種調査によって江戸期の姿が徐々に明らかとなってきた。しかしながら、樹木の繁茂や石組の崩落等が起こり、その価値を十分に認知できる状態とは言えなかった。また、管理・運営手法や、課題の共有がなされない状態となっていた。そのような状況に対応するため、名古屋市では平成21年度から庭園整備のための有識者会議等の態勢を整え、平成24年度には『保存管理計画書』を策定した。その中で名勝名古屋城二之丸庭園の本質的価値について以下のように総括をした。

本質的価値の総括

二之丸庭園の本質的価値を、各時代における庭園の地割及び特徴、これまでの評価等から、改めて評価すると、名古屋城の中心に位置する庭園であったこと、変化に富む地形の中に豪壮かつ細やかな意匠の施された回遊式庭園であったこと、そして、江戸期の庭園と明治期の庭園が一体的な調和を成す庭園であることにまとめられる。

【名古屋城二之丸庭園の本質的価値】

●尾張藩政の拠点並びに歴代藩主の居館であった二之丸に造営された庭園

初代藩主義直の時代から幕末まで、代々藩主の居館であるとともに、藩庁の中心としての役割を担い、「御城」と呼ばれた二之丸に造営された庭園である。

●変化に富む地形造成と豪壮な石組を特徴とする庭園

造営当初の意匠を保存していると考えられる北御庭は、立体的な地形造成と大形の青石などの名石を用いた護岸石組が豪壮な雰囲気を造り出している。庭園が最も隆盛した時代には、敷地は東側に広がり、変化に富む地形が生み出す庭景の大きな転換と細やかな意匠が施された広大な回遊式庭園であった。

●近世の大名庭園と近代の陸軍による庭園が一体の調和を成す庭園

明治期に作庭された前庭は、徳川時代の北御庭に倣ったものと推察され、青石の巨石を用いた石組を特徴とする。また、その手本となった北御庭は、明治期に将校集会所の庭園として取り込まれており、将校集会所を挟んで位置する2つの庭園は、建物が失われた現在も一体の調和を成している。

●絵図などの史資料が豊富で江戸期の様相に迫ることのできる庭園

造営期の『中御座之間北御庭惣絵』、隆盛期の『御城御庭絵図』など、往時の庭園の姿が仔細に描かれた絵図により、庭園が現在まで残されている範囲とその姿が理解できるとともに、『金城温古録』などの文献史料により、現在は失われた姿を知ることができるなど、史料価値の高さを併せ持つ庭園である。

第２章　事業の実施体制

事業の実施体制

調査は名勝名古屋城二之丸庭園の整備事業に伴い実施したものである。特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議（平成27年度まで特別史跡名古屋城跡全体整備検討委員会）および特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会（平成27年度まで特別史跡名古屋城跡全体整備検討委員会庭園部会）を諮問機関として、文化庁、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会などの関係機関の協力を得て進めた。

特別史跡名古屋城跡全体整備検討委員会

名古屋城の整備に関わる有識者会議として「特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議」（以下、全体整備検討会議とする）を設置し、その中に各専門部会として「建造物部会」「石垣部会」「庭園部会」を置き、整備および運営に関する専門的かつ具体的な検討を行っている。全体整備検討会議には、各部会の座長または構成員が出席し、部会における協議内容等を報告のうえ、名古屋城全体として、一体的な整備および運営を進められるよう、調整を行っている。

庭園部会は、平成21年度の「名古屋城二之丸庭園に関する検討会」（以下、検討会とする）を経て、平成22年度に設置され、主に二之丸庭園の保存管理について検討を行ってきた。『保存管理計画書』が平成25年３月に策定されて以降は、二之丸庭園の調査および整備について検討を行っている。

●名古屋城二之丸庭園に関する検討会（平成21年度）

委　　員：仲　隆裕　　京都造形芸術大学教授
　　野村勘治　　有限会社野村庭園研究所所長
　　平澤　毅　　奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室長
　　丸山　宏　　名城大学教授
オブザーバー：洲嵜和宏　　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室教育主事
事　務　局：名古屋市市民経済局名古屋城管理事務所
　　名古屋市市民経済局名古屋城整備室
　　名古屋市緑政土木局緑地施設課
　　名古屋市教育委員会文化財保護室

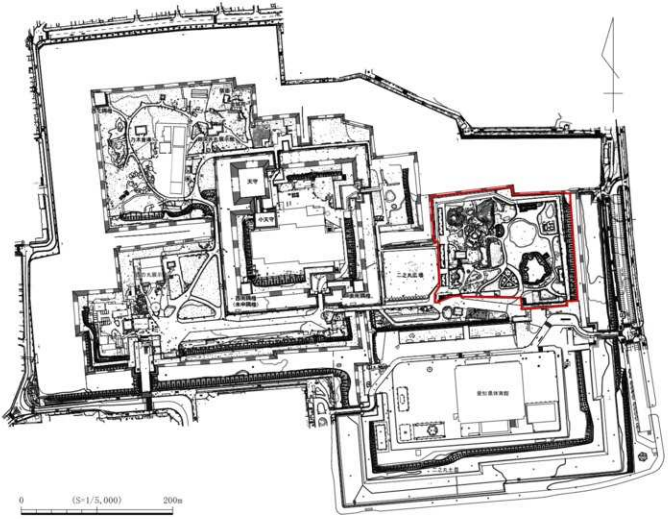
●特別史跡名古屋城跡全体整備検討委員会庭園部会（平成22～26年度）

●特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会（平成27年度～）

座　　長：丸山　宏　　名城大学教授
副　座　長：仲　隆裕　　京都造形芸術大学教授
構　成　員：栗野　隆　　東京農業大学准教授
　　平澤　毅　　奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室長（～平成24年11月）
　　奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室長（平成24年12月～平成27年３月）
　　高橋知奈津　奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室研究員（平成27年４月～）

オブザーバー：本中　眞　　文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官（～平成27年３月）
平澤　毅　　文化庁文化財部記念物課文化財調査官（平成27年４月～）
川井啓介　　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室室長補佐（～平成26年３月）
伊藤太佳彦　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室主任主査（～平成26年３月）
洲嵜和宏　　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室主任主査（～平成26年10月）
鈴木孝文　　愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室主査（平成27年３月～）
野村勘治　　有限会社野村庭園研究所所長

事　務　局：名古屋市市民経済局名古屋城総合事務所
名古屋市緑政土木局緑地施設課（平成22年度）
名古屋市緑政土木局緑地整備課（平成23、24年度）※緑地施設課から改組
名古屋市緑政土木局緑地管理課（平成22年度～）
名古屋市教育委員会文化財保護室



第２図　名古屋城二之丸庭園位置図

第３章　調査に至る経緯

特別史跡名古屋城跡は、江戸期を通じて尾張徳川家の居城であり、現在も名古屋を代表する重要な役割を担っている。名古屋城二之丸庭園は、歴代藩主の居館及び藩政の中心であった二之丸御殿の北側に、初代藩主義直によって造営され、その後、地割を拡大するなどしながら、文政期の十代藩主斉朝によって大きな改変が加えられた。明治期になり名古屋城が陸軍省所管になると、二之丸御殿は除却され、庭園も一部を残してその姿を失うこととなったが、往時の姿を残している部分を中心として、文化財保護法に基づき、昭和28年（1953）３月31日に名勝に指定された。

昭和40年（1965）からは名古屋市が管理団体となったが、名勝名古屋城二之丸庭園の取扱いは明確ではなく、樹木の繁茂や石組みの崩落等により庭園としての姿が見えにくい状況となっていた。これらの状況を改善するため、名古屋市は、平成21年度に名古屋城二之丸庭園に関する検討会、平成22年度に庭園部会を設置し、保存管理･修復整備方針の具体的な検討を開始し、平成24年度に『保存管理計画書』を策定した。『保存管理計画書』の中では、これまでの調査の整理を行い、改めて二之丸庭園の本質的価値を明確にし、その価値が発揮される保存管理の指標を設定するとともに、各構成要素の現状を把握し、保存管理上の課題整理が行われた。また、保存管理及び修復整備の方針を定めるとともに、庭園の価値と魅力について広く理解を深めるため、公開・活用に関する方針が定められた。

上記で定められた方針に基づき、樹木の生長や石組の崩壊等により損なわれた江戸時代の大名庭園の景観を回復し、名勝庭園にふさわしい庭園に戻すため、名古屋市では平成25年度から保存整備に着手をした。保存整備は豊富に残された絵図や幕末の写真等の資料の検討や発掘調査成果などに基づいて、修復・整備を行っていくこととなった。これにより平成25年度より名勝名古屋城二之丸庭園の残存状況や往時の姿を確認することを目的として調査を進めることとなった。

第４章　名勝名古屋城二之丸庭園の位置と環境

第１節　地理的環境

名古屋市は本州中央部の濃尾平野に位置し、伊勢湾に南面して緩やかな東高西低の地勢にある。市域の北から南にかけては庄内川・矢田川が、東から南にかけては山崎川・天白川・扇川が流れ、伊勢湾に注ぐ。また、市の中心部には、名古屋城築城に際して開削された堀川が、台地部の西裾に沿って南北に通じている。

地形は、大きく丘陵・台地・低地の３つに分けることができる。この地形特性は、東から西に向かって傾斜する地質構造に起因している。市域の丘陵地帯は標高30.０～100.０m程度であり、北東部から南の知多半島へと直線的に連なっている。市域中心部は、標高5.０～15.０mの平坦な台地地形を呈する。台地は６～９万年前に海底堆積物が隆起してできたといわれる洪積台地であり、熱田台地と呼ばれ、名古屋城はこの熱田台地の北西端に位置している。

名古屋城の位置する熱田台地は、名古屋城付近から熱田神宮付近までの南北15km程度、東西は広いところで３km程度の細長い台地である。西面と北面が断崖になっており、断崖の下には低地が広がり、その西側には庄内川、木曽三川が流れるという天然の要害であった。一方、南と東には城下町の建設が可能な比較的平坦な台地が広がり、その南端には熱田の町と港、東海道が位置した。この立地は軍事面だけでなく、文化や交易の栄える都市を築くために相応しい場所として、家康が選定したものと言われる。

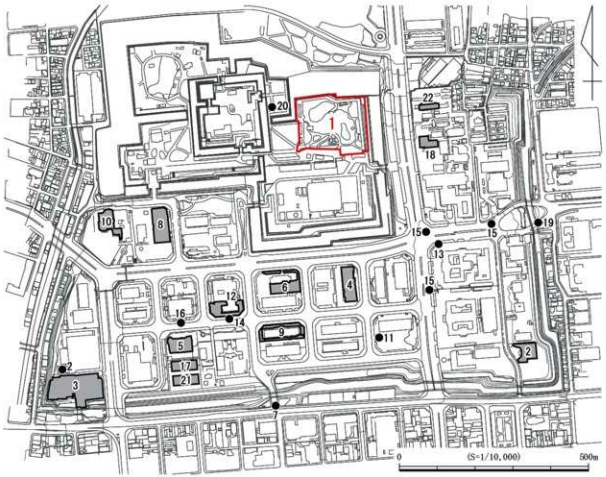
名古屋城の中心部は本丸、二之丸、西之丸、御深井丸からなり、各曲輪の標高は12～15mである。東と南には空堀を挟んで武家地として利用された三の丸が広がる。北と西が段丘崖に面し、比高差は10mほどで、西には濃尾平野が広がる。台地の西側に沿って築城に伴って開削された堀川が流れる。この堀川と本町通で、中世以来の宿であり信仰の中心でもあった熱田と結ばれる。現在は、本丸、二之丸、西之丸、御深井丸と三之丸外堀が特別史跡に、二之丸庭園が名勝に指定されている。

名古屋城の縄張は、方形で直線状の曲輪で構成される。城内の通路などの構造は非常に単純なものであるが、各曲輪を土橋でつなぐとともに枡形や馬出を用いて、巧妙に曲輪が配置され、強固に防衛がなされている。三之丸は堀と土塁で、三之丸を除いた各曲輪は北と西を水堀、東と南を空堀と土塁で、本丸は四方を空堀と土塁で囲まれる。

名勝名古屋城二之丸庭園の位置する二之丸は、本丸の東にあり、本丸大手馬出及び本丸搦手馬出に接する。二之丸の二之丸庭園は二之丸の北部に位置する。西には二之丸大手門が、東には二之丸東門が位置し、二カ所の門は本丸と同じく枡形門である。櫓は北東、南東、南西隅と南面の中程に建てられるとともに、二之丸庭園の北側には、北西隅に迎涼閣、北面の中程に逐涼閣が建てられていた。門部分は多門櫓で囲まれ、これ以外の外周の多くは土塀で囲まれていた。

第２節　歴史的環境

【江戸期】 名古屋城は慶長14年に築城の決定がなされたが、尾張の中心地であった清須から町ごと移転する「清須越」によって城下が形成された。城が築かれた地は、中世には那古野城が位置したが、それらの遺構を引き継ぐのではなく新たに縄張がなされた。徳川家康の命により築城は慶長15年に着手され、20大名による公儀普請で行われた。天守の作事は慶長17年に完了し、元和元年に本丸御殿の作事も完了したよ



	地点名	調査年	調査主体	文献
1	**名古屋城二之丸庭園**	2013～2015	**名古屋市観光文化交流局 名古屋城総合事務所**	**『名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書』**
2	名古屋市公館地点	1987～1988	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡-1・2・3次調査の概要』
3	愛知県図書館地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』
4	名古屋第一地方合同庁舎地点	1988	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』
5	簡易家庭裁判所地点	1990～1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』
6	愛知県警察本部地点	1991	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』
7	本町御門地点	1991	名古屋市教育委員会	『名古屋城本町御門跡発掘調査概要報告書』
8	中部電力地下変電所地点	1992～1993	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書-遺構編・遺物編』
9	愛知県三の丸庁舎地点	1993～1994	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』
10	名古屋市能楽堂地点	1993～1994	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』
11	無線統制室地点	1995	愛知県教育委員会	『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
12	名城病院地点	1995～1996	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』
13	地下鉄出入口地点	1998	名古屋市教育委員会	『名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査報告書』
14	下水道管敷設地点	1999～2000	名古屋市教育委員会	『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』
15	NTT電話工事地点	2000	(株)パスコ	『名古屋城三の丸遺跡-平成12年度NTT電話工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
16	ガス管埋設工事地点	2001	(株)パスコ	『名古屋城三の丸遺跡-ガス管埋設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
17	地方簡易裁判所庁舎地点	2001	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅵ』
18	国立名古屋病院地点	2002	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』
19	東清水橋東交差点地点	2002	名古屋市教育委員会・(株)パスコ	『愛知県埋蔵文化財情報19』
20	名古屋城本丸搦手東門地点	2003・2005	名古屋市教育委員会・(株)パスコ	『特別史跡名古屋城跡本丸搦手馬出石垣修復工事発掘調査報告書-元御普殿門地点の調査』
21	地方簡易裁判所合同庁舎地点	2006～2007	愛知県埋蔵文化財センター	『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』
22	名古屋医療センター職員宿舎地点	2011	国立行政法人国立病院機構 名古屋医療センター・ 株式会社イビソク	『名古屋城三の丸遺跡』

第３図　名古屋城二之丸庭園遺跡周辺の過去の調査

うであるが、元和６年には初代藩主である徳川義直は二之丸へ移徙している。

二之丸に移った義直は、庭園の造営に着手したと考えられている。義直の整備した庭園は儒教の影響を色濃く映したものとなっており、この義直の整備した庭園を描いた絵図が『中御座之間北御庭惣絵』（名古屋市蓬左文庫蔵）として残されている（巻頭図版２）。

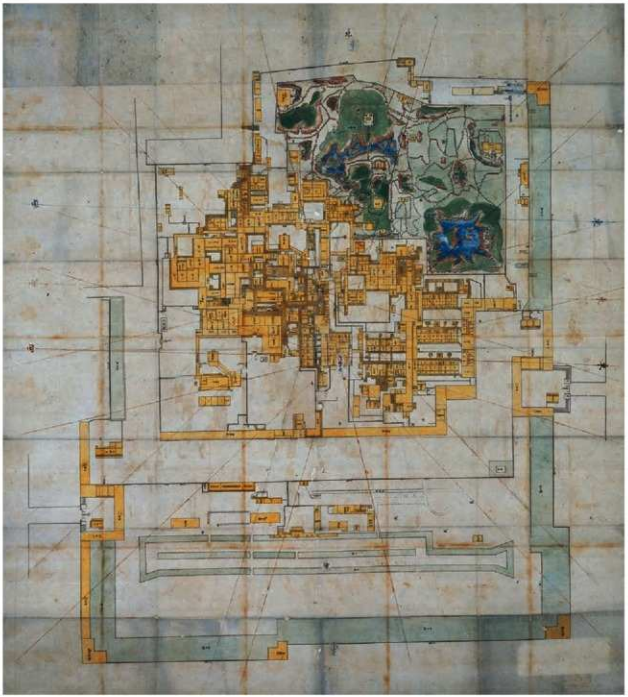
慶安４年（1651）、二代藩主である光友が庭園内に「聖堂」を建立したとの記録が残されており、光友は義直の没後すぐに庭園の改修に着手したことが推察される。『金城温古録』に収録されている「北御庭古図」がこの時代の庭園を示していると考えられている。

文政期（1818～1830）には十代藩主斉朝により庭園は大きく改変された。この時期の庭園を描いた絵図として、『御城御庭絵図』（名古屋市蓬左文庫蔵）（巻頭図版３）や『御城二之丸図』（名古屋城総合事務所蔵）（第４図）が残されている。『御城御庭絵図』に描かれた庭園は、義直が造営した北御庭の改修に加えて東側にも大きく拡張され、茶席を伴う庭園や園池等が設けられており、二之丸庭園はこの時期に最も隆盛したと考えられている。

【明治～大正期】 明治６年（1873）、陸軍省管轄となると二之丸御殿の跡地には兵舎が建設され、二之丸庭園も大きく変容した。庭園の東半では、兵舎建設に際し権現山の東部が削平を受けるとともに、園池を埋め立てて兵舎が建設された。一方、北御庭の大部分は、現在の二の丸茶亭の辺りに建てられていた将校集会所の庭として保存されるとともに、将校集会所の南側には前庭が新たに整備された。

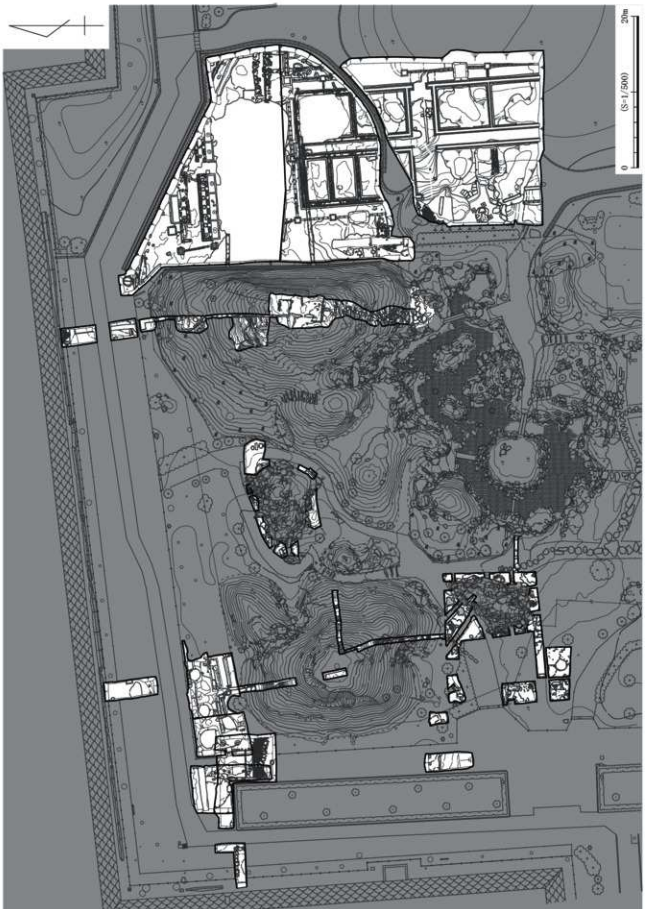
【昭和期】 昭和20年（1945）の終戦を受けて二之丸は大蔵省の所管となり、昭和23年（1948）から38年（1963）までは名古屋大学や財団法人学徒援護会等が利用し、二之丸の兵舎も校舎や寮として転用された。昭和28年（1953）に北御庭の一部と前庭が名勝指定を受け、昭和40年（1965）に名古屋市が管理団体となり、昭和42年（1967）から一般公開が開始された。

昭和48年（1973）、49年（1974）には残されていた兵舎の内２棟が火災に遭い、昭和49年に二之丸は、大蔵省から名古屋市へ無償貸付された。昭和50年（1976）前後には名古屋市土木局や名古屋市教育委員会による発掘調査が行われ、北御庭の園池東端、東御庭の霜傑、暗渠、南池といった庭園遺構が検出され、『御城御庭絵図』に描かれた庭園の一部が地下に残されていることが確認された。発掘調査の成果に基づき、昭和53年（1978）には東庭園が整備された。



第４図　御城二之丸図

第５図　調査区位置図（第１次〜第３次調査）



第６図　遺構完掘図（第１次～第３次調査）

第７図　御城御庭絵図（第１次～第３次調査範囲拡大）

第５章　既往の調査と調査方針

第１節　既往の調査

名古屋城二之丸庭園は、大きく名勝指定範囲と指定範囲外に分けることができる。

名勝指定範囲内においては、近世の庭園がよく保存されている部分であるが、平成25年度に行われた調査まで発掘調査は行われていない。そのため築山や池など地表に表出した部分については多くの情報や研究が存在するが、地下の状況については全く情報がない状態であった。

名勝指定範囲外については、現在の東庭園において整備に伴った調査が行われている。調査は昭和49年（1974）に当時の名古屋市土木局緑地部による「二之丸庭園の拡充復元計画」を契機として行われた。昭和50年（1975）に市土木局緑地部による試掘、昭和51年（1976）に市教育委員会による第１次発掘調査、昭和52～53年に市教育委員会による第２次発掘調査の３回にわたって調査が行われている。土木局の試掘では簡易な報告書、市教委第１次調査では概要報告書が刊行されているのみで、市教委第２次調査は未報告となっている。

市土木局による試掘では、北園池東端部分の石組みや橋基礎、南池の一部が確認された。市教委による第１次調査では、庭園の範囲確認と残存状況確認が目的がとされ、排水溝や排水桝、塀基礎、茶席である「霜傑」などが確認された。市教委による第２次調査では、それまでに確認された遺構等の再度の確認と写真測量等による記録が行われた。

名勝指定範囲外においては、近代以降の兵舎等が建てられていた部分では破壊を受けているが、それ以外の部分については庭園遺構が良好に保存されている状況が確認されてきた。昭和49～53年にかけての調査成果に基づき、北園池東端や霜傑、暗渠遺構、南池が整備をされている。

第２節　調査の方針と方法

調査は名勝名古屋二之丸庭園の名勝指定範囲を中心として行った。調査位置については、事前に庭園部会の指導を受け調査区の決定をした。名勝指定範囲外は特別史跡名古屋城跡の未告示地域となっている。調査に際し、名勝指定範囲内については名古屋市教育委員会文化財保護室を通して文化庁と、名勝指定範囲外については名古屋市教育委員会と協議および指導を受け、現状変更の手続きを経て調査に着手した。

調査は平地部分については、基本的に重機による表土掘削を行い、包含層以下については人力による掘削を行った。築山および重機を用いることができない平地部分についてはすべて人力による掘削を行った。掘削により発生した排土については、調査区脇に仮置きをした。掘削は『御城御庭絵図』等に描かれた文政期に整備をされたと考えられる近世後期の遺構面までとし、遺構についても検出までを基本とした。一部確認のため遺構を掘削する際も、半截等の埋没状況を確認できる形での掘削を行い、記録をすることとした。また、陸軍の兵舎等の遺構についても名古屋城の歴史を示すものであるため、記録を作成することとした。撹乱などによって破壊されている部分が確認された場合には、地山高や旧地形、名古屋城築城期の盛土の状況を確認するために一部で掘削を行った。

調査の記録は図面と写真を中心として行い、平面図は写真測量により、断面図は手書きにより図面を作成し、写真はブローニサイズおよび35㎜カラーリバーサルと白黒ネガフィルムによる撮影と、デジタル一眼レフカメラによる撮影を併用して行った。また、一部の石組み等については３次元レーザー測量も併せて行った。調査終了後は、山砂による遺構保護層を設けた上で、重機を用いて排土による埋め戻しを行った。

第６章　調査の成果

第１節　発掘調査

A　笹巻山（第８～10図、写真１・２）

笹巻山は、文政期の庭園造営の際に作られた築山で、『御城御庭絵図』には石組の山として描かれる。現状では築山の南側に滝組が認められるが、『御城御庭絵図』では滝組は見られない。

笹巻山およびその周辺の調査は平成25年度に行った。平成25年度の笹巻山およびその周辺の調査は、名勝名古屋城二之丸庭園での初年度の調査であり、層序についての判断材料もなかったため慎重な掘削となった。また、文政期において庭の改変があったため、その際に大きく造成されているとの想定の下、調査を行った。その結果として、平成25年度調査時点では、多くの部分で近代以降の盛土上面を文政期以降の遺構面として捉えていた。平成26年度以降の調査成果から、平成25年度に文政期以降の遺構面とした面は近代の遺構面であり、近世の遺構面はさらに下部にあたることが明らかとなった。そのため、平成25年度の調査は多くの部分が近代までの調査となっている。

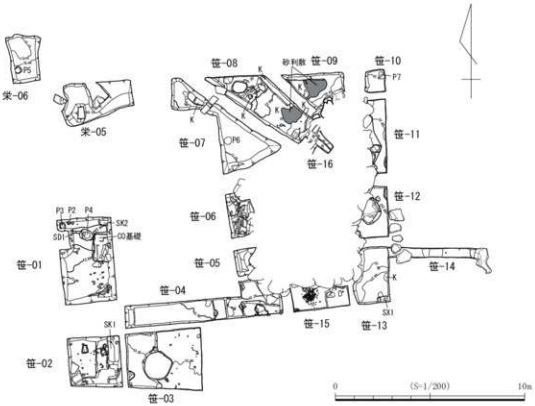
写真１　笹巻山 調査着手前（南から）

写真２　笹巻山 南礫集積前景（南から）

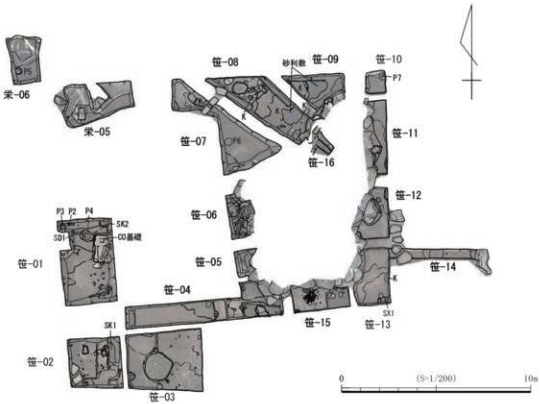
（１）基本層序

笹巻山周辺では、最上層は植栽等整備の際に盛られたと考えられる表土となっている。表土の厚さは0.2～0.3mほどである。笹巻山の南側には現在二の丸茶亭が建てられているが、この茶亭の建設が昭和44年であり、それに付随した盛土とそれ以降の盛土が一体となっていると考えられる。表土の下部には近代以降の盛土が確認された。盛土の厚さは場所により異なるが0.3～0.5mほどである。この盛土中にはほとんど遺物が含まれない。他の部分の調査から、明治以降陸軍省の管理になってから大部分において、厚い部分で1.0mほどの盛土がなされた上に兵舎等の建設がされていることが確認されており、この盛土についても、陸軍期以降早い時期になされたと考えられる。

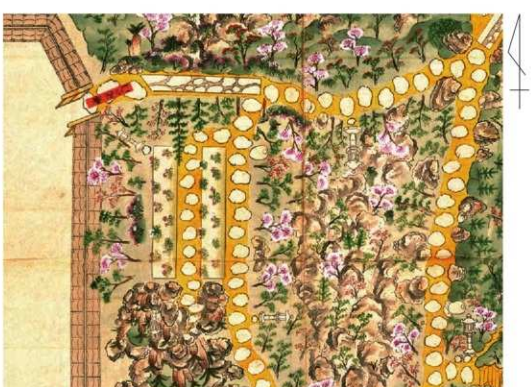
近代以降の盛土の下部では、名古屋城築城期に整地のため施されたと考えられる盛土が確認された。築城期の盛土が確認できた部分は多くはなく、厚さが確認できたのは笹巻山の南西部の笹-04区だけであるが、この部分では0.4mほどを確認した。この築城期の盛土は、地山である熱田層の黄色や白色の5.0cmほどの粘土ブロックを斑状に多く含む特徴的な土であり、名古屋城内の本丸や西之丸等の他地点でも確認されている。この盛土層にも遺物はほとんど含まれない。近代以降の盛土の下部では、中世の包含層または遺構埋土と考えられる明褐色の均質な砂質土が確認された。やはり笹-04区の一部での検出にとどまるため、層厚や時期については不明である。地山については笹巻山周辺では確認できなかった。



第８図　笹巻山　遺構平面図・オルソ画像



第９図　笠巻山　遺構平面オルソ画像合成図



第10図　御城御庭絵図（笠巻山拡大）

（２）検出遺構

近代以降

笹巻山の西から南西側にかけての笹-01～03区と笹-04区の西半は、将校集会所などによると考えられる撹乱が深く、表土下1.0mほどまでの掘削を行ったが、この撹乱は近代の盛土を掘り込み、近世面は確認できなかった。この撹乱中にはコンクリートブロックなどが多く含まれていた。近代以降の盛土には遺物がほとんど含まれず、造成の際に意識して物の混じりの少ない土を選んでいる可能性がある。また、この盛土の上面は標高値が13.0～13.5m前後であるが、将校集会所などが建てられた陸軍期における生活面であった可能性がある。

この時期の明確な遺構は認められないが、笹巻山南側の笹-15区の滝組下には小礫の集積が認められ、石組と合わせて滝を表現していると考えられる。また、笹巻山北側の笹08～09区の現在園路となっている下からは、一部で砂利敷きを検出しており、近代の園路の一部の可能性が考えられる。

近世

近世の盛土は、名古屋城内の他の調査地点で確認されている、築城に伴う造成土と同様な地山の粘土ブロックを多く含む土である。２層に分層できる部分もあったが、他の調査区の成果から時間差ではなく、埋土の違いである可能性が考えられる。

笹巻山の西側の笹-06区では築山を構成する石から続く近世盛土に据えられた石を、近代の盛土中に確認しており、築山の裾部分は埋められている可能性が高い。その一方で、現在地表面に出ている石の中には近代の土の上に据えられているものもあり、石の組み直しが行われている可能性がある。笹巻山の中に設定した笹-16区では、築山自体を構成する土の中には近代以降の遺物は混じらないことから、近世に構築されたものが残されている可能性が高い。

近世以前

笹-04区の東部では近世の盛土の下で、明褐色の均質な砂質土を検出した。笹巻山の南西部の一箇所での検出であり、遺物も確認されなかったため時期や性格については不明であるが、名古屋城三の丸遺跡において確認されている中世の土に酷似することから、中世の遺構埋土または包含層の可能性が考えられる。

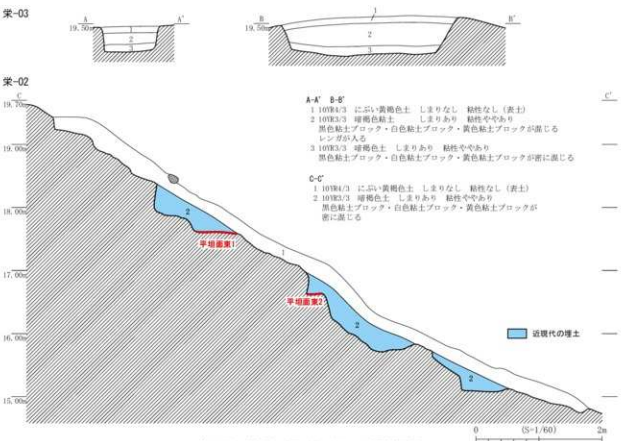
笹巻山の状況としては、笹巻山本体については文政期の状況が残されている可能性が高い。しかし、少なくとも笹巻山の地際周囲に関しては近代以降に造成による盛土や石の組み直し等の手が加えられていると考えられる。

B　栄螺山（第11～16図、写真３・４）

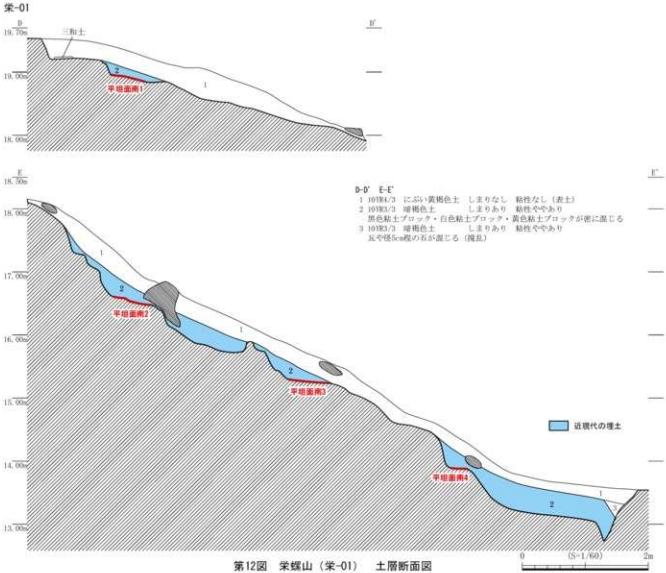
栄螺山の調査は、平成26年度に行った。調査は栄螺山を廻る園路の確認を目的としている。調査前に目視による観察によって、園路の平坦面と思われる地形を確認した。その結果、山頂部から東方向へ向かってトレンチ状に調査区を設定した（栄-02区）。また山頂部から南方向へ向かうトレンチを、南斜面の滝に沿うように設定した（栄-01区）。これは南斜面の滝を渡るため石橋が設置されており、園路がこの石橋に通じているか確認することを目的としている。山頂部には昭和８年（1933）に忠霊祠が建立された記録が残っており、その確認を目的としてトレンチ状の調査区を設定した（栄-03区）。掘削は全て人力で行い、掘削土は各調査区の脇に仮置きした。調査後は、人力によって仮置きした土を埋戻した。

写真３　栄螺山（栄-01）
完掘状況（南から）

写真４　栄螺山（栄-02）
完掘状況（東から）



第11図　栄螺山（栄-02・03）　土層断面図



第12図　栄螺山（栄-01）　土層断面図

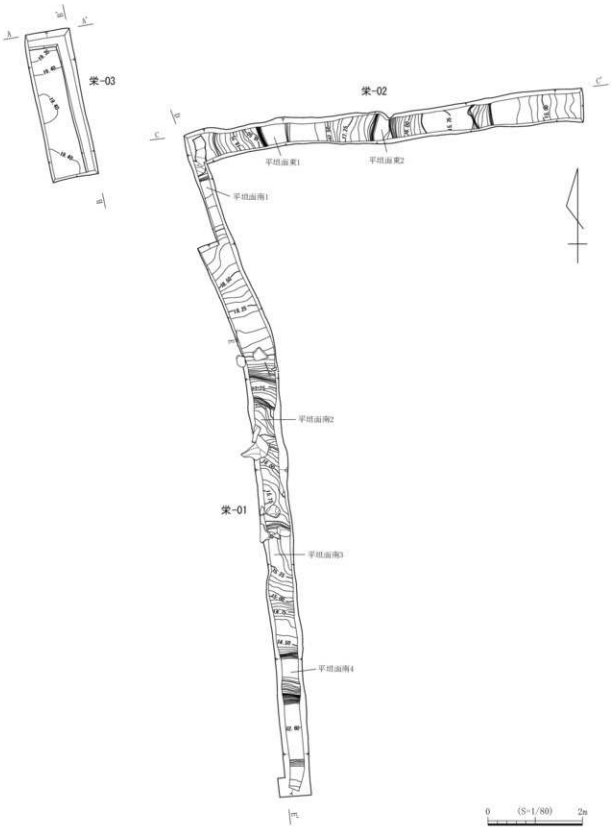
（1）基本土層（第11・12図）

基本土層は二層で、上層が黄褐色土の表土である。下層は暗褐色土で黄色粘土ブロックが多量に混入している。山頂部（栄-03区）では、この二層の間に暗褐色粘土が堆積しており、黄色粘土の他にレンガが混入している。明治期以降に土地の改修が行われていると考えられる。

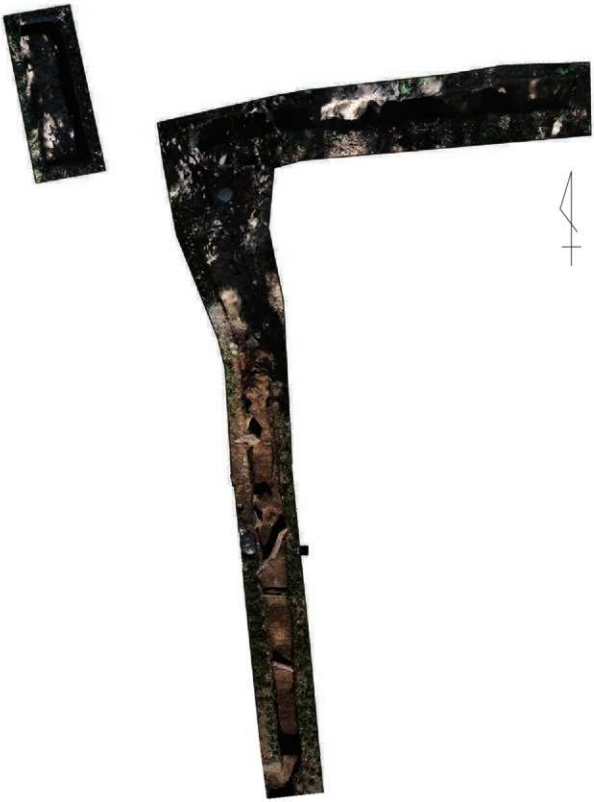
（2）検出遺構

平坦面南１～４（第12～15図、写真３）

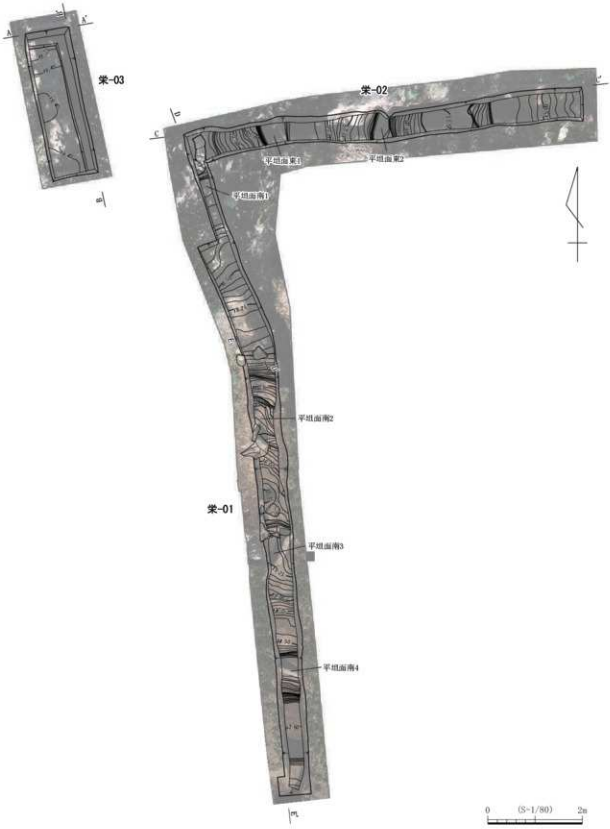
栄-01区では山頂付近で三和土の跡を検出した。この三和土から50cm南で築山を削って平坦面を構築している（平坦面南１）。平坦面には暗褐色土が堆積しており、その上に表土が堆積する。続けて栄-01区の北壁からおよそ６ｍ南で平坦面南２を、およそ7.5ｍ南で平坦面南３を、そして11.5ｍ南で平坦面南４を検出した。これらは平坦面南１と同様に築山を削って平坦面を構築しており、そこに暗褐色土が堆積している。平坦面南１～３は良好に遺存しているが、平坦面南４は南側の法肩が崩落しており遺存状態は良好ではない。平坦面南３と４は現在でも南斜面の滝に架かる石橋に通じていることが分かった。『御城御庭絵図』では、栄螺山の南斜面では山頂部から４本の園路が描かれており（第16図）、栄-01区ではこの園路を確認できたと考えられる。



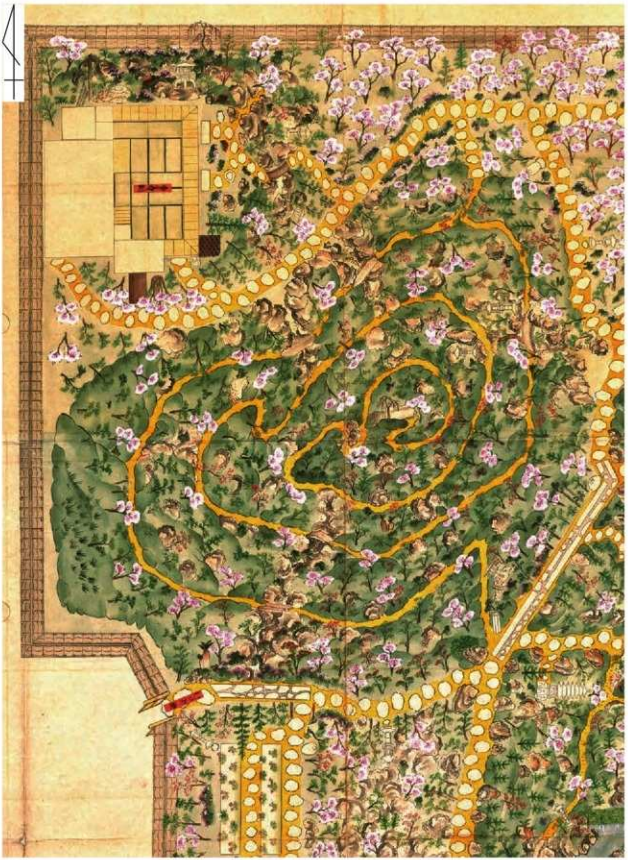
第13図　栄蝶山　遺構平面図



第14図　栄蝶山　オルソ画像



第15図　栄螺山　遺構平面オルソ画像合成図



第16図　御城御庭絵図（栄蝶山拡大）

平坦面東１～２（第11・13～15図、写真４）

栄-02区では二つの平坦面を確認することができた（平坦面東１～２）。平坦面東２が、栄-01区の平坦面南４と同様に法肩が崩落しているものの、遺存状態は良好であると言える。『御城御庭絵図』では東斜面に３本の園路が描かれており（第16図）、このうち東側２本が二つの平坦面に該当するものと考えられる。なお、栄-03区では昭和８年（1933）に建立された忠霊祠の跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

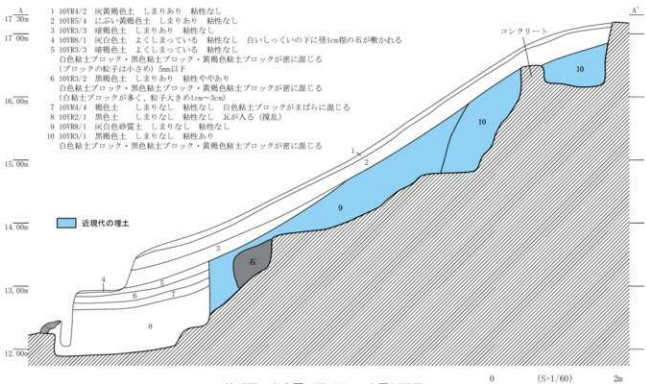
滝跡

栄-01区では滝の一部と考えられる自然石を確認した。現在残っている滝よりもやや上まで滝は延びていたと考えられる。

C　多春園（第17～22図、写真５～11）

多春園の調査は平成26・27年度に行った。調査区は名勝指定範囲の北西にあたる多-01～04区と、栄螺山北側の栄-04区である。調査は栄螺山の北側にある茶席（多春園）とそれに付随する遺構の痕跡、そして栄螺山北斜面の滝に通じる園路の確認を目的としている。

多-01区では現在の園路に沿ってミニバックホウで東西方向へトレンチ状に掘削を行い、堆積状況を確認した。コンクリート基礎や土管といった埋設物が多く、それらを取り除いたところ、三和土を検出した。江戸時代の地盤を確認できたため、それより上の層はミニバックホウで掘削し、そこから人力による掘削で調査を進めた。掘削土はキャリーダンプによって調査区の東側へ仮置きし、調査後にミニバックホウで埋め戻した。



第17図　多春園（栄-04）　土層断面図

多-02～04区は２カ年に渡って調査を行った。第２次調査（平成26年度）では現在の生垣を挟んで多-02・03区に分けて調査した。第２次調査で多春園の痕跡が良好であったため、第３次調査（平成27年度）は多-02・03の境を調査し、多春園の全容を確認する目的で実施された。多-01区と同様に近現代の層をミニバックホウで掘削し、その後人力によって掘削した。掘削土は現在の園路にダンプトラックで仮置きし、調査後は遺構面に人力で山砂を５cm盛土した後に、仮置きした土で埋め戻した。

栄-04区は栄01～03区と同様に人力で掘削した。掘削土は調査区脇に仮置きし、調査後に人力によって埋め戻した。

（１）基本土層（第17・22図、写真６・７）

栄-04区と多-01～04区で基本土層が大きく異なるため、二つに分けて記述する。

栄-04区では、栄螺山の南および東斜面と異なり、近現代に土地の改変が著しく行われた様相を呈しており、撹乱が多い。斜面の上では黒褐色土（第17図10層）が堆積し、その上から灰白色砂質土（第17図９層）が堆積している。この二層は多-01区との境付近で大きく削平されており、撹乱土が堆積している。撹乱は四層（第17図５～８層）に細分できる。さらにその上に表土が堆積しており、表土（第17図１～３層）は三層に細分できる。

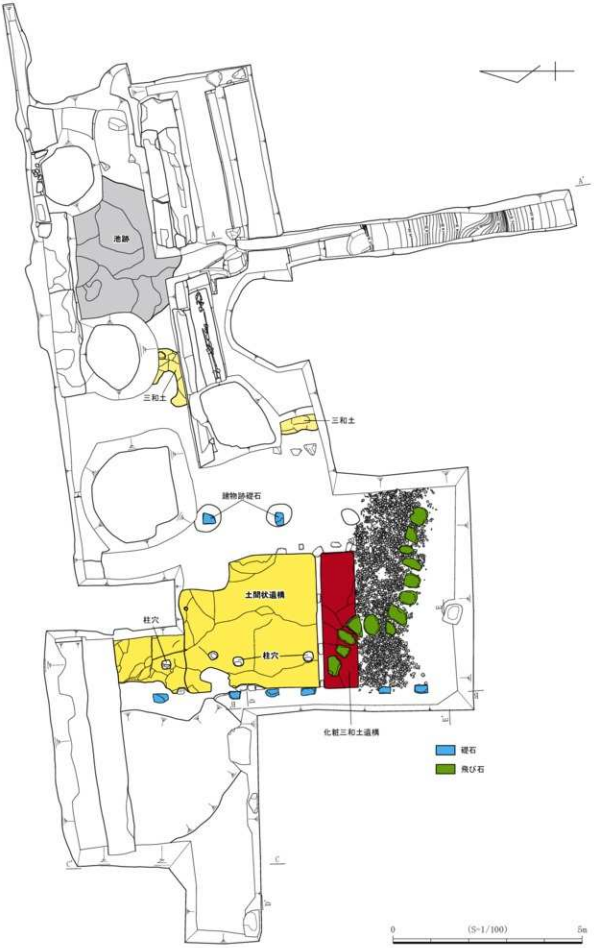
多-01～04区では、大きく分けて三層に分類できる。現地表面から0.1～0.2mまで現代の表土（第22図１層）が堆積し、0.8～1.0mまでは近現代以降の盛土（第22図４・７～25層）が堆積している。その下には黒色粘質土（第22図５層）とにぶい黄褐色粘質土（第22図６層）が堆積しており、これらは御庭の廃絶に伴う埋土であると考えられる。

（２）検出遺構

池跡（第18～20図、写真５）

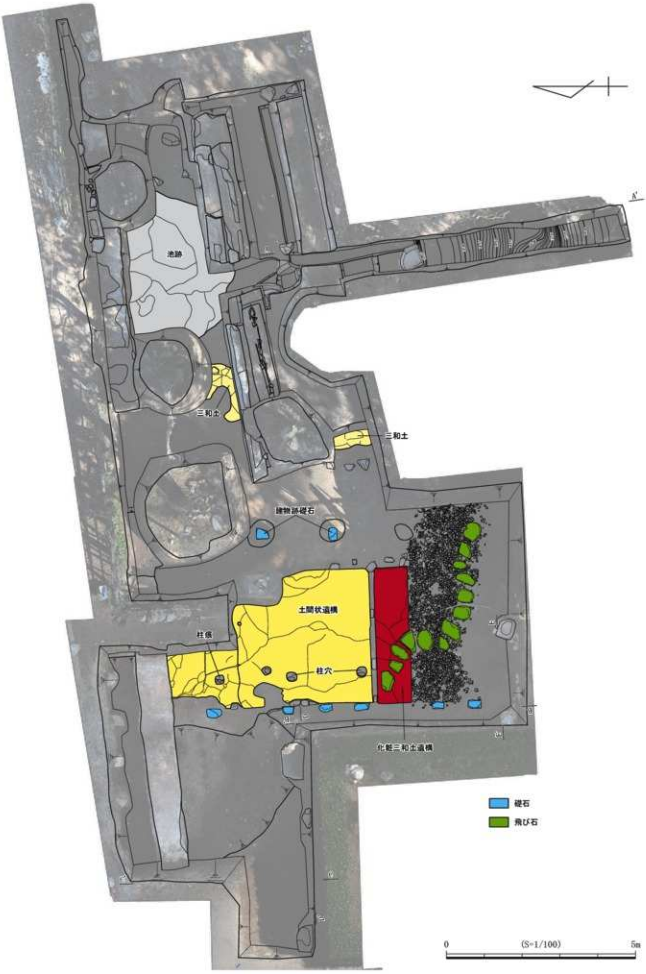
栄螺山北ではコンクリート基礎などの近現代の撹乱を確認した。調査区のほぼ全域にわたって江戸期の遺構面が削平されている。ただし調査区北東で、コンクリート基礎の下に江戸時代の遺構面を確認することができた。多-01区の北東では白濁色の漆喰を貼ったような痕跡を検出した。東から西に向かってなだらかな傾斜が形成されており、『御城御庭絵図』に描かれている多春園の東側に位置する池跡である可能性が推測される（第21図）。漆喰は全て粉砕されており、良好な状態であるとは言えず、絵図に描かれている自然石も検出できなかった。調査区中央付近および南壁付近では、漆喰跡と同一の遺構面で、淡黄褐色の三和土を検出した。絵図には描かれていないが、池跡や多春園に伴う基礎であると考えられる。

写真５　多春園（多-01）　池跡検出状況（東から）

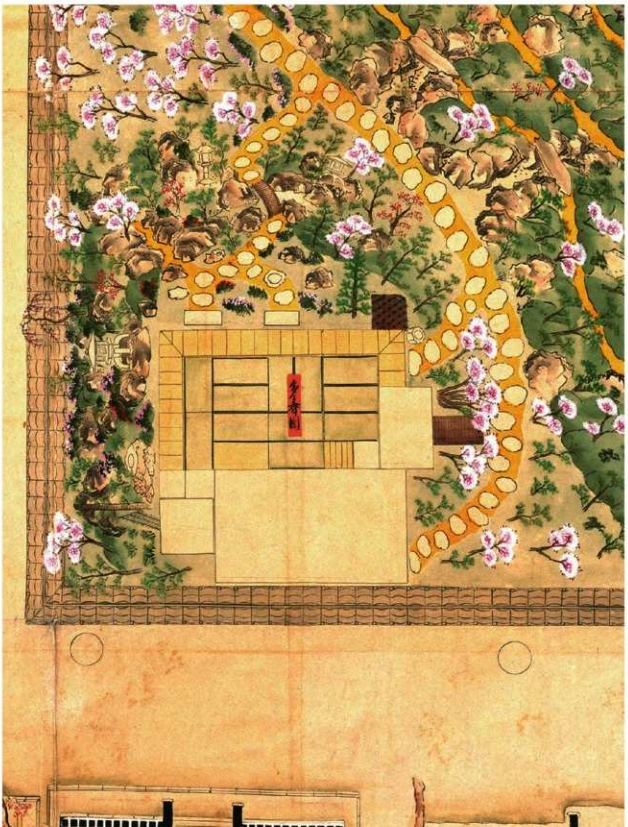


第18図　多春園　遺構平面図

第19図　多春園　オルソ画像



第20図　多春園　遺構平面オルソ画像合成図



第21図　御城御庭絵図（多春園拡大）

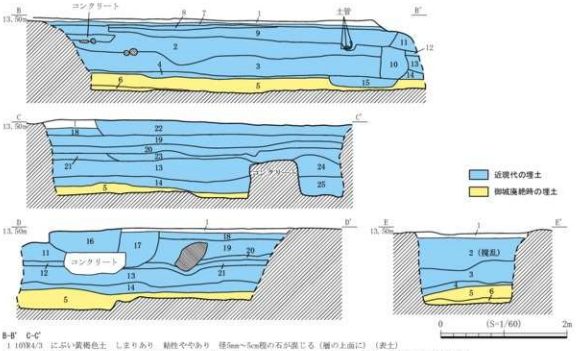
園路

園路は調査区内では検出されなかった。明治期以降の撹乱で削平されたものと考えられる。栄-04区ではコンクリート基礎などの明治期以降の改修が著しく、栄螺山の園路を確認することはできなかった。また『御城御庭絵図』に描かれている飛び石（第21図）についても、明治期以降に削平されているものと考えられる。

土間状遺構（第18～20図、巻頭図版４・５、写真８）

第２次調査で、多-02区西壁沿いと多-03区東側において三和土を検出した。そして第３次調査ではその全容を確認した。東西に376.0cm、厚みは3.0cmを測る。南北方向の規模は北側がコンクリート基礎によって削平されているため不明である。『御城御庭絵図』には建物西側の裏手に白く塗りつぶされた箇所が見受けられる（第21図）。この三和土がそれに該当しており、土間のような機能を持つ施設と推察される。

三和土の西縁から80.0cm東には穴が穿たれており、柱穴痕と考えられる。柱穴は南北方向に３基検出し、各柱穴ともに平面形は円形で直径24.0cm、柱穴間の距離は188.0cmを測る。また、三和土の西縁に沿っ



B-B′ C-C′

1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりあり 粘性ややあり 径5mm～5cm程の石が混じる（櫛の上面に） （表土）
2 10YR3/3 暗褐色土 しまりなし 粘性あり レンガや径10～15cm程の石・コンクリートが入る（撹乱 明治期以降（新しい））
3 10YR4/3 にぶい黄褐色土 ややしまりあり 粘性ややあり 白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・黒色粘土ブロックが密に混じる 瓦が入る
4 10YR4/1 褐灰色粘質土 ややしまりあり 粘性あり 鉄分含む
5 10YR5/2 黒褐色粘質土 ややしまりあり 粘性あり 白色粘土ブロックが混じる（江戸期の埋土）
6 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土 ややしまりあり 粘性あり（江戸期の埋土）
7 10YR2/1 黒色土 しまりなし 粘性なし 径1cm程の石が混じる
8 10YR6/4 にぶい黄橙砂質土 しまりなし 粘性なし
9 10YR3/1 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 炭化物を含んだ黒土が部分的に層状に入る 瓦や土管が入る（撹乱）
10 10YR2/2 黒褐色土 よくしまっている 粘性なし 径1cm～5cm程の石が混じる（基礎のぐり石か （撹乱 明治期以降（新しい））
11 10YR5/3 にぶい黄褐色土 よくしまっている 粘性なし 白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・黒色粘土ブロックが少量混じる
12 10YR6/4 にぶい黄橙色土 しまりなし 粘性なし 黒色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロックがまばらに混じる
13 10YR3/2 黒褐色土 ややしまりあり 粘性なし しじみ～あさり殻の貝が混じる 瓦がまばらに混じる
14 10YR3/2 黒褐色土 しまりあり 粘性なし 白色粘土ブロック・黒色土ブロックがまばらに混じる
15 10YR2/2 黒褐色土 しまりなし 粘性あり 瓦が入る（撹乱 江戸から明治期のものか）
16 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 地表面に敷かれている小石と同じくらいの石（径5mm程）が混じる
17 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 径3cm～5cm程の石が混じる 瓦が入る（コンクリート基礎の廃り込みか）
18 10YR4/4 褐色土 ややしまりあり 粘性なし 黒色土ブロックが少量混じる 径1cm～3cm程の石が混じる
19 10YR3/4 暗褐色土 よくしまっている 粘性なし 黄褐色土ブロックが混じる 径1cm～3cm程の石が混じる 瓦と近代のビン片が入る
20 10YR2/3 黒褐色土 よくしまっている 粘性なし
21 10YR3/4 暗褐色土 しまりあり 粘性なし 黄褐色粘土ブロック・白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックが混じる
22 10YR2/3 黒褐色土 ややしまりあり 粘性なし 径5mm～3cm程の石が多く混じる（現園路整地時のもの）
23 10YR2/3 黒褐色土 しまりあり 粘性ややあり しっくいがブロックで入る 柑色のたたき（？）が混じる（コンクリート基礎に伴うもの）
24 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまりなし 粘性なし 白色粘土ブロックが混じる 瓦・レンガが入る
25 10YR3/4 暗褐色土 しまりなし 粘性ややあり 瓦が入る

第22図 多春園（多-03・04） 土層断面図

て、正方形の石が埋め込まれている。これらは３基の柱穴列と並行しており、その間隔は柱穴痕と同様に188.0cmを測る。

化粧三和土遺構（第18～20図、巻頭図版４・５、写真８・９）

土間状遺構の南縁と並行して、表面を赤色に化粧している三和土を検出した。東西に376.0cm、南北に89.0cm、厚みは3.0cmを測る。飛び石が４基埋め込まれ、化粧は南縁の立面にあたる部分まで施されており（写真９）、非常に丁寧な作事と言える。土間状遺構と化粧三和土遺構の間には15cmほどの隙間があり、礎石状の石が敷かれている（写真10・11）。ここから石を据えた後にその上から土間状遺構と化粧三和土遺構を構築していることが分かる。

飛び石列（第18～20図、巻頭図版４・５、写真８）

化粧三和土遺構に埋め込まれた飛び石から連続して、飛び石を13基検出した。『御城御庭絵図』に蛇行して描かれた飛び石と酷似しており、絵図とほぼ

写真６　多春園（多-03）西壁　土層断面（東から）

写真７　多春園（多-03）南壁　土層断面（北から）

写真８　多春園（多-04）　土間状遺構・化粧三和土遺構・飛び石列検出状況（南から）

変わらない配置状況であったと考えられる（第21図）。飛び石の周辺には玉石が敷き詰められ、風景が作られていたと思われる。飛び石列の南側では玉石が確認できず、また絵図では飛び石が栄螺山との境界のように描かれていることから、栄螺山の麓はこの近くまで広がっていた可能性が考えられる。飛び石は調査区の東側にも広がっていたと推測される。

礎石列（第18～20図、写真８）

土間状遺構の西縁沿いで、礎石列を検出した。平面形は角が取れた長方形を呈しており、各礎石間の距離は93.８～94.4cmを測る。礎石は６基検出されたが、いくつか抜き取られており、調査区内で計８基あったものと考えられ、土塀の基礎であると推察できる。

建物跡礎石（第18～20図、写真10・11）

土間状遺構の東側では建物跡と考えられる礎石を検出した。礎石の下にはピットが検出されている。礎石は30cmほどの正方形もしくは長方形を呈し、ピットは径62.0cmを測る。土間状遺構に沿って南北方向に３基並び、南側の礎石は滅失している。多春園に関連する建物の基礎と考えられる。

土間状遺構と化粧三和土遺構の下からは建物跡と考えられる礎石を検出した（写真10・11）。礎石は埋め殺されている様相を呈しており、多春園が改修されている痕跡と考えられる。

写真９　化粧三和土遺構　南縁立面（南から）

写真10　多春園
三和土下の建物跡礎石列検出状況（三和土南側）

写真11　多春園
三和土下の建物跡礎石列検出状況（三和土東側）

D　御文庫（第23・24図、写真12～14）

御文庫の調査は平成27年度に行った。園路を挟んだ多春園の西側で、調査区は外-04区である。調査は『御城御庭絵図』に描かれている御文庫の位置を確認することを目的としている。調査区は二之丸西面の石垣天端から東へ延ばし、そこから直角に北へ曲げて、L字型の調査区を設定した。前年度に行った多春園の基本土層を参考に、近現代の堆積層をバックホウで掘削し、その後人力によって掘削した。掘削土は調査区の脇へ仮置きし、調査後は遺構面に人力で山砂を5㎝盛土した後に、仮置きした土で埋戻した。

（1）基本土層（第24図）

基本土層は大きく分けて二層である。現地表面から約1.0mまで近現代の盛土（第24図2・3層）が堆積している。その下に砂利層（第24図4層）と灰黄褐色土（第24図5層）が堆積しており、御文庫基礎の整地層と考えられる。

（2）検出遺構

基礎跡（第23図、写真12・13）

東西方向の調査区北壁沿いに50cm程度の割石や円礫が並べられている状況を確認した。これらは天端と北側側面をそろえるように配石されている。この配石は、トレンチ東壁際で南方向にほぼ直角に曲がり、さらに南へ続く様相を示している。石は北側と東側に面を向けるよう配石されており、『御城御庭絵図』に描かれている御文庫の基礎であり（第24図）、配石の北東角部が御文庫の北東角にあたると考えられる。また、調査区から北側に1mほど離れた箇所で、二ノ丸石垣の西面から石樋が堀に向かって突き出ている。この石樋に接続する遺構がある可能性を考慮して、北側へも調査区を伸ばして遺構の有無を確認したが、石樋へと通ずるような遺構は確認できなかった。

石垣天端（第23図、写真14）

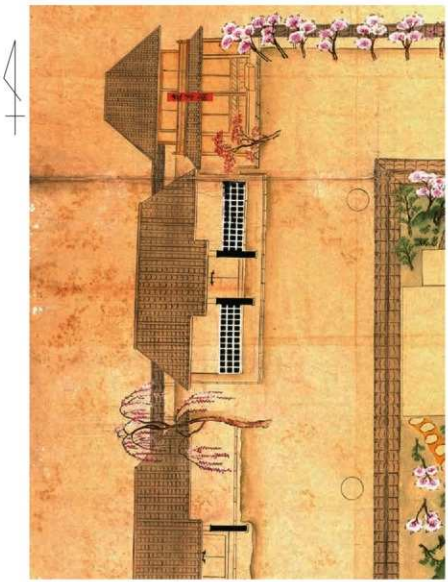
東西方向の調査区西壁では三和土の痕跡を検出した。石垣から江戸時代の地盤まで三和土が施されており、石垣整備のための遺構であると考えられる。

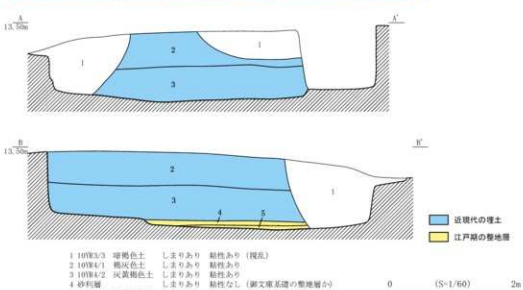
写真12　御文庫（外-04）　基礎跡検出状況（東から）

写真13　御文庫（外-04）　基礎跡検出状況（南から）

写真14　御文庫（外-04）　石垣天端検出状況（南から）

第23図　御文庫　遺構平面図・オルソ画像・合成図





第24図　御文庫　土層断面図・御城御庭絵図（御文庫拡大）

E　二子山（第25～28図、写真15～18）

二子山の調査は平成27年度に行った。栄螺山と権現山の間に位置している築山である。現在は園路で二子山の周りを周遊できるようになっており、『御城御庭絵図』でも同様に周遊できるよう描かれている（第28図）。調査は『御城御庭絵図』に描かれている飛び石の位置を確認し、文政期の地表面を確認することを目的としている。調査区は二子山の周りに沿って設定した。南側に２箇所（二-01・02区）、東側に１箇所（二-03区），北側に５箇所（二-04～08区）の計８箇所である。掘削は全て人力で行い、各調査区の脇に排土は仮置きした。調査後は、人力によって仮置きした土を埋戻した。

（１）基本土層（第25図）

基本土層は三層である。暗褐色土の築山盛土の上に、近現代の表土が堆積している。二-01区の西壁では、築山の盛土が撹乱によって削平されていることを確認した。築山盛土の下では築城期の盛土を確認した。

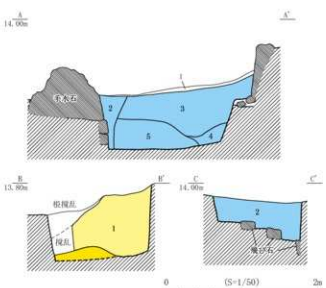
（２）検出遺構

飛び石列（第26・27図、写真15・16）

二-02区では、北東-南西方向に３基並ぶ飛び石列を検出した。これらの飛び石は、北東に向かって階段状に上っていく様相が確認できた。この階段を上っていくと、権現山の山裾方向に到る事ができる。『御城御庭絵図』には二子山の東側で、園路が山の裏手に回り込んでいるように描かれている飛び石列があり（第28図）、園路に高低差があるように見える。階段状の飛び石はこの位置にあたる可能性が考えられる。二-03区では、南北方向に４基並ぶ飛び石列を検出した。二-02区の飛び石列とは反対に、南に向かってわずかながら上っていく様相が確認できた。ここから二子山の東側は高低差が付けられており、絵図にもその様相が描かれていることが推察できる。

写真15　二子山（二-03）　飛び石出土状況（北から）

写真16　二子山（二-02）　飛び石出土状況（東から）



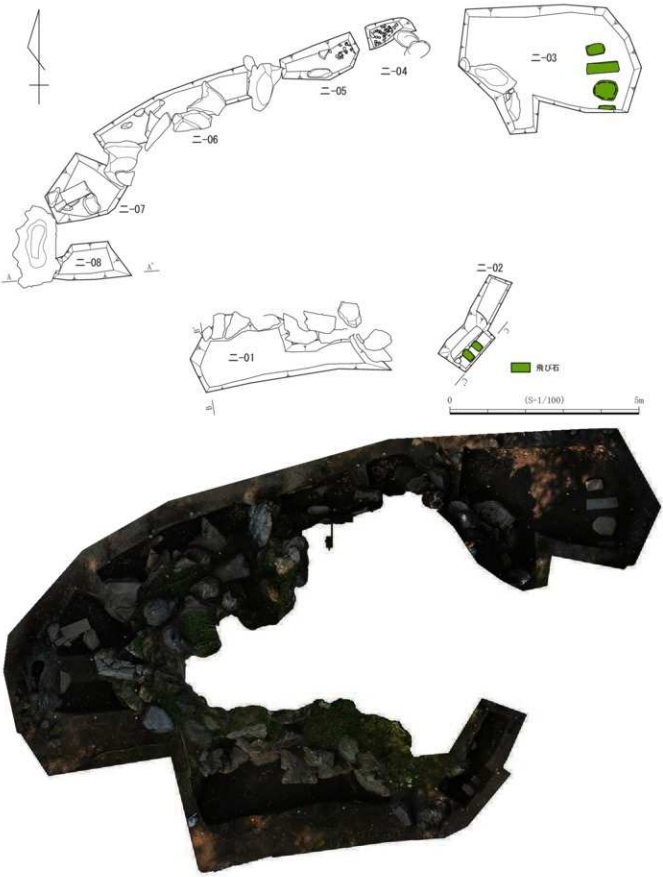
第25図　二子山（二-01・02・08）　土層断面図

写真17　二子山（ニ-06）　完掘状況（西から）

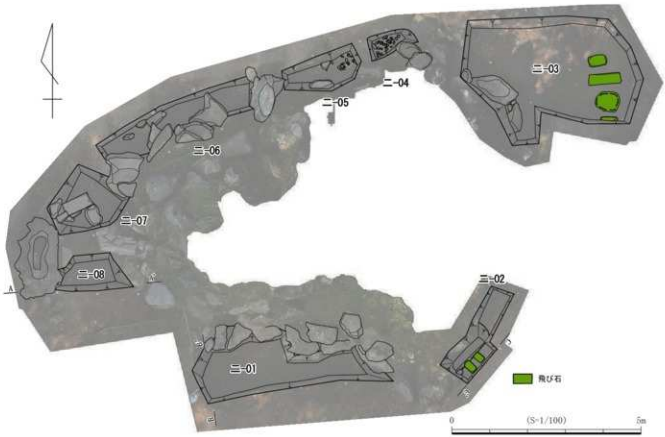
築山（第26・27図、写真18）

ニ-01区では、築山（二子山）を構成している立石の裾を確認することができた。現在見ることができる築山よりも１ｍほど低い場所に位置しており、江戸期では現在よりも１ｍほど低い位置に園路があったと考えられる。これに合わせて前頁の飛び石列の様相から見ても、二子山周辺は現在の姿と比べて起伏にとんだ地形であったと推察できる。

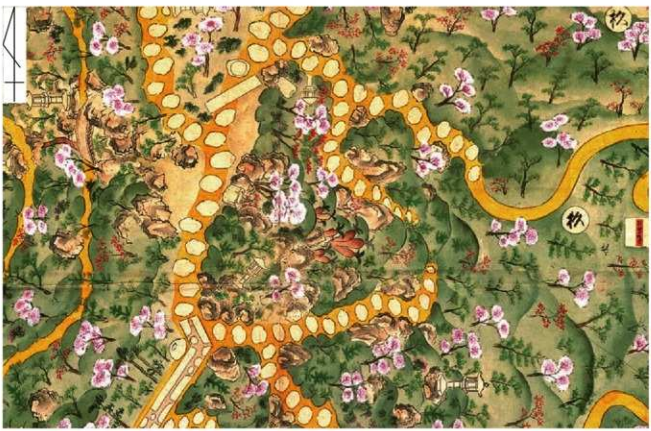
写真18　二子山（ニ-01）　完掘状況（南西から）



第26図　二子山　遺構平面図・オルソ画像



第27図　二子山　遺構平面オルソ画像合成図



第28図　御城御庭絵図（二子山拡大）

F　権現山（第29～33図、写真図版19～24）

権現山の調査は平成26年度に行った。権現山は明治期の兵舎建設時に東半分が削平されており、その一部しか残存していないと考えられていた。権現山の山頂（権-03区）と南側の階段部（権-04区）および階段下の平坦地（権-05区）を調査区として設定した。調査は『御城御庭絵図』に描かれている山頂部の社跡の確認と、改修される以前の階段の痕跡、そして平坦地に描かれている飛び石の確認を目的としている。また、山頂部から北方向へトレンチ（権-01～02区）を設定した。これは絵図で権現山の北斜面に描かれている園路の確認を目的としている。掘削は全て人力で行い、各トレンチの脇に掘削土は仮置きした。調査後は、人力によって仮置きした土を埋戻した。

（1）基本土層（第33図）

土層断面は権-01・02区の東壁で観察した。基本土層は一層である。権-01区でコンクリート基礎の上に黒褐色土（第33図４層）が堆積している。そのため、この黒褐色土より上に堆積する層は全て近現代以降と考え、表土として扱った。

（2）検出遺構

区画状遺構（第29～31図、写真20）

権-03区で区画上に配列された石組みを検出した。長さ90cmの石と45cmの石が組み合わせて並べられており、東西で3.22mを測る。南北は西側で南より1.23mの箇所で削平されており、南北方向の距離は不明である。石材は凝灰岩で、１段で構成されている。『御城御庭絵図』に描かれている拝殿（第30図）に相当する構造物であると推察される。

基壇状遺構（第29～31図、写真20）

権-03区で基壇状の石組みを検出した。西側が削平されているが、正方形を呈すると考えられ、一辺が1.63mを測ると推定される。石材は河戸（こうず）石と呼ばれている中粒砂岩で、１段で構成されている。河戸石は名古屋城の石垣で広範囲に使われている岩石で、名前の由来は採石場所の地名（岐阜県海津市南濃町上野河戸）に因んでいる。『御城御庭絵図』では秋葉社と稲荷社の二つが並列している構造だが（第30図）、上記の区画状遺構との配置では、社殿が一つしかないことになる。絵図が描かれた時期より後世に社殿が建て替えられた可能性が考えられる。

愛宕社基壇（第29～31図、写真22）

権-02区の南面角で、基壇状の石組みを検出した。東西方向に1.48m、南北方向へは1.29mを測り、２段で構築されている。北側は削平されており、南北方向の距離と北面に関しては不明である。『御城御庭絵図』で描かれている愛宕社の基壇であると考えられる（第30図）。『御城御庭絵図』では愛宕社の北側で屈曲する園路が描かれているため、権-02区を拡張して検出したが、園路と思われる痕跡は確認できなかった。

礎石（第29～31図、写真19）

権-02・03区の境で角が取れた長方形の礎石を検出した。長径30cmを測り、長辺が東西を向くように据えられており、愛宕社基壇と東西に一直線上に並ぶ。『御城御庭絵図』では愛宕社と三岳亭が東西方向にほぼ一直線に並ぶように描かれている（第30図）。そのため三岳亭に関わる建物の基礎とみる事ができるが、絵図にある権現山頂上部の塀跡の可能性も考えられる。一石のみの検出であるため、判断が難しく詳細は不明である。

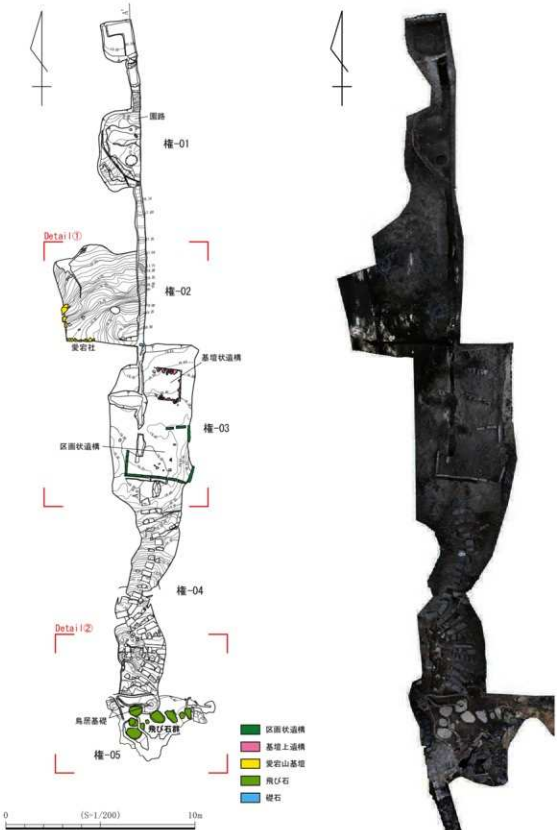
写真19　権現山（権-03）　礎石検出状況（南から）

写真20　権現山（権-03）　区画状遺構・
基壇状遺構検出状況（南西から）

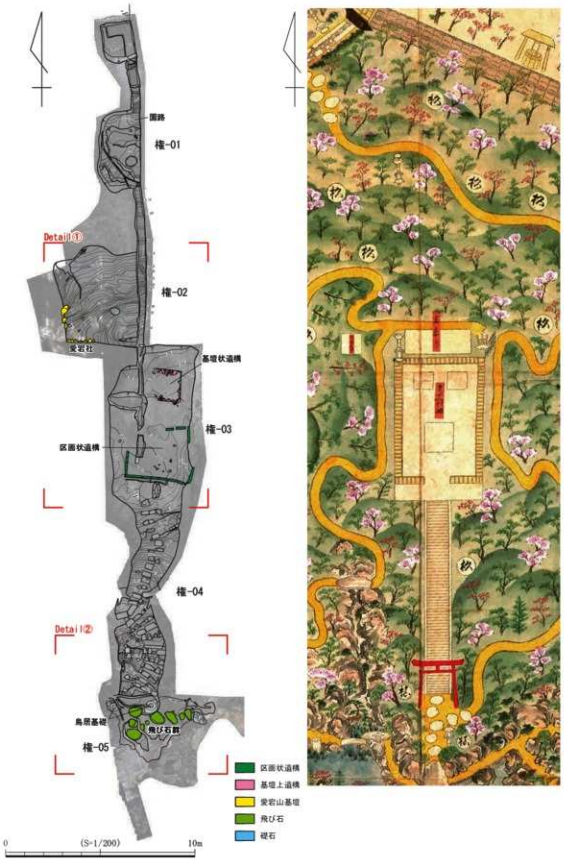
写真21　権現山（権-05）
鳥居基礎・飛び石群検出状況（北から）

写真22　権現山（権-02）
愛宕社基壇検出状況（北西から）

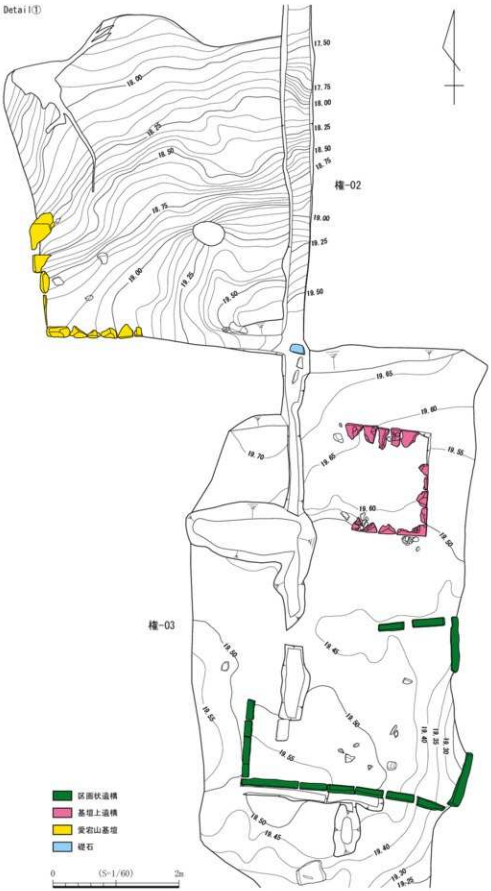
写真23　権現山（権-05）　鳥居基礎検出状況（南西から）



第29図　権現山　遺構平面図・オルソ画像



第30図　権現山　遺構平面オルソ画像合成図・御城御庭絵図（権現山拡大）



第31図　権現山　遺構平面図（Detail①）

第32図　権現山（権-05）　飛び石群平面図（Detail②）

写真24　権現山（権-05）　階段跡検出状況（南西から）

階段跡（第29・30・32図、写真24）

『御城御庭絵図』では、権現山の南斜面に直線の階段が描かれているが（第29・30図）、現在は明治期以降に改変されており、直線ではなく蛇行している。現在使用されている石材は様々であるが、中には河戸石を使用しているものもあり、江戸時代の石材を転用していることが推察できる。現存する明治期以降の階段のうち、南から（標高15.6～16.0m）で、現在の階段よりも西に60～80cmずれた地点に河戸石を検出した。石の面は南を向いており、権-03区の区画状遺構と同一方向を向いている。改修以前の江戸期の階段が抜き取られずに残存していると推察できる。

鳥居基礎（第29・30・32図、写真21・23）

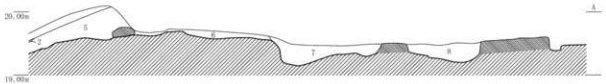
階段の下に位置する平坦地（権-05区）で、鳥居の基礎と思われる石を2基検出した。一辺75cm隅丸方形に成形された石の上部が径45cmの円形に削り出されており、その中をさらに径23cmに刳り貫かれて凹みが形成されている。隅丸方形の部分は土中に埋め込まれており、『御城御庭絵図』に描かれている鳥居の基礎に相当すると考えられる（第30図）。二つの基礎は凹みの中心間で1.96mを測る。山頂部の区画状遺構および基壇状遺構と並行しており、江戸時代の原位置を保っていると考えられる。

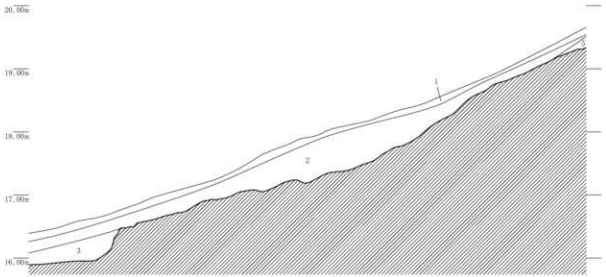
飛び石群（第29・30・32図、写真21）

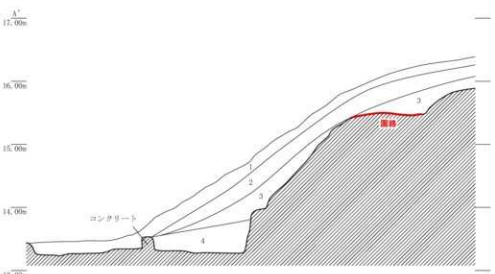
鳥居基礎の南側では、飛び石を9基検出した。鳥居の前から南へ3基、そこから東へ6基配列されている。『御城御庭絵図』では鳥居から南へ5基、その真ん中の飛び石から東へ2基描かれている（第30図）。これらの飛び石は掘り形を確認することができたものの遺物等の出土が確認できず、明治期以降に行われた改修の可能性も考えられ、文政期の原位置かどうか判断するのは困難であった。

園路（第29・30図）

権-01区では、平坦面を検出した。園路の一部であると考えられる。検出した場所は、園路は南東から北西に向かって下る地点に相当すると考えられ、幅が最も広い地点で88.8cm、最も狭い地点で58.2cmを測る。







1 10YR3/3　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　木の根入る
2 10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性なし
3 10YR4/4　褐色土　しまりあり　粘性なし　白色粘土ブロックが混じる
4 10YR3/1　黒褐色土　しまりあり　粘性なし
5 10YR7/2　にぶい黄橙色土　しまりなし　粘性なし　しっくいのような白色土ブロックが混じる
6 10YR7/6　明黄褐色土　しまりなし　粘性なし
7 10YR7/2　にぶい黄橙色砂質土　しまりなし　粘性なし　しっくいのような白色土ブロックが混じる
8 10YR7/4　にぶい黄橙色砂質土　しまりなし　粘性なし

第33図　権現山（権-01・03）　土層断面図

G　権現山東（第34～46図、写真25～49）

権現山東は、名勝指定範囲の北東にあたる。調査は平成26年度に行った。十代藩主徳川斉朝が築造した権現山は明治期に東半が削平されており、調査を開始する前は樹木が茂る公園となっていた。この削平された地点を権現山東としている。『御城御庭絵図』では、削平された築山は当調査区の南半に位置しており、北半に描かれている茶席（権東山下御席）やその他の構築物の痕跡が遺存していることが期待できた（第37図）。

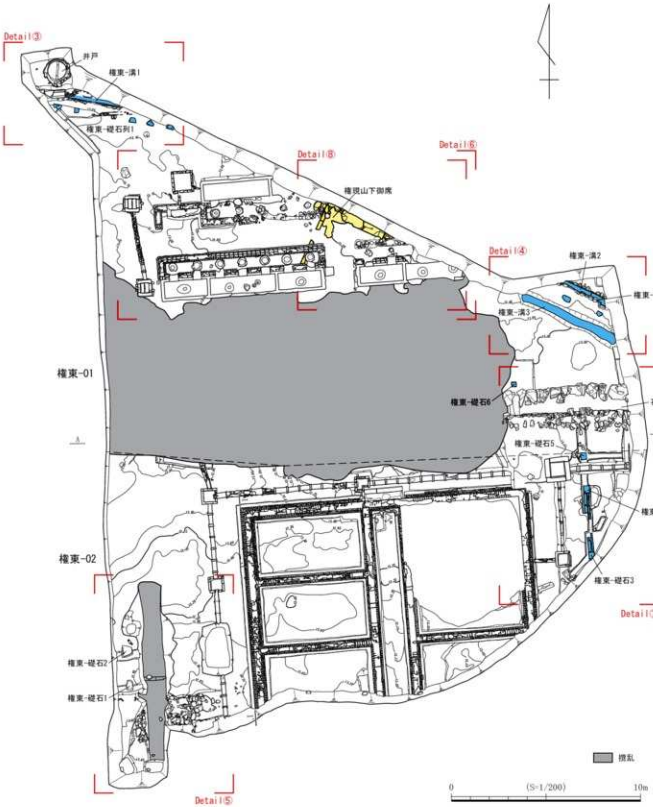
はじめに樹木を伐採し、排土の仮置き場を確保するため、調査区を北側（権東-01区）と南側（権東-02区）に分けて調査を行った。調査は権東-02区から始め、第１次調査の試掘結果を元にバックホウでトレンチ状に掘削を行い、調査面の確認を行った。調査区のほぼ中央で、明治期に築造された陸軍省の兵舎跡を確認することができた。この兵舎が築造されている面を精査したところ、一次調査で確認した面は明治時代以降の盛り土であることが判明した。さらにその下にある江戸時代の面を確認するため調査区南西部をトレンチ状に掘り進めた結果、地表面の最も高い位置よりおよそ2.5m近く深い標高で江戸時代の面を確認することができた。権東-02区の調査終了後、遺構面に人力で山砂を５cm盛土した後に、権東-01区に仮置きした土を権東-02区の西側に埋め戻し、権東-01区の調査を開始した。権東-01区の南側には、深さ1.8m以上の現代の撹乱坑が大きく残っており、撹乱坑の壁面にて地山面の確認を行った。権東-01区では権東-02区で確認した兵舎に付随する建物跡、権現山下御席と考えられる建物跡、井戸、雨落ち溝などを確認することができた。権東-01区の調査終了後、遺構面に人力で山砂を５cm盛土した後に仮置きした土で埋戻した。

（１）基本土層（第39図、写真25・26）

土層断面は権東-02区の北壁面で観察した。基本土層は大きく分けて二層である。上層が現代の盛土で、下層が江戸時代の盛土である。最上層は腐葉土で、その下に1.2～1.5mの盛土層が堆積する。昭和53年以降に公園緑地化された際の盛土層と考えられる。その直下に砂質土層（第39図６層）が10～20cm堆積しており、昭和48～49年に起きた火災時の盛土層と思われる。その下は、調査区の西側と東側では様相が異なるが、径１～３cmの礫が密に混入する層（第39図11、16層）があり、この層に火災の痕跡が認められる。昭和20年の戦災時の層である可能性がある。

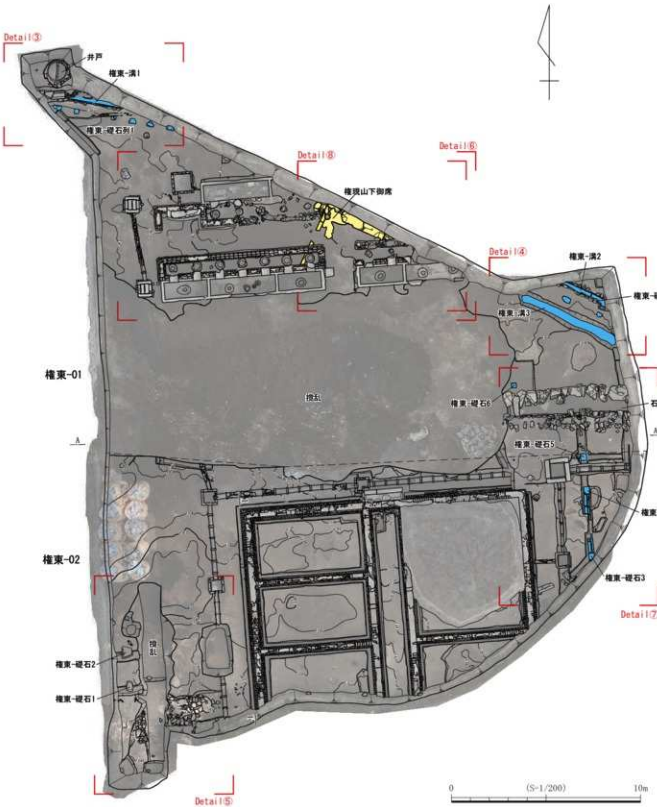
これら現代の盛土の下には江戸期の盛土層が確認できる。権現山を削平して兵舎を建築している経緯もあり、明治時代には盛土されていないと思われる。権東-01区の南側にある撹乱坑で、江戸時代の盛土上面より1.3mほど下がった地点で地山（熱田層）を確認することができた（写真25）。確認できた地山の標高は11.5m前後である。

写真25　権現山東 撹乱坑内土層断面（東から）

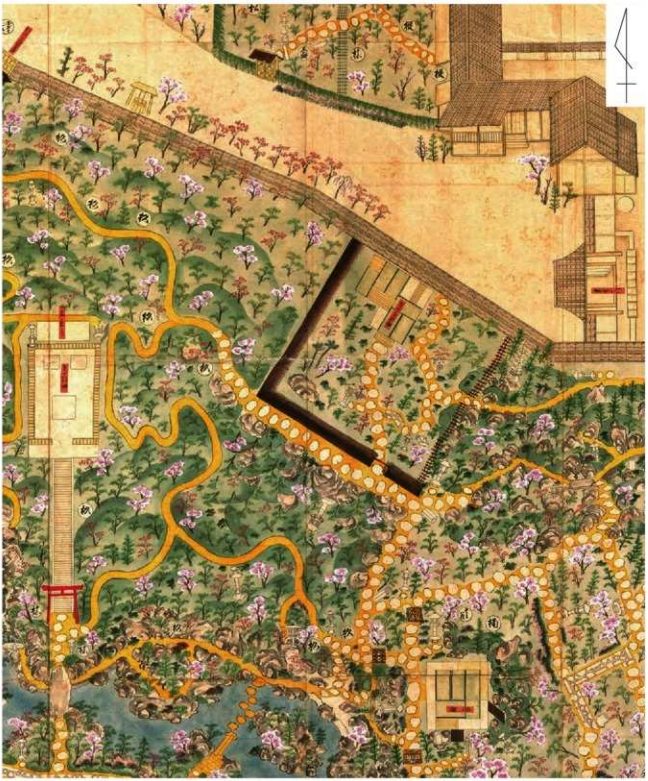


第34図　権現山東　遺構平面図

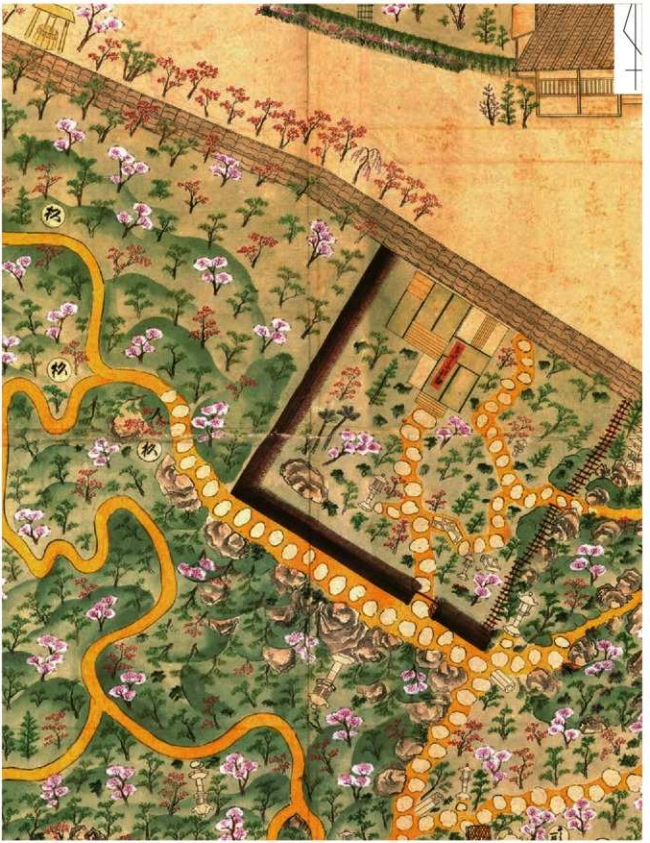
第35図　権現山東　オルソ画像



第36図　権現山東　遺構平面オルソ画像合成図



第37図　御城御庭絵図（権現山東拡大）



第38図　御城御庭絵図（権現山下御庶拡大）

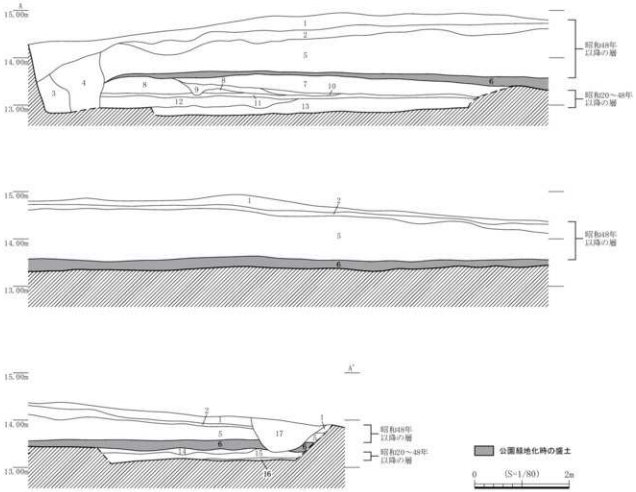
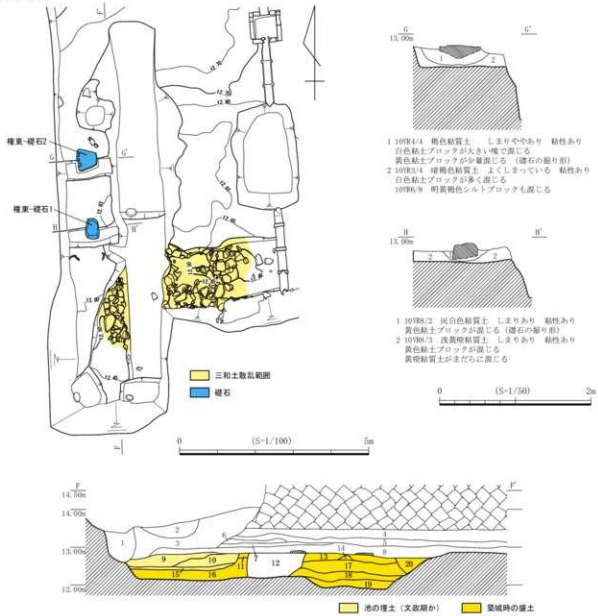


写真26　権現山東　土層断面（南から）

1 腐葉土
2 10YR2/3　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロックが混じる
3 10YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロックが多く混じる
4 10YR2/3　黒褐色土　しまりあり　粘性あり
径3cm～5cmの礫含む　レンガ片や瓦片が混じる（撹乱層）
5 10YR3/2　黒褐色土　しまりなし　粘性ややあり
径5mm以上のるないしは礫が多く混じる
6 10YR8/4　淡黄橙砂質土　しまりなし　粘性ややあり（建物火災後の盛土）
7 10YR3/2　黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒土ブロックが多く混じる
8 10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロックが混じる
径1cm～3cmの石含む
9 5YR7/8　橙色砂質土　しまりあり　粘性ややあり
径1cm～3cmの石を多量に含む
10 10YR3/4　暗褐色土　よくしまっている　粘性あり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロックが混じる
11 10YR2/1　黒色土　よくしまっている　粘性なし
径1cm～3cmの石を含む（火災をうけた層）
12 10YR4/6　褐色土　しまりなし　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロックが多く混じる
13 10YR2/3　黒褐色土　しまりなし　粘性あり
白色粘土ブロック・黄褐色粘土ブロック・黒色土ブロック混じる　鉄分含む
14 10YR4/6　褐色土　しまりあり　粘性ややあり
15 10YR3/4　暗褐色土　しまりあり　粘性ややあり
16 10YR3/1　黒褐色土　しまりあり　粘性あり　径1cm～3cmの礫を密に含む
17 10YR3/4　暗褐色土　しまりなし　粘性なし　黄色土ブロックが混じる（撹乱）

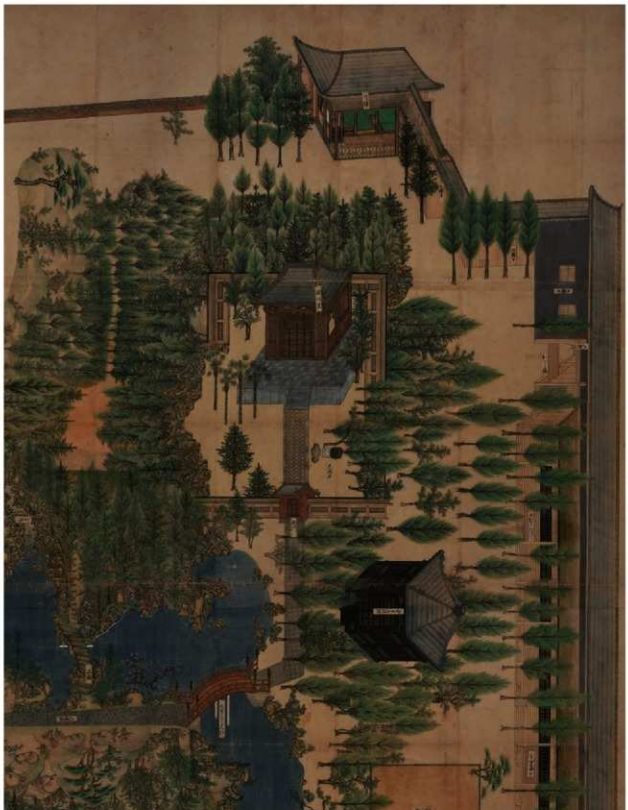
第39図　権現山東　土層断面図

Detail⑤



1 10YR3/4 暗褐色土　しまりややあり　粘性なし
炭化物が混じる　径5mm～1cmの石が混じる
2 根掘乱　(10YR6/4 にぶい黄橙　よくしまっている　粘性なし)
3 10YR3/4 暗褐色土と10YR3/1 黒褐色土の混土　しまりあり　粘性なし
4 10YR4/2 灰黄褐色土　よくしまっている　粘性なし
径5cm程の礫が混じる（練塀の基礎）
5 10YR6/1 灰白色土砂質土　よくしまっている　粘性なし
径5mm程の砂利から径10cm程の礫が密に混じる（練塀の基礎）
6 10YR3/1 黒褐色土　しまりあり　粘性なし
7 10YR6/2 灰黄褐色土　しまりあり　粘性なし
8 10YR4/4 褐色土　しまりあり　粘性なし
径1cm～3cm程の礫が多く混じる
9 10YR6/1 褐灰色砂質土　しまりあり　粘性なし
10YR2/2 黒褐色土ブロックがまばらに混じる
10 10YR7/2 にぶい黄橙色土　しまりあり　粘性なし
板状のしっくいの塊が敷かれている
11 10YR7/6 明褐色土と10YR3/4 暗褐色土の混土　しまりあり　粘性なし
12 掘乱
13 10YR4/4 褐色土　しまりあり　粘性なし　径3cm～5cm程の礫含む
14 10YR5/8 黄褐色土　しまりあり　粘性ややあり
15 10YR4/3 にぶい黄褐色土　しまりあり　粘性あり
白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・黒色土ブロックが多く混じる
16 10YR3/2 黒褐色土　しまりややあり　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・黒色土ブロックが混じる
17 10YR2/3 黒褐色土　しまりあり　粘性なし　ブロックが多く混じる
10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土　しまりなし　粘性なし
10YR7/6 明黄褐色粘土ブロックが混じる
18 10YR4/1 褐灰色土　しまりあり　粘性ややあり
白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・黒色土ブロックが細かく混じる
19 10YR7/1 灰白色土　しまりあり　粘性あり
白色粘土ブロック・黄色粘土ブロック・
10YR5/6 黄褐色粘土ブロックが多く密に混じる
20 掘乱

第40図　権現山東（権東-02）　遺構平面・断面図（Detail⑤）



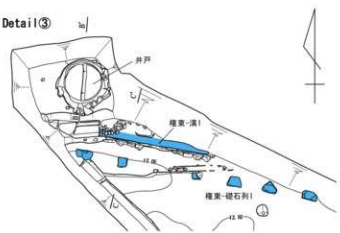
第41図　中御座之間北御庭惣絵（権現山東付近拡大）

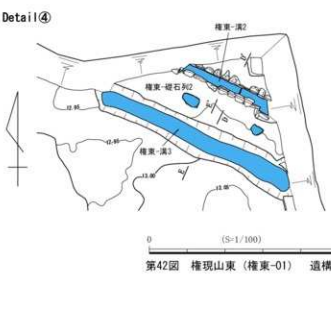
（2）検出遺構

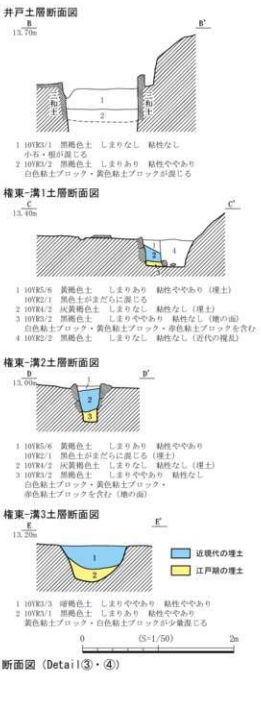
池跡（第34～36・40図、写真27）

権東-02区の南西角で池底の痕跡を検出した。初めに撹乱を重機で掘削し、トレンチ状となった西壁で堆積を観察したところ、三和土が貼りつけられている層（第40図15層）を確認することができた。池底と考えられる。この層の直上では、打ち割られた三和土の破片を大量に含む層（第40図10層）が、北から南に向けて緩やかな傾斜で堆積している。ここから池の法面に施されていた三和土が、後世の整地等で破壊されて堆積したものと推測することができる。池跡からその他の遺物は出土していない。江戸時代の地表面（第40図13層）上では礎石を２基確認しているが、これらと池跡の関連性を確認することはできなかった。

写真27　池跡（権東-02）　検出状況（西から）







第42図　権現山東（権東-01）　遺構平面・断面図（Detail③・④）

この池跡は、『御城御庭絵図』に描かれている北園池と比較すると、やや北寄りであることが分かる（第37図）。しかし、中御座之間北御庭惣絵によると、権現山の東側に池が張り出しているように見える（第41図）。今回の調査で確認できた三和土は、元和期の御庭の池跡である可能性も考えられよう。

礎石列と雨落ち溝跡（第34～36・42図、写真29～31）

権東-01区の北西および北東角で検出した。礎石は北西角で７基（権東-礎石列１）、北東角で２基（権東-礎石列２）検出した。権東-礎石列１では96.4～102.2cm間隔で並び、権東-礎石列２は172.2cmの間隔で並んでいる。形状は長方形や正方形と均一性に欠け、大きさも20～35cmとばらつきが認められる。これら礎石列の北側を沿うように、雨落ち溝を確認することができた（権東-溝１・２）。溝の両側は縦２段に石組されており、石材は河戸石である。盤跡が加工痕として確認できる。埋土は三層で、上層は明治期以降の整地層の一部と考えられ、溝の上端にしか堆積していない。中層も時間をかけて自然堆積したのではなく、人為的に短時間で埋められている様相を呈している。下層は溝が機能していた江戸期の自然堆積層と考えられる。遺物は出土していない。権東-礎石列２の南側では、これらの列と並行して１条の溝（権東-溝３）を確認した（写真29）。埋土は二層で、下層は権東-溝２の３層と酷似している。遺物は出土していない。用途は不明だが、二つの雨落ち溝の規模や作り方が異なるため、別の目的で構築されたものと考えられる。土塀の控え柱のための溝とも考えられるだろう。権東-礎石列１と２は調査区の外側に延びており、権東-礎石列２の配列と現在の園路はほぼ平行に並ぶ。二つの礎石列は、一直線状には並ばずに途中で屈曲するものと考えられる。『御城御庭絵図』では権現山下御席の西で土塀が屈曲している様子が

写真28　井戸（権東-01）半截状況（北から）

写真29　権東-礎石列２、溝２・３ 完掘状況（南東から）

写真30　権東-溝１・権東-礎石列１ 完掘状況（北西から）

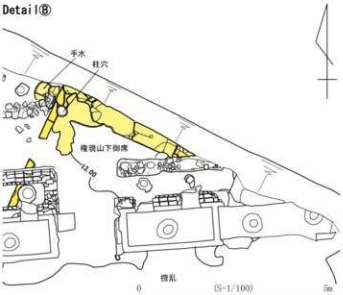
写真31　権東-溝２ 土層断面（南東から）

描かれており、絵図が正確に描写されていることがよく分かる（第37・38図）。権東-礎石列２は、東側に延びて調査区の東に隣接する北暗渠遺構に続くものと考えられる（巻頭図版５）。

井戸（第34～36・42図、写真28）

権東-01区の北西で井戸跡を検出した。井戸は側面を三和土で固められており、縁辺部は面取りされている。『御城御庭絵図』に描かれている井戸にあたると考えられるが、井戸屋形の痕跡は確認できなかった。

権現山下御席跡（第34～36・43・45図、写真32～34）



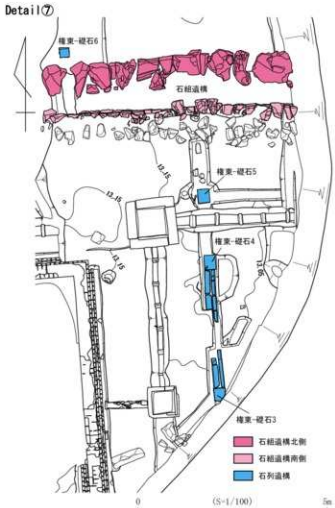
第43図　権現山東（権東-01）　権現山下御席　平面図（Detail⑧）

権東-01区北壁の中央付近で、三和土で構築されている構造物を確認した。『御城御庭絵図』で描かれている権現山下御席と考えられる。三和土は調査区外まで広がると考えられ、東側は明治期の構造物によって削平されている。この三和土と直交し、表面を洗い出しによって表面加工された三和土を確認すること

写真32　権現山下御席（権東-01）
検出状況（東から）

写真33　権現山下御席（権東-01）
洗い出し検出状況（西から）

写真34　権現山下御席（権東-01）
柱穴跡検出状況（南から）



第44図　権現山東（権東-02）　遺構平面図（Detail⑦）

が出来た（写真33）。この洗い出しは明治期の構造物下を潜るように検出されていることから、茶席構造物の一部分が辛うじて明治期の削平を免れたものと考えられる。また、洗いだしと明治時代の構造物の高さがほぼ同じであることから、当調査区は江戸末期から明治期にかけて盛土による整地がなされていない可能性が高い。

三和土が直交する地点に円形で穿たれ、土が窪んでいる様相を確認した(写真34)。ピット状に掘り込まれておらず、茶席に関連する柱穴と考えられる。また、三和土が直交する地点の西脇で、石と三和土を混ぜて成形してある円形の遺構を確認した。手水の跡と推定できる。

石組遺構（第34～36・44図、写真35・38・39）権東-01区の南東で石組みの遺構を検出した。東西方向に延びる石組みで、西側は撹乱で削平され、東側は調査区外へ延びる。二列の石組みで構築された溝にも見えるが、石材と石の組み方が、異なっており、性格を異にした二列の石組みと考えられる。南側は主に河戸石で縦二段に組み合わせており、前述の雨落ち溝と酷似した構造となっている。ただし切り石の大きさが雨落ち溝のそれと比較すると一回り大きい。これに対し、北側は主に自然石を使用しており、残存する状況では一段で構成されている。これに加えて、両列共に石の面は北を向いており、溝と解釈するには疑問が残る。また、北側の自然石の間に河戸石が間詰めとして使われており、南側の石組廃絶後に北側が構築された可能性が高い（写真39）。南側と北側の間に堆積する埋土は二層であり、裏込めとして埋めたものと考えられる（写真35）。

石列遺構（第34～36・44図、写真36～38）

権東-01・02区の東で、礎石及び石列遺構を確認した。表面を平坦に加工した32.6～37.0cm四方の正方形の石と、石の間を埋めるように配置された細長く加工された石材で構成されている。細長い石材は凝灰岩で、２列配置されており、それぞれの間にはわずかな隙間が認められる。正方形の石は礎石と考えられ、調査区南壁際から北に向かって３基(権東-礎石３～５)確認した。権東-礎石３と４の間は削平されており、本来は４基であったと考えられる。それぞれの礎石の間隔は178.8～178.3cmであり、ほぼ均等に配されている。前述の石組遺構を挟んで、西にずれたところに正方形の石（権東-礎石６）を確認した。礎石と考えられるが、権東-礎石３～５と比べるとやや小ぶりであり、22.0～24.0cm四方の正方形を呈している。

これらの礎石は、石組遺構が構築される以前に建てられた、柱を持つ何らかの建物跡であると考えられる。権東-礎石６も上面の高さがほぼ同じであり、柱間の距離も一定であることから、一連の建物跡であると推定できる。石列遺構は文政期の遺構面より下から検出されており、『御城御庭絵図』には表現されていないため、元和期の遺構である可能性も考えられる。

写真35　石組遺構（権東-01）　土層断面（西から）

写真36　石列遺構（権東-02）権東-礎石４
検出状況（西から）

写真37　石列遺構（権東-02）権東-礎石３・４
検出状況（北から）

写真38　石組遺構と石列遺構（権東-02）　完掘状況（北から）

写真39　石組遺構（権東-01）
間詰め石検出状況（北西から）

写真40　兵舎跡（権東-02）　レンガ検出状況（南から）

写真41　便所跡（権東-01）　完掘状況（北西から）

兵舎関連施設（第34～36・45・46図、写真40～49）

権東-02区ほぼ中央で、陸軍省によるレンガ積みの兵舎を確認した。上屋部分は残存しておらず、基礎部分のみを検出した。レンガはイギリス積みと呼ばれる工法で施工されており、明治時代後半に建設されたものと思われる（第46図、写真40）。表面に見えるだけでいくつか刻印を確認することができた（写真45～49）。兵舎は昭和24年（1949）から48年（1973）まで財団法人学徒後援会が運営する学生寮として使用され、昭和48年（1972）に火災によって焼失したという記録がある。建物中央の南北方向に廊下部分があり、その両脇に部屋が設けられている。調査区内の南西にあたる部屋が最も焼けた跡が酷く、この周辺から燃えたのではないかと推測できる（写真42）。

この兵舎の周りを取り囲むように配置されているのが、土管と枡である。これらは権東-01区においても検出した（写真41・43）。下水施設の跡であると考えられる。調査区内で枡は7基確認でき、その大半はレンガで構築されている。権東-02区の北東角に位置する枡は他のそれと比べて一際大きく、集水桝であると考えられる。この枡は石組で作られており、江戸期の御城内部の石材を転用していると思われる。権東-01区の枡には石材で蓋が施されており、これらも転用したものと考えられる（写真41）。

権東-01区では、便所跡を検出した（第45図、写真41・43）。明治期の兵舎に伴う施設と考えられ、兵舎と同様に基礎部分はレンガで構築されている。甕を個別に配置しており、汲み取り式であったことが分かる。便所の建物は東西に長く作られ、中央部に通路があり、その両脇に個室が並ぶ形態である。個室のそれぞれの外側（北および南）には、コンクリートで作られた便槽を確認することができた。仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の発掘調査においても同様の施設が報告されているが、こちらには便槽が付いていない。便槽には、それぞれの個室から排泄物を滑落させるべく斜面状にコンクリート板が設けられており、その表面は漆喰によってより滑落しやすいような工夫がされている（写真44）。便槽がレンガ基礎の上に増築されているのは明らかであり、名古屋城においては昭和48年（1973）まで、増改築しながら便所を使用していたと考えられる。

写真42　兵舎火災跡（権東-02）　検出状況（南から）

写真43　便所跡と下水管（権東-01）　完掘状況（西から）

写真44　便槽（権東-01）　完掘状況（南から）

写真45　レンガ刻印１

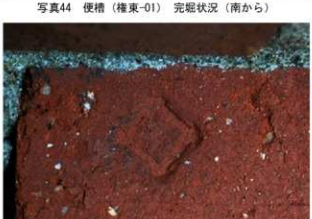
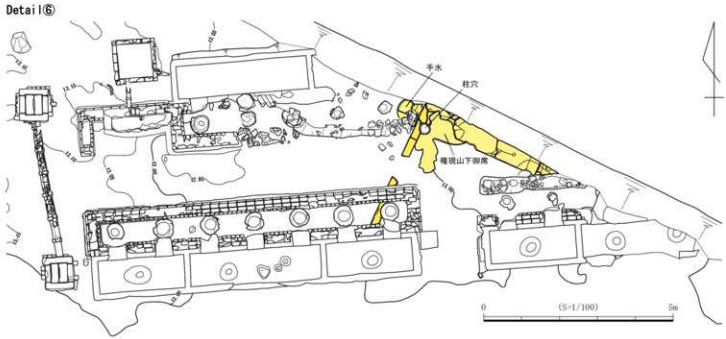


写真46　レンガ刻印２

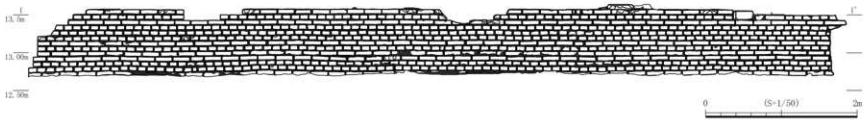
写真47　レンガ刻印３

写真48　レンガ刻印４

写真49　レンガ刻印５



第45図　権現山東（権東-01）
権現山下御所 遺構平面図（Detail⑥）



第46図　権現山東（権東-02）　兵舎 西壁立面図（西面外側）

H　余芳（第47～51図、写真50～52）

余芳の調査は平成27年度に行った。平成26年度の第２次調査時に検出した兵舎跡が、続いて南に検出されていることが予想された。また、昭和50～53年の調査で確認されている池の東端は、明治期に改修された文政期の池の東端である可能性が指摘されていた。そのため今回の調査の目的は『御城御庭絵図』に描かれた茶席の一つである余芳の確認と、江戸期の北園池の範囲及び深さの確認である。

はじめにバックホウにて前年度調査結果を参考にしながら掘削を行い、調査面の確認を行った。その結果、前年度調査で確認した江戸期の検出面と同様な整地層を確認し、検出面の標高に差異がないことから、この整地層を遺構検出面として調査を行った。

（１）基本土層（第49図）

土層断面は調査区南西にある撹乱坑の壁面（第49図）で観察した。基本土層は大きく分けて昭和期、明治期、江戸期、中世の四層である。最上層は昭和時代の盛土（第49図１層）である。その下に明治期の盛土（第48図２層）が1.2～1.6m堆積している。明治期の盛土は三和土が混入する淡い淡黄褐色土（第49図３層）によって二層に分けることができる。下層は撹乱坑を埋めており、上層は兵舎跡のコンクリート基礎を埋めるために盛られている。撹乱底面には漆喰が打ち壊されてまばらに張り付いており、その下には築城期の整地（第49図５層）と思われる盛土層を確認した。最下層は中世以前の包含層（第49図６・７層）と考えられる。

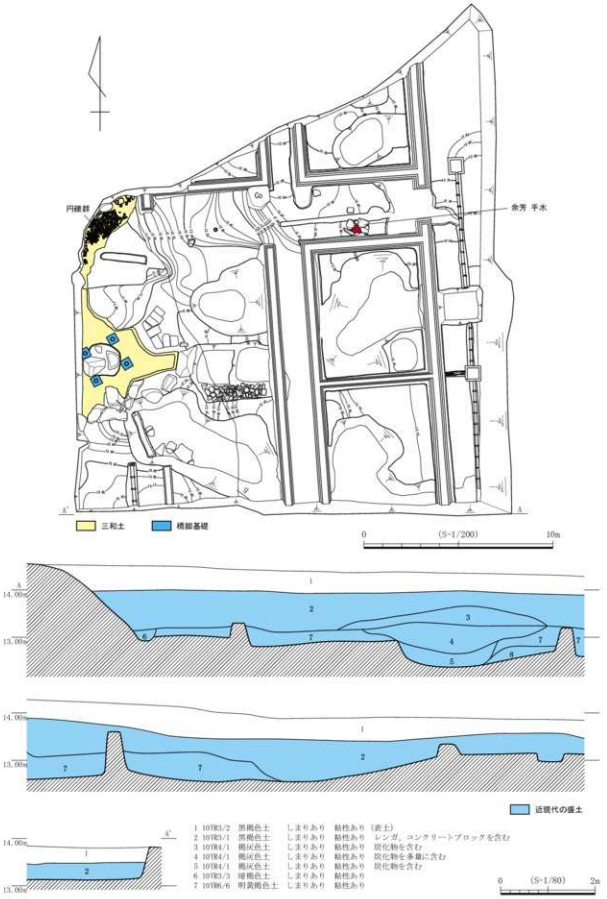
（２）検出遺構

兵舎跡（第47・48・50図）

調査区のほぼ全域にわたって、昨年度の調査でも確認された陸軍省の兵舎を確認した。前年度調査と同じく、残存しているのは床面付近から基礎部にかけてのレンガ積みとその下部の基礎構造のみである。布掘り地業で溝状に掘り込んだ箇所に、径0.1～0.4m程度の円礫や角礫を敷き詰めてから、コンクリートが敷き均されていることを確認した。調査区北部では、東西方向に延びる石敷きの廊下と、廊下の東端にはコンクリートで整地された出入り口部を確認している。この建物は昭和48年(1973)に起きた火災によって焼け落ちているが、その廃材を埋めるために掘削されたと思われる大きな撹乱坑が各部屋や廊下部でも確認された。

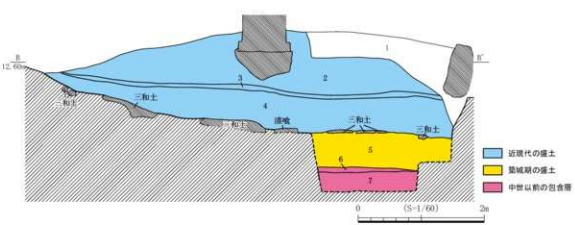
余芳（第47・49・50図、写真51・52）

兵舎の東西方向に延びる石敷き廊下の下から、鉢状の構造物を確認した（写真51・52）。この構造物は三和土と石を用いて鉢状に造られている。平面形は、その南側の一部を兵舎の基礎によって壊されているが、概ね円形を呈するものと思われる。その構造は北側と西側に石が配置されており、北側に配された石は面が中央にむかって傾斜するように据えられ、西側に配された石は面を内側に向けるようにほぼ垂直に据えられている。これらの石を取り込みながら三和土によって鉢状に構築されており、内面は緩やかに内湾している。また、内面全体に赤く着色された三和土を厚さ５㎜ほど塗り重ねて、多春園の化粧三和土遺構と同様の作事が施されている。この鉢状の構造物は、その出土した位置や装飾性から、『御城御庭絵図』で描かれている余芳と称されるお茶席に関わるものと考えられ（第51図）、用途としては手水ということが推察されるが、余芳の建物に関わる遺構が確認されていないため、詳細は不明である。



第47図　余芳 遺構平面・南壁面土層断面図

第48図　余芳 オルソ画像



1 10YR3/2　黒褐色土　しまりあり　粘性あり（表土）
2 10YR3/1　黒褐色土　しまりあり　粘性あり
　レンガ、コンクリートブロックを含む
3 10YR4/1　褐灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化物を含む
4 10YR4/1　褐灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化物を多量に含む
5 10YR4/1　褐灰色土　しまりあり　粘性あり　炭化物を含む
6 10YR3/3　暗褐色土　しまりあり　粘性あり
7 10YR6/6　明黄褐色土　しまりあり　粘性あり

第49図　余芳 南西角壁面土層断面図

第50図　余芳 遺構平面オルソ画像合成図

第51図　御城御庭絵図（余芳拡大）

北園池（第46・47・49図、写真50）

北園池の東端部は昭和50～53年にかけて調査が行われており、その調査時に池を囲う立石、池の壁面や床面に貼られた橙褐色の三和土、そして池の北側では玉石の広がりが部分的に確認されている。また池を渡る橋の橋脚基礎が検出されている。今回の調査でも同様の橋脚基礎を検出おり、池底の深さと池の東端についても確認することができた。

調査区北西角では三和土の上に敷き詰められた円礫群を検出した。州浜を表現した遺構と考えられ、文政期の池の北端にあたると推定できる。

昭和50～53年の調査において確認された池の南東側が大きく削平されている。明治期に改修された池底保全のため、それ以上掘削は行わず削平された撹乱坑の壁面で、その下の堆積状況を確認することにした。その結果、撹乱底面で打ち壊された漆喰片を検出した。これらの漆喰片は第2次調査で確認した池跡の漆喰片が酷似しており、元和期の池の広がりと考えられる。

写真50　余芳（余-01）　池跡（元和期）範囲

写真51　余芳（余-01）　手水検出状況（北から）

写真52　余芳（余-01）　手水検出状況（南から）

Ⅰ　外縁（第52～55図、写真53～60）

外縁の調査は平成26・27年度に行った。平成26年度は外-05区を、平成27年度は外-01～03区を調査している。外-05区の調査目的は栄螺山の西側に広がる裾の範囲を確認する事である。外-01～03区は、塀の北側の範囲を確認することを目的としている。

先に調査を行っている多春園と栄螺山北の基本土層を参考にして、明治期の盛土層まではバックホウによって掘削した。掘削土は調査区の脇に仮置きし、調査後は仮置きした土を埋め戻した。

（1）基本土層（第52～54図）

基本土層は調査区ごとにで記述する。外-05区の土層断面は調査区の西壁面で観察した。基本土層は大きく分けて二層である。上層は現代の表土（第52図1、2層）である。その下に明治期の盛土（第52図3～9層）が0.9～1.1m堆積している。3と5層は三和土の層であると考えられ、その間層となる4層には漆喰が多量に混入する明赤褐色土が堆積する。その下の6層には10～25cm大の礫が均等に埋められており、建物の基礎と推定できる。北壁においては、これら明治期の盛土層が大きく削平されていることが確認でき、明治から昭和にかけて数回改修を受けているものと思われる。9層中には礎石が埋め込まれており、その上には黄褐色土（第52図8層）が堆積している。また9層中では瓦がまとまって出土した（写真56）。

外-03区の土層断面は西壁面で観察した。基本土層は二層である。最上層は昭和期の盛土（第53図2層）で、その下に明治期の盛土（第53図3層）が堆積する。江戸期の堆積土は黒色土（第53図4層）である。

外-01・02の土層断面は西壁面で観察した。基本土層は三層である。堆積状況は外-03区と酷似する。外-01区の北壁面沿いで南蛮練塀の下に整備した痕跡と思われる灰黄褐色土（第54図5層）が堆積している。

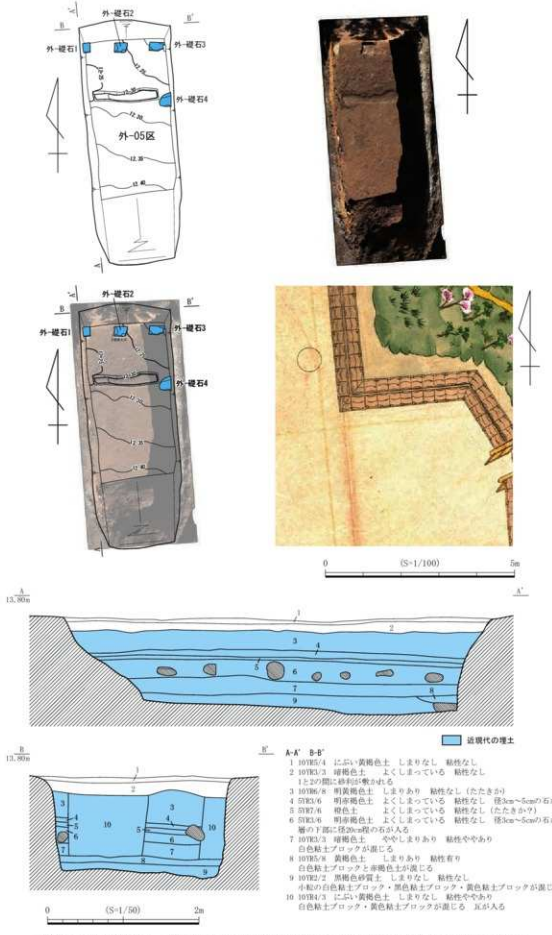
（2）検出遺構

塀跡（第52・53図、写真53・54）

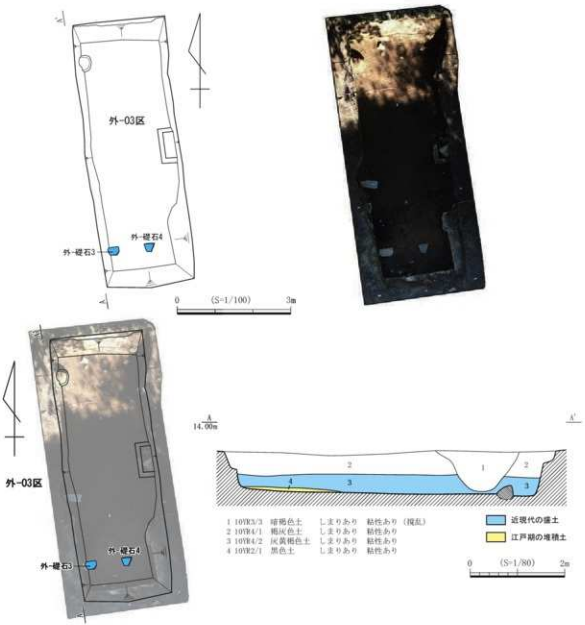
外-03区と05区で塀の礎石を検出した。礎石は外-05区で4基（外-礎石1～4）、外-03区で2基（外-礎石5・6）確認しており、いずれの礎石も95.3～101.5cmの間隔で東西方向に並んでいる。外-礎石1は、多春園で検出した礎石列と一直線上に並んでいる。そこから直角に東へ外-礎石2と3が並ぶことから、この地点は『御城御庭絵図』で描かれた塀の角（第52図）であることが推察できる。また、外-礎石3から1.47m南に外-礎石4を検出した。外-礎石3と4は直角方向ではなく、30cmほど東に寄って据えられている。『御城御庭絵図』では西側の塀が東に直角に屈曲し、それから南東方向に屈曲する様子が描かれており、外-礎石1～4はこの地点の礎石である可能性が考えられる。また外-礎石3の直上では、瓦がまとまって出土した（写真56）。礎石を覆うように出土しており、塀が取り壊された後の廃棄であると分かる。このためこれらの瓦は明治期の廃棄であり、瓦が埋まっている9層は明治期以降の盛土であることが確認できた。

雨落ち溝跡（第54図、写真57・58）

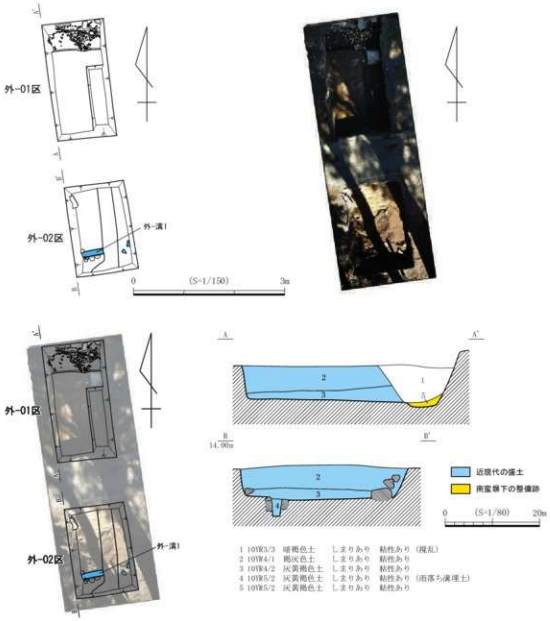
外-02区で石組みの溝跡を検出した。雨落ち溝であると思われる。縦2段で石組みされ、石材は河戸石で、権現山東の雨落ち溝と同じ様相を呈し、権現山東から連続して続くものと考えられる。埋土は灰黄褐色土の一層（第54図4層）で、遺物は出土していない。



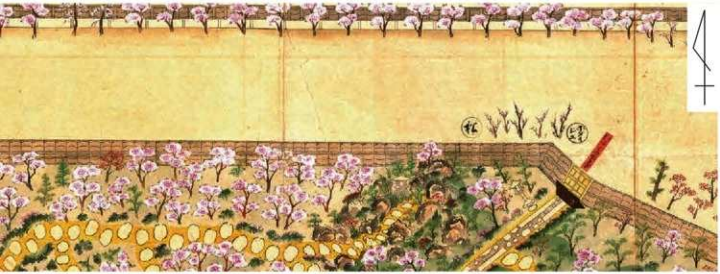
第52図　外縁（外-05）　遺構平面・断面・オルソ画像・合成図・御城御庭絵図（外縁南西拡大）



第53図　外縁（外-03）遺構平面・断面・オルソ画像・合成図



第54図　外縁（外-01・02）遺構平面・断面・オルソ画像・合成図



第55図　御城御庭絵図（外縁北側）

写真53　外縁（外-05）　完掘状況（南から）

写真54　外縁（外-05）　塀跡（礎石）検出状況（北から）

写真55　外縁（外-05）　西壁土層断面（東から）

写真56　外縁（外-05）　瓦出土状況（南西から）

写真57　外縁（外-02）　完掘状況（西から）

写真58　外縁（外-02）　外-溝１検出状況（北から）

写真59　外縁（外-01）　完掘状況（南西から）

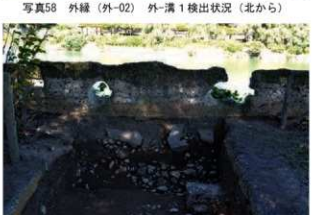


写真60　外縁（外-01）
南蛮練塀下の整備跡検出状況（南から）

第２節　出土遺物

第１次から第３次にわたり出土した遺物は、陶磁器・土器・瓦を主体とするが、層位的には表土や、近代以降の撹乱からのものであるため、一括してここで取り扱うこととした。出土した遺物は、本遺跡の展開する主要な年代が近世であることから、この時期のものは破片を含めてすべて抽出し、残りの良いものは実測図を掲載し、その他の破片は、写真のみの掲載とした。この他では、中世以前の遺物と近代の第二次世界大戦に関連する遺物を近世と同じ基準で選出した。抽出した遺物で、実測図を掲載した遺物は、第56～58図に掲載し、第１表がその観察表である。写真は遺物写真図版に、実測図掲載番号を付して掲載してある。写真のみ掲載した遺物は遺物写真図版１～19に掲げ、その観察表は第２表とした。写真のみ掲載遺物の番号は番号の前にＰを付した。これらの遺物は、実測図掲載遺物も写真のみ掲載遺物も、材質ごと、器種ごと・生産地ごとに分類してある。

提示した遺物は、時代ごとに点数を挙げれば、古墳時代の埴輪２点、中世の陶磁器７点、近世の陶磁器・土器・瓦等196点、近現代の製品が２点の合計207点である。

以下では、遺物は近世、中世以前、近代の順に時代ごとに扱い、さらに個別資料の特記すべき事項を記述する。なお近世の陶磁器・土器については、組成にもふれた。

【近世】

磁器（第56図１～７、遺物写真図版１～３）

５とＰ１～４はガラス質の胎土の瀬戸美濃産の小坏・碗である。５は写真図版１では２破片あるが、接合する。１～４・６・７、Ｐ１～12は粉質の胎土の肥前産磁器製品で、１～４・Ｐ１～４は小坏と碗、６・７、Ｐ13～17は皿、Ｐ18は壺の蓋である。

陶器（第56図８～23、遺物写真図版４～11）

８とＰ19～27は碗で、８とＰ19～23は瀬戸美濃産である。Ｐ23は高台内に墨書があるが、薄くて判読不能。Ｐ24・25は京焼系、Ｐ26・27は唐津産である。９～11とＰ28～31は小皿、Ｐ32は中皿、11は丸形の片口鉢などの大型の鉢と思われる。12とＰ33～39は大鉢類で、Ｐ37・40を除けば、瀬戸美濃産の「大平鉢」で占められている。酸化炎焼成と還元炎焼成の両方の製品が認められる。Ｐ34は内面に三葉葵文を押印で施している大型の鉢か皿と考えられる。Ｐ41～51は碗皿以外の日常品の小物類である。Ｐ44は復興織部文様の行平鍋の蓋、Ｐ46はベタ底で、低い立ち上がりの皿状の製品であるが、器壁は厚い。部分破片でもあり、器種は不明。Ｐ51はミニチュアの土瓶の下半分の破片である。土瓶の足の部分が丸い突起で表現される。20とＰ52・53は瀬戸美濃産の茶入、13～15とＰ54は灯火具である。22とＰ63～67は瀬戸美濃産の駄知土瓶である。外面の鉄釉と条線文が特徴である。Ｐ56～61は瀬戸美濃産の舟徳利である。Ｐ56～58は同一個体で、接合した体部片である。Ｐ59～61も同一個体の可能性がある。Ｐ68～72は瀬戸美濃産の水甕、23とＰ73～75は植木鉢で、おそらくいずれも鍔の付くタイプと思われる。Ｐ76～86は瀬戸美濃産の壺・甕類である。どれも器高は20～30㎝以下の中型のサイズのものである。Ｐ76・77は耳の付く壺である。Ｐ84は、幅広で断面形が角張る特徴的な高台であることから広口の壺と思われる。Ｐ87～91は瀬戸美濃産の火鉢である。Ｐ87は内抱え状の体部、Ｐ88は緑釉と鉄釉の上下掛け分け、Ｐ89～91は底部であるが、器壁は厚めに成形されている。Ｐ92～105瀬戸美濃産の播鉢である。Ｐ92は大窯焼成の17

世紀前半のもの、P93は登り窯焼成で、年代は18世紀以降のものである。18とP92～97の口縁部は、口縁部内面に横位の稜線が回り、口唇部は角棒状を呈す。16のみは外側への折返し口縁である。登り窯期の17とP108は口縁部内面に稜線が廻り、口唇部までは内湾する（外面側に膨らむ）。P107は16に似て、口縁部内面が「く」の字状に外反し、外側に折り返す。P109は口縁部は鍵形に折れ曲がり、端部は直立する。P106は備前産の焼き締めの擂鉢の体部片である。ロクロ目が強く残っている。

土器・施釉土器・その他（第56図24～26、遺物写真図版12）

24・25はロクロ水挽きで成形されたかわらけである。体部は口縁部に向けて直線的に開く。25とP120には口唇部に煤が付着する。P121は焙烙である。口縁部の断面は三角形で、内面側に突出する。P122は外面に押印による凸文を施し、赤彩した土器である。P123・124は透明釉を施釉した灯明皿、P125・126は施釉土器の行平鍋の体部片であるが、内面は透明釉、外面は黒釉を施している。これらの土器・施釉土器は明確な生産地は不明であるが、壊れやすい性質や運搬コスト面から、城下町やその近郊での生産が想定されることから、生産地を「在地」とした。26は匣鉢である。礫が大量に入る土で作られている。名古屋城の御深井丸にお庭焼があったとされることから、そちらから持ち込まれた可能性がある。

施釉瓦（第57図27～30、遺物写真図版13～16）

施釉されているのはほぼ全部の個体が緑釉である。瓦当面や側面、上面には施釉されるが、内面や裏面は露胎であるものが多い。27・29は軒丸瓦である。27は文様は三つ巴文、29は桐葉文と思われる。29は小型の軒丸であることから、軒桟瓦と考えられる。文様は前向きの陽刻の兎である。30は体部が直線的であるので海鼠瓦としたが、上面にも文様がみられるので、塀などの屋根部分かもしれない。側面は12弁の陰刻の菊花文、上面は12弁の陽刻の菊花文（貼り付け）である。全体は灰釉掛けで、菊文部のみ鉄釉を施釉。31・32は菊丸瓦であるが、32は緑釉ではなく、灰釉が掛けられる。軒丸瓦と違い、文様のある面と側面以外は施釉されていない。P127は穿孔がみられることから、海鼠瓦とした。表面には緑釉が流れ落ちている。P128は磚と思われるもので、厚さ3㎝ある。表面は全面、下面は下半に緑釉が施されている。P129～136は丸瓦である。P136は内面に鉄で字が書かれるが、判読不能である。P137～141は特殊瓦とした。いずれも破片で全体は窺いえないが、写真図版は破片のカーブの仕方から配置した。P137は左側縁、P140・141は右側縁、P138は前面とし、左右側縁に向けて平瓦のように緩い「U」字状のカーブをもつ。前面は面取りされ、上端への立ち上がりがみられる。P142は直線的な体部から海鼠瓦とした。内面側に花押のような墨書がみられる。P144～149は平瓦である。施釉部分は上面と前面を中心に施され、側縁近くは無釉のようである（P144）。P150も特殊軒瓦とした。軒部の文様は中央の角型の抉り部に陽刻で表わされる。残存する側縁の軒側には断面が三角形の突起が貼り付けられている。

瓦（第57図33～41、第58図42・43、遺物写真図版16～18）

33～36は軒丸瓦である。33・34とP151はいずれも連珠三つ巴文であるが、33とP151は、連珠と三つ巴文が34と比べると大きい。35と36は、それより小型であり、桟瓦の軒丸瓦の可能性がある。共に三葉葵文で、文様は陽刻で表わされるが、表現法は相違する。37とP152は丸瓦である。P152は玉縁周辺が残存するものであるが、玉縁は長く、内面にはコビキの抜き取り痕が明瞭に残っている。38～40は軒桟瓦であるが、軒丸部が残るものは39のみである。38と39の瓦当文様の中心飾りはいわゆる「東海系」であるが、唐草部分にそれぞれ違いがみられる。40は軒平部が滴水瓦で逆三角形を呈す。文様部は中央で画されて両

側に左右対称の唐草文（陽刻）が配されている。41は菊丸瓦であるが、施釉瓦（31）と違い、花弁の外側に陽刻の輪郭がつけられ、花芯には格子文（陽刻）が施される。42は完形の桟瓦である。桟部と平部の２箇所に切込みが作られる。43は直線的な体部であることから、海鼠瓦とした。円形の突帯の内側には条線文の残る貼付痕が観察されることから、複数枚を組み合わせて、円形の中に家紋などの文様が配され釘穴で止められていたと推定する。釘穴は隅近くに２箇所並んで穿孔されている。

漆喰製品（44、遺物写真図版18）

漆喰で形を作り出し、表面に小さめの玉砂利の入る赤い漆喰を塗りつめた製品である。中には水も入るような構造である。器種は蹲踞と考えられる。

組成　ここでは日常生活に用いる陶磁器・土器（施釉土器を含む）を組成からみてゆく。対象としたのは１～25、Ｐ１～126掲載の151点である（26の匣鉢、44の蹲踞、施釉瓦および瓦は用途が相違するので除いた）。

【器種別組成】　出土した陶磁器の器種は小坏・碗・皿・大鉢・徳利・土瓶・擂鉢等の食生活関連の食膳具・調理具・灯明具や火鉢等の日常生活での必需品や、嗜好品（植木鉢等）まで幅広くみられる。点数では最も多いのは擂鉢で32点あるが、これは大型の製品は多くの破片になって出土するためと思われる。同様の傾向は皿類に含めた大鉢（「笠原鉢」）もであろう。また土瓶は体部の器壁が薄いために、破片の数が多くなる器種である（土瓶は蓋も含めて６点）。これらは破片の数が、使用時の個体数には連動しない器種といえる。

【産地別組成】　土器を除く陶磁器の141点を対象として、生産窯を材質ごとにみれば、以下のようになる。

磁器は瀬戸美濃産の４倍の量が肥前産で占められる。陶器は量が２番目に多い京焼・信楽産でも７点にしかすぎず、圧倒的に多いのは地元の瀬戸美濃で、105点（陶器の中では９割強）を数える。原材料が独占状況にあった肥前は磁器では強みをみせる。一方、質的にはやや劣る面のある陶器ではあるが、最も近い大生産地として、また尾張藩管理のもとにある窯としての瀬戸美濃製品の独占に近い。器種も日常雑器にはじまり、貯蔵具・煮沸具・調理具等の居住空間で使用する器種や、趣味性の高い製品まで網羅している。

	肥前(唐津)	瀬戸美濃	京焼・信楽	備前	
磁器	20	5	—	—	計 25点
陶器	3	106	7	1	計117点
	23	111	7	1	合計142点
	(16%)	(79%)	(５%)	(０%)	(100%)

【年代別組成】　151点を以下のように半世紀ごとに区切って集計すると以下のようになる。なお、年代幅のある資料については、その下限をとった。

17世紀前半	22点(15%)	擂鉢抜き７点(６%)	擂鉢15点
17世紀後半	10点(７%)	10点(９%)	
18世紀前半	14点(９%)	14点(11%)	
18世紀後半	31点(21%)	31点(27%)	
19世紀前半	74点(48%)	擂鉢抜き63点(47%)	擂鉢11点
	151点(100%)	125点(100%)	

この中で最も量が多いのは19世紀前半の74点で、全体の５割を占めている。２番目に多いのは18世紀後半で31点である。但しこの中の数字で、17世紀前半は擂鉢の数が15点含まれており、数字を引き上げていることから、擂鉢を除いて集計してみた。上記の右側がその集計であるが、17世紀前半の割合は減少するものの、19世紀前半がほぼ半数を占めている。その次に多いのは18世紀後半であり、19世紀前半をピークとし、その直前の18世紀後半はその半分に減り、年代が古くなると加速度的に遺物は減る。これは尾張家十代藩主斉とも（在位1818～30年）に二之丸庭園が大改造された文献上の事象との関連性が伺える。

以上、今回の調査の陶磁器・土器を中心に、その概略を述べてきたが、尾張藩の本城の二之丸庭園という特殊性も視野に入れながら、特色を掲げれば次の４点が提示できる。

１．瀬戸美濃産陶磁器の量が卓越していること。これは尾張藩上屋敷跡（東京都新宿区所在。東京都埋蔵文化財センター2000～2010）でも同様の傾向が顕著にみられる。尾張藩が大生産地瀬戸を管理していることから、本城内への製品の供給は容易であったと考えられる。

２．三つ葉葵文の施される大鉢が出土していること（Ｐ34）。本城内用の特注品と思われる。名古屋城三の丸では、見込に押印で三つ葉葵文を施文する陶器の大鉢が２個体出土しているが、これは体部は残っていないために、本地点出土資料と同タイプかは不明（㈱イビソク編2011）。

３．家紋瓦がみられること。尾張徳川家の三つ葉葵文（35・36）と、桐葉文（28）が確認される。瓦当面のサイズからすれば、35・36は桟瓦と考えられる。29は前向きの兎文である。このモチーフは家紋としてはあるようだが、尾張藩の家紋ではない。瓦当面の文様に使われるのは大名屋敷では通例、家紋であり（商家の場合は店印や屋号）、その出自は不明である。また43の海鼠瓦は半円形の突帯があり、上にもう１枚組み合わせて使用したと思われる大型品で、円形の突帯内には家紋が貼り付けられていた可能性がある。これが壁面に掲げられた大型の建物が存在したのであろう。

４．施釉瓦がみられること。施釉瓦は軒丸・軒平・丸・平・桟・海鼠・特殊・磚がある。これらの種類から類推すれば、施釉瓦を葺いていた建物は本瓦葺きで、棟や床面にも施釉瓦や磚を用い、さらには特殊な瓦を葺いた建物があったことが想定される。また土塀の屋根に葺かれたと思われる瓦もある。これらが葺かれた年代は、桟瓦が認められること、他の陶磁器・土器の年代から鑑みれば、19世紀前半に廃棄されていったと考えられる（上限を想定する根拠を欠くが、桟瓦出現時期の17世紀後半としておく）。

この他、上質な茶入が３点（３個体）出土している。精良な水簸された土を使い、器壁も薄く作り出されている。茶入は江戸遺跡の大名屋敷ではほとんど出土しない器種であり、なおかつ嗜好性が強く出る器種である。他の瀬戸美濃産陶器が通例の消費地遺跡から出土するものと変わらない中で、使用者の階層性に直結する遺物として着目される。

このような遺物群からみれば、尾張藩徳川家の名古屋城内の藩主級の生活空間との想定を可能とする資料といえる。この遺物群がどこから持って来られたのかは不分明な部分を残すものの、その質の高さからすればごく近在からの搬入であろう。

【中世以前】

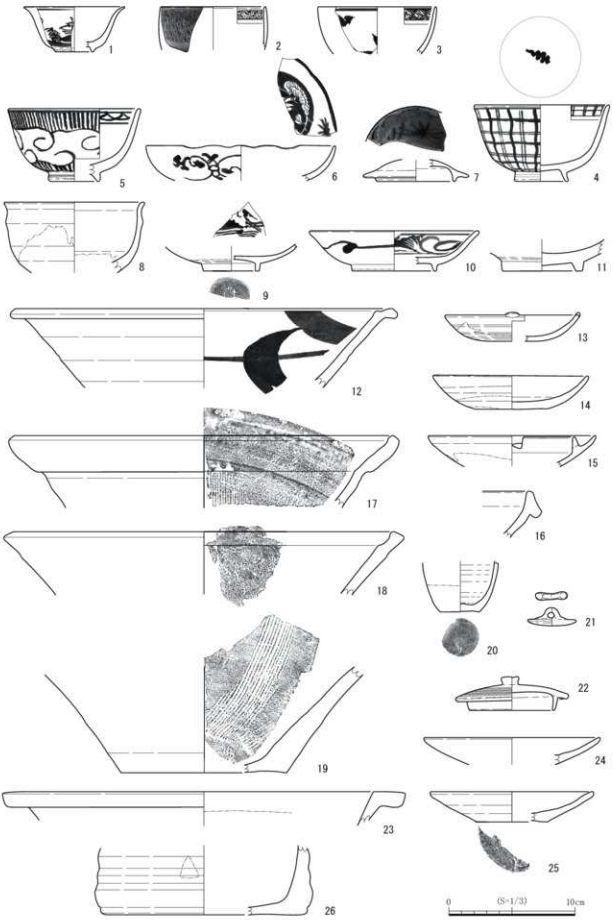
実測図掲載資料はなく、写真のみ掲載の９点である（遺物写真図版19）。時代ごとに分ければ、古墳時代の埴輪が２点、中世の磁器が２点、陶器が５点の計９点である。

Ｐ153・154は円筒埴輪である。Ｐ153は土師質、Ｐ154は須恵質である。後者は円孔の下部が残る。

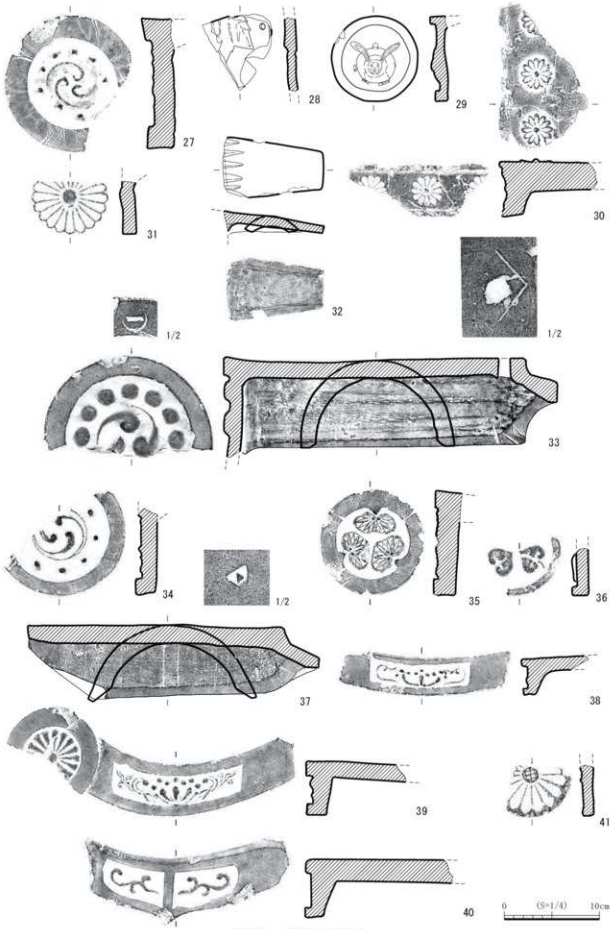
中世の遺物であるＰ156・157は中国産の貿易陶磁器である。Ｐ157・159～161は、大皿・盤の類の大型製品である。Ｐ158は、鉄釉（褐色）の上から黒色の鉄釉が斑状に散らされる小皿。これらの中世の遺物は、年代はいずれも中世後半（14～16世紀）に属し、その中でも15・16世紀のものが多い。名古屋城築城以前のこの地域が全くの無住地域ではなかったことを物語る。

【近代】

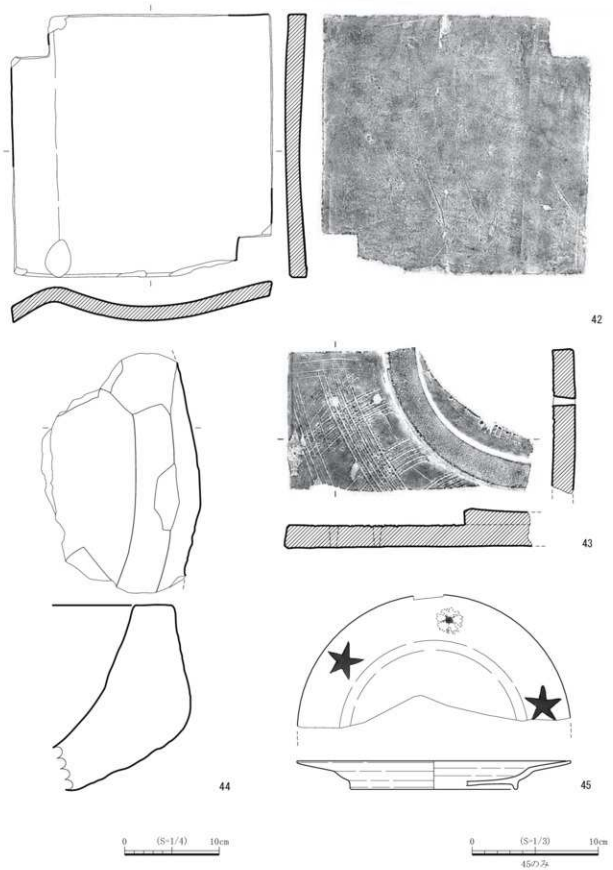
実測図掲載遺物は45の洋皿とＰ162の合成樹脂製の用途不明製品の計２点である。前者の星の上絵付は軍用食器の用途が想定される。後者は背面に「祈武運長久」の銘がみられることから、第二次世界大戦終結（1945年）以前の製品と推定する。懐中用の手鏡であろうか。


1
2
3
5
6
7
4
8
9
10
11
12
13
14
15
17
16
18
21
20
22
19
24
23
25
26
0
(S=1/3)
10cm

第56図　遺物実測図（1）



第57図　遺物実測図（2）



第58図　遺物実測図（3）

第 1 表　遺物観察表（実測図掲載遺物）

番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	法量（cm）	成形/文様/轆/印銘/窯詰等	釉土色粉質残存	生産地	年代	備考
1	図版2上下	3次-14	磁器小杯	口径：(8.0) 底径：(2.8) 器高：3.6	成形：ロクロ水挽き成形、塩反形/文様：染付：外面山水楼閣文/轆：生掛け。	灰白色粉質1/6	肥前	17世紀後半	
2	図版2上下	2次-133	磁器小丸碗	口径：(8.4) 底径：— 器高：(3.4)	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付：内面口縁部四方雅文、外面体部幾何学文。	白色粉質口縁～体部1/6	肥前	18世紀後半	
3	図版2上下	2次-69	磁器丸碗	口径：(9.4) 底径：— 器高：(3.7)	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付：内面口縁部四方雅文。	白色粉質口縁～体部1/6	肥前	18世紀	
4	図版2上下	2次-162	磁器端反碗	口径：(10.8) 底径：4.2 器高：6.1	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付：見込1重圏線内に文様あり、内面口縁部格子縞文様帯、外面格子縞文。	灰白色粉質2/3	肥前	19世紀前半	
5	図版1上下	3次-9	磁器端反碗	口径：(10.6) 底径：(3.6 器高：5.8	成形：ロクロ水挽き成形、塩反形/文様：染付：内面口縁部平行の連続文様帯、見込1重圏線、外面縁部文の地文に雲文。	白色ガラス質1/3	瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	
6	図版3上下	2次-100	磁器小皿	口径：(15.0) 底径：— 器高：(2.8)	成形：ロクロ水挽き成形後、体部輪花形に型打ち成形/文様：口縁、染付：見込：内面体部草花文、外面体部唐草文。	白色粉質体部片	肥前	17世紀末	
7	図版3上下	2次-179	磁器悪の盞	口径：— 底径：(6.2) 器高：(1.7)	成形：ロクロ水挽き成形、受部は貼付/文様：染付：外面松葉半円の連続文/轆：外面生掛け、内面無轆。	白色粉質1/4	肥前	1630～50年代	「初期伊万里」
8	図版4上下	2次120	陶器碗	口径：(12.1) 底径：— 器高：(5.6)	成形：ロクロ水挽き成形、すっぱんロ形/轆：内外面共、上半反轆下半鉄轆排け分け。	灰白色やや粗い体部1/3	瀬戸・美濃	18世紀前半	
9	図版5上下	2次-85	陶器平碗	口径：— 底径：(4.4) 器高：(2.2)	成形：ロクロ水挽き成形、高台内中央円形の削り/文様：染付：見込山水楼閣文/轆：内面～外面体部上・中位長石釉、外面体部下位～高台内無釉/印銘：高台内中央に「中村金」の刻印。	灰白色微密底体部片	唐津	18世紀末～19世紀初	「京焼風陶器」
10	図版5上下	2次-168	陶器小皿	口径：(13.4) 底径：(6.7) 器高：3.2	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付（白化粧）：内面体部唐草文、外面体部唐草文/轆：内外面長石釉。	灰白色やや粗い1/6	瀬戸・美濃	18世紀後半	「太子手」
11	図版5上下	2次-146	陶器鉢	口径：— 底径：6.3 器高：(2.5)	成形：ロクロ水挽き成形/轆：内外面灰釉/窯詰：畳付に目痕3個。	灰白色やや粗い底部	瀬戸・美濃	18世紀	
12	図版6上下	3次-24	陶器大皿	口径：(30.8) 底径：— 器高：(5.8)	成形：ロクロ水挽き成形、口縁は折縁/文様：内面鉄絵の上から緑釉流し掛け/轆：内外面長石釉。	灰白色やや粗い口縁～体部片	瀬戸・美濃	17世紀前半	唐様ぎ、「笠原鉢」
13	図版7下	3次-14	陶器灯明皿	口径：(10.6) 底径：(4.4) 器高：(2.2)	成形：ロクロ水挽き成形、口唇部に1箇所粘土塊を貼付/轆：内面～外面体部上半鉄轆、外面体部下半～底部轆抗取り/窯詰：外面体部に輪状の重ね痕。	灰白色やや粗い1/4	瀬戸・美濃	18世紀前半	
14	図版7下	3次-15	陶器灯明皿	口径：12.2 底径：5.8 器高：2.7	成形：ロクロ水挽き成形、外面体部下半～底部回転削り（左）/轆：内面～外面体部上半鉄轆、外面体部下半轆抗取り。	灰白色やや粗い2/3	瀬戸・美濃	18世紀後半	
15	図版7下	2次-99	陶器灯明受皿	口径：(13.4) 底径：— 器高：(2.4)	成形：ロクロ水挽き成形、受部は貼付、受部に1箇所の箆形の切り欠き/轆：内面～外面体部上半鉄轆の上から灰釉流し掛け、外面体部下半轆抗取り/窯詰：外面体部に輪状の重ね痕。	浅黄色やや粗い1/4	瀬戸・美濃	18世紀後半	焼成悪く釉白濁
16	図版11上	2次-153	陶器擂鉢	口径：— 底径：— 器高：(3.7)	成形：ロクロ使用の経作り成形、口縁部「T」字状/轆：内外面鉄轆。	にぶい橙色やや粗い口縁部片	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
17	図版11下	2次-28	陶器擂鉢	口径：(30.0) 底径：— 器高：(5.7)	成形：ロクロ使用の経作り成形、口縁は折縁、櫛目の単位9本以上/轆：内外面鉄轆。	にぶい黄橙色やや粗い口縁部片	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	片口部の近く
18	図版11上	2次-121	陶器擂鉢	口径：(30.0) 底径：— 器高：(5.0)	成形：ロクロ使用の経作り成形、内面口縁部突帯巡る、口縁部断面角稜状、内面櫛目工本以上/轆：内外面鉄轆。	灰白色やや粗い口縁部片	瀬戸・美濃	17世紀前葉	片口部の近く
19	図版11上	2次-17	陶器擂鉢	口径：— 底径：(13.0) 器高：(8.4)	成形：ロクロ使用の経作り成形、底部静止糸切り痕、内面櫛目14本/轆：内外面鉄轆、外面体部下半轆抗取り/窯詰：内面体部下半目痕海看部抗取り。	灰白色やや粗い底体部片	瀬戸・美濃	17世紀前葉	櫛目擦れている
20	図版7下	2次-104	陶器茶入	口径：— 底径：3.2 器高：(4.1)	成形：ロクロ水挽き成形、内面ロクロ目顕著、底部回転糸削り痕（右）/轆：外面体部上・中位鉄轆、内面～外面体部下半以下無轆。	灰色微密体部下半以下残	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
21	図版7上	2次-186	陶器水注の盞	口径：3.9 底径：— 器高：2.0	成形：ロクロ水挽き成形、摘み2箇所粘土紐をアーチ状に貼付/轆：外面鉄轆、内面無轆。	灰白色やや粗い3/4	瀬戸・美濃	17世紀後半～19世紀前半	
22	図版8上	3次-13	陶器土瓶の盞	口径：6.8 底径：— 器高：2.7	成形：ロクロ水挽き成形、受部と摘み（円筒部）は貼付、外面に条線文が巡る/轆：外面鉄轆、内面無轆、上面に蒔灰。	灰白色やや粗い1/2	瀬戸・美濃	19世紀前半	
23	図版8下	2次-150	陶器植木鉢	口径：(27.0) 底径：— 器高：(2.7)	成形：ロクロ水挽き成形、口縁押形/轆：内面口縁～上面に灰釉、内面体部無轆。	灰白色やや粗い口縁部片	瀬戸・美濃	18世紀第四半期～19世紀前半	
24	図版12上下	2次-50	土器かわらけ	口径：(14.0) 底径：— 器高：(2.1)	成形：ロクロ水挽き成形。	橙色白色粘土混在口縁～体部片	在地	18～19世紀前半	
25	図版12上下	2次-50	土器かわらけ	口径：(13.0 底径：(5.6 器高：2.4	成形：ロクロ水挽き成形、底部回転糸切り痕（右）。	橙色白色粘土混在1/5	在地	18～19世紀前半	内面指圧刺落、口唇部煤付着

番号	写真図版番号	取上番号	器類器種	法量（cm）	成形/文様/釉/印銘/雲母等	胎土色 胎質 残存	生産地	年代	備考
26	図版12 上下	2次-120	土製品 泥鉢	口径：－ 底径：(15.2) 器高：(5.5	成形：ロクロ水挽き成形。底部回転糸切り痕，底部周囲回転削り。	にぶい黄橙色 砂粒・小礫 1/6	瀬戸・美濃	17～19世紀前半	
27	図版13 上下	2次-2	施釉瓦 軒丸瓦	長：13.7 幅：(12.1) 厚：3.1	文様：連珠三巴文，右巻8(5+9)珠。巴細い。周縁広い/釉：外面に緑釉，裏面緑釉状取り。	浅黄橙色 砂粒 軒丸部	瀬戸・美濃		
28	図版13 上下	2次-108	施釉瓦 軒丸瓦	長：(7.6) 幅：(7.2) 厚：(1.3)	文様：家紋瓦で桐葉文か，その周囲に連珠文，文様は陽刻で葉脈は陰刻文，1珠残/釉：内外面に緑釉。	灰白色 粗雲 軒丸部片	瀬戸・美濃		
29	図版13 上下	2次-18	施釉瓦 軒桟丸	長：(8.9) 幅：(9.0) 厚：(1.7)	文様：家紋瓦か，前向きの雀。文様は陽刻/釉：内外面に緑釉(前面は焼き過ぎで暗灰色に変色)。	にぶい橙色 粗雲 軒丸部	瀬戸・美濃		
30	図版16 上	2次-80	施釉瓦 海鼠瓦	長：(9.7) 幅：(9.0) 厚：(5.7)	成形：海鼠瓦の軒の部分と推定。瓦頭面は12弁菊花文(陰刻)。上面は12弁菊花文(陽刻)/釉：全面灰釉，菊花文のみ鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い 軒～上面部片	瀬戸・美濃		
31	図版13 上下	2次-42	施釉瓦 菊丸瓦	長：－ 幅：(8.0) 厚：(1.5)	文様:20弁菊花文(陰弁)，花芯陽刻，花弁縁伏に表現，輪郭輪花状/釉：外面～側面緑釉(剥落多し)，内面無釉。	赤橙色 白色粒 瓦頭部3/4	瀬戸・美濃		
32	図版13 上下	2次-120	施釉瓦 菊丸瓦	長：(10.5) 幅：5.5 厚：1.1	文様：外面瓦当部側は花弁状に切り込み/釉：外面瓦当部側に灰釉残。	浅黄橙色 やや粗い 丸瓦部	瀬戸・美濃		
33	図版18 中	3次-36	瓦 軒丸瓦	長：35.0 幅：17.3 厚：2.1	文様：連珠三巴文，右巻7珠残，巴頭大，珠文極めて大/丸瓦部成形等：釘穴瓦頭端部より28.8cmで直径1.2cm/刻印：体部上面釘穴珠縁寄りに「へ」，瓦頭部周縁に「丸に一」。	浅黄橙色 やや粗い 5/6	在地か	18世紀・19世紀	
34	図版16 下	3次-8	瓦 軒丸瓦	長：(8.4) 幅：(11.0) 厚：(2.1)	文様：連珠三巴右巻5珠残，尾部長い。	灰白色 砂粒 瓦頭部1/2	在地か		
35	図版16 下	2次-115	瓦 軒丸瓦	長：11.0 幅：11.0 厚：2.8	成形：瓦当面に雲母粉/文様：丸に三葉葵文(陽刻)，葵葉脈は陽刻。	灰色 黒色粒 瓦当部	在地か	17世紀～19世紀前半	
36	図版16 下	2次-48	瓦 軒桟瓦	長：40.5 幅：17.7 厚：2.0	成形：丸に三葉葵文(陽刻)，葵葉脈は陰刻，周縁は狭い。	灰白色 焼成不良 瓦当部1/3	在地か	18世紀～19世紀前半	
37	図版17 上下	2次-183	瓦 丸瓦	長：30.8 幅：18.0 厚：2.7	成形：玉縁短め。布目細かく不明瞭/刻印：体部上面玉縁近くに「ミツクロコ」。	灰白色 やや粗い 1は完形	在地か	19世紀前半	
38	図版18 上	2次-69	瓦 軒桟瓦	長：(7.0) 幅：(17.2) 厚：(3.8)	成形：小型/文様：中心飾りは菖の手状か(陽刻)，唐草は内巻き(陽刻)。	灰白色 やや粗い 軒平部	在地か	18世紀～19世紀前半	
39	図版18 上	2次-111	瓦 軒桟瓦	長：(10.4) 幅：30.3 厚：1.8	文様：軒丸瓦10弁以上の菊花文(陽弁)，花芯陽刻，軒平部中心飾りは菖の手状(陽刻)，その周りの葉は陽刻，その外側の唐草又は編笹を陽刻。	灰白色 やや粗い 軒部4/5	在地か	18世紀～19世紀前半	
40	図版18 上	2次-149	瓦 軒桟瓦	長：(18.8) 幅：28.5 厚：2.4	成形：軒平部下端丸る/文様：中央に区画線の入る均等唐草文(陽刻)。	灰白色 黒色粒 1/2	在地か	18世紀～19世紀前半	
41	図版16 下	2次-53	瓦 軒桟瓦	長：－ 幅：－ 厚：(1.3)	文様：12弁以上の菊花文(陰弁)，花芯陽刻で中央は方形の区画(陰刻)。	灰色 砂粒 瓦当部1/3	在地か	17世紀～19世紀前半	
42	図版17 上下	2次-105	瓦 桟瓦	長：27.3 幅：27.5 厚：1.7	成形：桟部切込4×4cm，平部切込3.5×3.5cm，表面雲母粉。	灰色 小礫 1は完形	在地か	18世紀～19世紀前半	
43	図版17 上下	3次-5	瓦 海鼠瓦	長：(15.2) 幅：(26.2) 厚：(4.0)	成形：釘穴4.5cm間隔で2箇所，条痕文は(6条1単位)斜格子状，円形の突帯貼付，円形内にも格子状の条痕文。	灰白色 黒色粒 破片	在地か	17世紀～19世紀前半	
44	図版18 中	3次-27	赤唐製品 つくばい	口径：－ 底径：－ 器高：(19.6)	成形：白赤唐で形作り，表面は小礫(粒径2～6mm)を混入した赤唐唐(厚7～8mm)を上塗り。	灰白色 小礫 破片	不明	17世紀～19世紀前半	
45	図版18 下	2次-97	磁器 鉄釉皿 中皿	口径：(21.7) 底径：(13.0) 器高：2.3	成形：鋳型成形/文様：内面口縁部金色，内面体部柚上彩(粉彩)で星印と花文(黒・橙・桃・黄色)。	灰白色 ガラス質 1/3	瀬戸・美濃	20世紀前半	

第２表　遺物観察表（写真図版のみ掲載遺物）

番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	残存部位	成形/文様/釉/印紙/素詰等	胎土色粘質	生産地	年代	備考
P1	図版1上下	2次-104	磁器 端反碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形、端反形/文様：染付:内面口縁部平円の連続文様帯、外面円形区画と横線文。	白色ガラス質	瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	
P2	図版1上下	2次-158	磁器 端反碗	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形、端反形/文様：染付:内面文様あり、外面縦線文。	白色ガラス質	瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	
P3	図版1上下	3次-9	磁器 端反碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形、端反形/文様：口錆、染付:外面草花文。	白色ガラス質	瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	
P4	図版1上下	2次-149	磁器 碗	下半以下1/3	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:見込/重圏線、外面区画附草花文。	白色ガラス質	瀬戸・美濃	19世紀第2四半期	
P5	図版2上下	3次-26	磁器 小杯	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:見込/重圏線、外面区画附草花文。	白色粉質	肥前	1670年代～18世紀初	
P6	図版2上下	2次-69	磁器 小杯か	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:外面草花文、内面口縁部/重圏線。	白色粉質	肥前	18世紀	
P7	図版2上下	2次-134	磁器 丸碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形、器壁厚手/文様：染付:外面草花文。	灰白色粉質	肥前	18世紀前半	「くらわんか手」
P8	図版2上下	3次-3	磁器 端反碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形、端反形/文様：染付:外面草花文か。	白色粉質	肥前	18～19世紀前半	
P9	図版2上下	2次-63	磁器 碗	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：外面鉄釉の上から鉄釉流し掛け。	白色粉質	肥前	17世紀後半	
P10	図版2上下	2次-144	磁器 丸碗	体部下半以下片	成形：ロクロ水挽き成形、器壁厚手/文様：染付：文様あり。	白色粉質	肥前	18世紀前半	「くらわんか手」
P11	図版2上下	3次-15	磁器 碗	体部下半片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付/釉：生掛け。	白色粉質	肥前	1630～50年代	「初期伊万里」
P12	図版2上下	2次-74	磁器 碗	体部～高台部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:見込動物文/釉：体部外面鉄釉。	白色粉質	肥前	19世紀前半	
P13	図版3上下	3次-18	磁器 小皿	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形、鐔付/釉：内外面青磁釉。	白色粉質	肥前	17世紀後半	
P14	図版3上下	3次-13	磁器 小皿	口縁～体部片	成形：ロクロ型打ち成形、輪花形/文様：口錆、染付：内面白化粧貫出水禽図文。	白色粉質	肥前	19世紀前半	
P15	図版3上下	2次-62	磁器 変形小皿	口縁～体部片	成形：ロクロ型打ち成形、体部角形/文様：口錆、染付：内面唐草文、外面折枝花文。	白色粉質	肥前	1650～60年代	
P16	図版3上下	2次-50	磁器 皿	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:内面紅葉文。	白色粉質	肥前	17世紀後半	
P17	図版3上下	3次-18	磁器 大皿	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:内面1重圏目文 二花文(コンニャク印刷)、外面文様あり。	白色粉質	肥前	17世紀末～18世紀初	
P18	図版3上下	2次-63	磁器 壺の蓋	摘み～体部上半	成形：ロクロ水挽き成形、摘み貼付、摘みの形は円錐逆台形/文様：白磁/釉：生掛け、内面無釉。	灰白色粉質	肥前	18世紀	
P19	図版4上下	2次-41	陶器 碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内外面長石釉。	白色粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P20	図版4上下	2次-62	陶器 天目碗	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内～外面体部上半鉄釉(黒色)、外面体部下半無釉。	淡黄色粗い	瀬戸・美濃	17世紀	内面無光沢(使用痕か)
P21	図版4上下	2次-82	陶器 碗	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内～外面体部上半鉄釉(明褐色)の上から鉄釉(黒褐色)流し掛け。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	17世紀	
P22	図版4上下	2次-171	陶器 碗	高台部片1/2	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内～外面体部灰釉、外面高台部無釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P23	図版4上下	2次-82	陶器 碗	高台部	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内～外面体部灰釉、外面高台部無釉。	淡黄色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀	高台内：墨書(判読不能)
P24	図版4上下	2次-162	陶器 碗	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：外面欧で文字文/釉：灰釉。	灰白色緻密	京焼	18世紀前半	
P25	図版4上下	2次-131	陶器 半球碗か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内～外面体部灰釉、外面高台部無釉。	灰白色緻密	京焼・信楽	18世紀前半	
P26	図版4上下	2次-82	陶器 半球碗か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形。	浅黄色緻密	唐津	17世紀後半～18世紀前葉	「京焼風陶器」か
P27	図版4上下	2次-181	陶器 半球碗か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内外面灰釉。	浅黄色緻密	唐津	17世紀後半～18世紀前葉	
P28	図版5上下	2次-164	陶器 小皿	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P29	図版5上下	3次-18	陶器 変形小皿	体部片	成形：型押し成形、紅葉の葉形ふ/釉：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀後半	「御深井」製品
P30	図版5上下	2次-135	陶器 小皿	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：内面鉄胴で文様あり/釉：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P31	図版5上下	3次-9	陶器 小皿	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付(白化粧)：文様あり、外面文様あり。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀後半	「太子手」
P32	図版5上下	2次-62	陶器 中皿	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：内面鉄と鼎胴で梅枝文(摺絵)/釉：内外面灰釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P33	図版6上下	2次-41	陶器 大鉢	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形、口縁は折縁/釉：内外縁釉流し掛け か、内外長石釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	17～18世紀	「笠原鉢」
P34	図版6上下	2次-13	陶器 大鉢か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：内面に三葉葵文(押印、強烈)/釉：内外面灰釉、三葉葵文は緑釉掛け。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀	
P35	図版6上下	2次-180	陶器 大鉢	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形、口縁は折縁/文様：鉄絵/釉：緑釉流し掛けか、その上から内外面長石釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	18世紀	「笠原鉢」
P36	図版6上下	3次-15	陶器 大甕か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：内面鉄絵/釉：内外面長石釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	17～18世紀	「笠原鉢」か

番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	残存部位	成形/文様/軸/印銘/窯詰等	胎土色胎質	生産地	年代	備考
P37	図版6上下	2次-157	陶器大鉢	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：見込円形に条線文/軸：見込縁軸周縁の上から内外面長石釉，高台内に釉状取り。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	「黄瀬戸鉢」
P38	図版6上下	2次-80	陶器大鉢	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：見込円形に条線文/軸：見込縁軸周縁の上から内外面長石釉，高台内に釉状取り。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	17～18世紀	「笠原鉢」
P39	図版6上下	2次-47	陶器大鉢	体部下半～底部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：内面櫛描/軸：内面～外面体部～最付長石釉，高台内無釉/窯詰：見込に目痕1個残。	灰色粗い	瀬戸・美濃	17～18世紀	「笠原鉢」
P40	図版6上下	3次-2	陶器大鉢か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P41	図版7上	2次-179	陶器水注	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面灰釉，口唇～内面口縁部釉状取り。	灰白色緻密	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P42	図版7上	2次-156	陶器片口か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，玉縁/軸：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀前葉～19世紀前半	
P43	図版7上	2次-157	陶器器種不明	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面灰釉，内面灰釉刷毛塗り。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半か	
P44	図版7上	2次-144	陶器行平鍋の蓋	高台部周囲片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：外面飲で斜格子文/軸：外面縁軸間，後内外面長石釉刷毛塗り。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P45	図版7上	2次-145	陶器壺か蓋	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，落とし蓋/軸：内外面口縁部鉄釉，内外面体部無釉。	浅黄橙色緻密	瀬戸・美濃	17～18世紀	
P46	図版7上	2次-82	陶器受盃か	1/4	成形：ロクロ水挽き成形，底部周囲回転削り(左)，見込の体部際に沈線1条巡る/軸：内外面鉄釉状取り。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P47	図版7上	3次-14	陶器灰落としか	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面中位に横位の沈線が巡る/文様：外面飲で渦巻文/軸：内外面長石釉。	灰白色緻密	京焼	18～19世紀前半	
P48	図版7上	2次-68	陶器灰落としか	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：外面白化粧/軸：内外面長石釉，外面焦色貫入。	橙灰色緻密	京焼	18世紀前葉～19世紀前半	
P49	図版7上	2次-82	陶器水注の蓋	1/5	成形：ロクロ水挽き成形，体部から口縁は有段，かぶせ蓋/軸：外面灰釉，内面無釉。	灰白色緻密	京焼・信楽	19世紀前半	
P50	図版7上	2次-159	陶器行平鍋の蓋	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面口縁部に3条の沈線巡る/軸：内外面灰釉。	灰白色緻密	京焼・信楽	19世紀前半	
P51	図版7上	2次-157	陶器土瓶のミニチュア	体部下半以下1/4	成形：上下分割の型押し成形，足は粘土塊貼付け(個残)/軸：外面長石釉，内面無釉。	灰白色緻密	京焼	19世紀前半	
P52	図版7下	2次-72	陶器茶入	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面体部に横位の沈線巡る，器壁薄い/軸：外面鉄釉。	灰白色緻密	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P53	図版7下	2次-177	陶器茶入	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，内面ロクロ目顕著，外面体部に横位の沈線1条巡る，器壁薄い/軸：外面鉄釉の上から灰釉流し掛け。	灰色緻密	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P54	図版7下	2次-159	陶器灯明受皿	1/4	成形：ロクロ水挽き成形，外面底部回転削り，受部は貼付/軸：内面～外面体部上半鉄釉，外面体部下半釉状取り/窯詰：外面体部に輪状の重ね痕。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀後半	
P55	図版8上	2次-68	陶器瓶か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面鉄釉，内面錆釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P56	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P57	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面下方は回転削り/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P58	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面下方は回転削り/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P59	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面下方は回転削り/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P60	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P61	図版8上	2次-47	陶器舟徳利	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面回転削り/軸：外面鉄釉，内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀	P56～61は同一個体
P62	図版8上	3次-12	陶器瓶か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P63	図版8上	2次-118	陶器土瓶	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面に横位の条線文/軸：外面鉄釉，内面錆釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「駄知土瓶」
P64	図版8上	2次-127	陶器土瓶	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面に横位の条線文/軸：外面鉄釉，内面錆釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	注口近くの破片，「駄知土瓶」
P65	図版8上	2次-118	陶器土瓶	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面体部上半に横位の条線文/軸：外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「駄知土瓶」
P66	図版8上	3次-13	陶器土瓶	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面に横位の条線文/軸：外面鉄釉，内面錆釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	注口近くの破片，「駄知土瓶」
P67	図版8上	2次-102	陶器土瓶	体部片	成形：ロクロ水挽き成形，外面体部上半に横位の条線文/軸：外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「駄知土瓶」
P68	図版8下	2次-158	陶器水壺	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形，口唇部は比厚し，内側に折返し状/軸：外面灰釉の上から緑釉流し掛け，内面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	

番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	残存部位	成形/文様/軸/印紙/窯詰等	胎土色胎質	生産地	年代	備考
P69	図版8下	2次-189	陶器水煙	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。口唇部は比厚し。口唇部は面取し。沓「1」字状に内面に突出/軸：灰釉の上から鉄釉掛。内面灰釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P70	図版8下	3次-9	陶器水煙	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：外面断込みで文様あり/軸：内外面灰釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P71	図版8下	2次-104	陶器水煙か	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面灰釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P72	図版8下	2次-146	陶器水煙	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面灰釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P73	図版8下	2次-120	陶器植木鉢	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。口縁捏形/軸：内面口縁～外面灰釉、内面体部無釉。	淡黄色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀第4四半期～19世紀前半	
P74	図版8下	2次-58	陶器植木鉢	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。口縁捏形/軸：内面口縁～外面縁軸、内面体部無釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	18世紀第4四半期～19世紀前半	
P75	図版8下	3次-9	陶器植木鉢	体部下半以下1/2	成形：ロクロ水挽き成形。挟り底、底部中央に窄孔1箇所(下一上)、高台部にアーチ形の切り欠き1箇所残/軸：外面体部鉄釉、内面・外面体部下半以下無釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀第4四半期～19世紀前半	
P76	図版9上下	2次-76	陶器壺	肩部片	成形：ロクロ水挽き成形。外部肩部に耳貼付1箇所残/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀前半	
P77	図版9上下	2次-12	陶器壺	肩部片	成形：ロクロ水挽き成形。外部肩部に結土縁の耳を貼付/軸：外面鉄釉の上からうのふ釉掛け、内面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀前葉	
P78	図版9上下	2次-169	陶器壺	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀か	
P79	図版9上下	2次-135	陶器壺	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。肩部に段あり、口縁部は「T」字状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	口唇部に擬宝顕著
P80	図版9上下	2次-114	陶器壺	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面鉄釉、内面無釉。	灰白色緻密	瀬戸・美濃	17世紀	
P81	図版9上下	2次-86	陶器半胴甕	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。口唇部は比厚し。口唇部は面取し。「T」字状：内外面鉄釉。/黒点：口唇部に目痕1個残。	にぶい黄橙色黒色粒	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P82	図版9上下	3次-18	陶器半胴甕	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形。口唇部は比厚し。平坦。外面口縁部に横位の沈線が1条巡る/軸：内外面鉄釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P83	図版9上下	2次-68	陶器半胴甕	体部片	成形：ロクロ水挽き成形。外面口縁部に横位の沈線が2条巡る/軸：内外面鉄釉。	暗灰黄色黒色粒	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P84	図版9上下	2次-120	陶器甕	底部片	成形：ロクロ水挽き成形。広口の甕か。曲付輪広/軸：内面鉄釉、外面体部下位～高台内無釉。	淡黄色やや粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	高台内墨書：判読不能
P85	図版9上下	2次-133	陶器徳利	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：外面体部鉄釉、内面体部下位～高台内無釉。	灰黄色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀末～18世紀初	「足呂徳利」
P86	図版9上下	2次-73	陶器半胴甕	底部片	成形：ロクロ水挽き成形。挟り底/軸：内面～外面体部下位まで鉄釉。外面体部下位以下無釉。	灰黄色黒色粒・砂粒	瀬戸・美濃	19世紀前半	
P87	図版10上下	2次-165	陶器火鉢	口縁～体部片	成形：ロクロ成形。口縁部内側まで三線/軸：外面～内面口唇部鉄釉、内面体部鉄釉刷毛塗り。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「瓶掛」
P88	図版10上下	2次-168	陶器火鉢	体部片	成形：ロクロ成形/文様：外面体部中位に横位の沈線1条。その下に連続する円形の押印文/軸：外面下半鉄釉の上から上半鉄釉、内面無釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「瓶掛」
P89	図版10上下	2次-188	陶器火鉢	底部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。底部ベタ底/軸：内面・外面体部下位～底部鉄釉、内面鉄釉刷毛塗。外面体部中位灰釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「瓶掛」
P90	図版10上下	2次-143	陶器火鉢	底部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。底部ベタ底/軸：内面鉄釉刷毛塗。外面体部鉄釉、底部無釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「瓶掛」
P91	図版10上下	2次-168	陶器火鉢	底部1/4	成形：ロクロ使用の綾作り成形。底部ベタ底/軸：内面・外面底部鉄釉刷毛塗の上から外面体部上半白化粧の上に灰釉/黒点：見込部円形の痕跡み残。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	19世紀前半	「瓶掛」
P92	図版11上	2次-114	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	片口部
P93	図版11上	2次-131	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	口唇部内外端部剥れ
P94	図版11上	3次-13	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P95	図版11上	2次-156	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	口唇部内外端部剥れ
P96	図版11上	3次-22	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P97	図版11上	3次-15	陶器擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面口縁部突帯巡る。口縁部断面角棒状/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P98	図版11上	2次-163	陶器擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形/軸：内外面鉄釉。	橙色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P99	図版11上	2次-133	陶器擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面擂目単位5本以上/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P100	図版11上	2次-50	陶器擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の綾作り成形。内面擂目単位5本以上/軸：内外面鉄釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	

番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	残存部位	成形/文様/軸/印銘/窯詰等	胎土色 胎質	生産地	年代	備考
P101	図版11上	2次-157	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。内面擂目単位8本以上/軸：内外面鉄釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P102	図版11上	3次-14	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。内面擂目単位10本以上/軸：内外面鉄釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P103	図版11上	2次-164	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。内面擂目単位10本以上/軸：内面～外面上半鉄釉、外面下半軸拭取り。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	内面擦れ顕著
P104	図版11上	2次-141	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。内面擂目単位12本以上/軸：内外面鉄釉。	にぶい橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	擂目擦れている
P105	図版11上	2次-180	陶器 擂鉢	底部 1/4	成形：ロクロ使用の紐作り成形。底部回転糸切り痕。見込は円形に擂目。擂目の単位は10本以上/軸：内外面鉄釉。外面体部下位以下軸拭取り。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃	17世紀前葉	
P106	図版11上	2次-152	陶器 擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。外面横位の強で、擂目の単位は8本以上/軸：無釉焼締め。	褐灰色 砂粒・小礫	備前	17世紀前半	
P107	図版11下	2次-133	陶器 擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。口縁部は折縁で外側に折返し/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P108	図版11下	2次-169	陶器 擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。口縁部は折縁/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18世紀	内面焼締。口唇部内外面擦れている
P109	図版11下	2次-159	陶器 擂鉢	口縁部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。口縁部は鍵形/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P110	図版11下	2次-62	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目は6本以上/軸：内外面鉄釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P111	図版11下	2次-156	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目は6本以上/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P112	図版11下	2次-73	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P113	図版11下	2次-71	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目は3本以上/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P114	図版11下	3次-14	陶器 擂鉢	体部下半 ～ 底部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目単位14本/軸：内外面鉄釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	擂目擦れている
P115	図版11下	2次-145	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目11本/軸：内外面鉄釉/窯詰：内面体部目痕部無釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	擂目擦れている
P116	図版11下	2次-149	陶器 擂鉢	体部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P117	図版11下	2次-82	陶器 擂鉢	体部下半 ～ 底部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P118	図版11下	2次-80	陶器 擂鉢	体部下半 ～ 底部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。底部回転糸切り痕。擂目は8本以上/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	擂目・底部擦れている
P119	図版11下	3次-13	陶器 擂鉢	体部下半 ～ 底部片	成形：ロクロ使用の紐作り成形。擂目は12本/軸：内外面鉄釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃	18～19世紀前半	
P120	図版12上下	2次-181	土器 かわらけ	口縁～ 体部片	成形：ロクロ水挽き成形。	橙色 緻密	在地	18～19世紀前半	口唇部煤付着
P121	図版12上下	2次-131	土器 煤壺	口縁部片	成形：ロクロ成形、口唇部肥厚、横撫で調整。	にぶい黄橙色 砂粒	在地	19世紀前半	
P122	図版12上下	2次-66	土器 火鉢	体部片	成形：ロクロ成形/文様：外面型打で縦線文と鋸歯文（陽刻）、陽刻部と内面を赤色で彩色。	灰白色 緻密	在地	19世紀前半	
P123	図版12上下	旅袖土器 灯明皿	口縁～ 体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉛透明釉。	浅黄橙色 粗い	在地	19世紀前半	
P124	図版12上下	旅袖土器 灯明皿	口縁～ 体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉛透明釉。	橙色 粗い	在地	19世紀前半	
P125	図版12上下	旅袖土器 行平鍋	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉛透明釉、外面鉛黒色釉。	明褐灰色 白色粒	在地	19世紀前半	P126と同一個体か	
P126	図版12上下	旅袖土器 行平鍋	体部片	成形：ロクロ水挽き成形/軸：内外面鉛透明釉、外面鉛黒色釉。	明褐灰色 白色粒	在地	19世紀前半	P125と同一個体か	
P127	図版13上下	2次-52	旅袖瓦 海鼠瓦	破片	成形：釘穴縁辺から1.3cm/軸：外面緑釉鼠れ。	灰白色 白色粒	瀬戸・美濃		
P128	図版13上下	2次-133	旅袖瓦 磯か	破片	軸：表裏面緑釉、裏面は無釉部もあり。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃		
P129	図版14上下	2次-189	旅袖瓦 丸瓦	1/3	成形：釘穴1箇所残（体部端部より11.5cmの所）/軸：外面銘釉の上から緑釉、内面無釉。	浅黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃		
P130	図版14上下	2次-160	旅袖瓦 丸瓦	1/4	成形：釘穴1箇所残（体部端部より8.5cmの所）、内面横位の削り/軸：外面緑釉、内面無釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃		
P131	図版14上下	2次-54	旅袖瓦 丸瓦	破片	成形：内面重複する棒状の圧痕/軸：外面緑釉、内面無釉。	灰白色 やや粗い	瀬戸・美濃		
P132	図版14上下	2次-52	旅袖瓦 丸瓦	破片	軸：外面緑釉、内面無釉。	浅黄橙色 緻密	瀬戸・美濃		
P133	図版14上下	2次-100	旅袖瓦 丸瓦	破片	成形：内面横位の削り/軸：外面緑釉、内面無釉。	浅黄橙色 緻密	瀬戸・美濃		
P134	図版14上下	2次-42	旅袖瓦 丸瓦	破片	成形：内面横位の削り/軸：外面緑釉、内面無釉。	にぶい黄橙色 やや粗い	瀬戸・美濃		

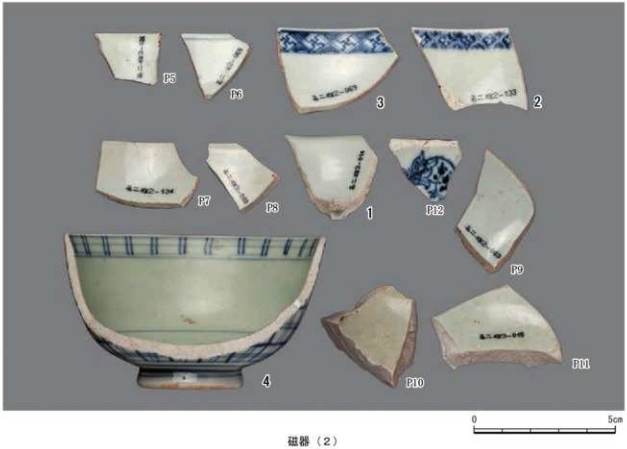
番号	写真図版番号	取上番号	器種器種	残存部位	成形/文様/釉/印紙/素詰等	胎土色胎質	生産地	年代	備考
P135	図版14上下	1次-25	施釉瓦丸瓦	破片	成形：小型で瓦当なし、内面布目/縁：外面縁釉、内面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P136	図版14上下	2次-180	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：内面横位の削り/縁：外面縁釉、内面無釉/文字：内面鏡で文字あり(判読不能)。	浅黄色やや粗い	瀬戸・美濃		
P137	図版15上下	3次-1	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：側縁の両端が反り返る/縁：上面～側縁～下面端部近く鉄釉、上面端部以外無釉、下面端部以外無釉。	浅黄色やや粗い	瀬戸・美濃		P137～141は同一個体か。
P138	図版15上下	2次-47	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：前縁端部近く上がりあり、上面～側縁～下面端部近く無で/縁：上面中央部鉄釉の上から鉄釉、前述以外は無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		P137～141は同一個体か。
P139	図版15上下	2次-96	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：写真の上が調整からみれば後縁、側縁端部下方へ「へ」の字形に屈曲、下面無で/縁：上面釉縁、下面無釉。	灰白色緻密	瀬戸・美濃		P137～141は同一個体か。
P140	図版15上下	2次-55	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：写真の上が縁の垂け方からみれば前縁、側縁端部は上方に屈曲/縁：上面縁釉、下面上方のみ縁釉、上面端部近く～側縁～下面無釉。	にぶい黄橙色緻密	瀬戸・美濃		P137～141は同一個体か。
P141	図版15上下	2次-62	施釉瓦特殊瓦	破片	成形：写真の上が調整からみれば後縁、側縁端部は上方に屈曲、側縁～上面無で、下面縦方向に削り/縁：上面の一部縁釉、上面～側縁～下面無釉。	にぶい黄橙色緻密	瀬戸・美濃		P137～141は同一個体か。
P142	図版15上下	2次-52	施釉瓦海鼠瓦	破片	成形：写真の上が雲詰からみれば後縁、釘穴1箇所(端部から3cmの所)、全面削り/縁：縁釉垂れ、他の面は無釉/雲詰：側縁に砂目痕2箇所残/墨書：下面に墨書あり(判読不能)。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P143	図版15上下	2次-180	施釉瓦平瓦か	破片	成形：下面横位に削り/縁：上面縁釉、側縁～下面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P144	図版15上下	2次-168	施釉瓦平瓦	破片	成形：写真の上が左側縁、下面端々無で、下面側縁近く～側縁～上面側縁近く無で/縁：上面縁釉、それ以外無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P145	図版15上下	2次-168	施釉瓦平瓦	破片	成形：写真の上が調整からみれば前縁、上面～側縁～下面側縁近く無で、下面平行線文の叩きか/縁：上面の一部釉縁の上からの釉縁、他は無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P146	図版15上下	2次-133	施釉瓦平瓦	破片	軸：上面縁釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		下面剥落
P147	図版15上下	2次-156	施釉瓦平瓦	破片	成形：写真の下が調整からみれば前縁、下面無で/縁：上面～側縁～下面近く縁釉、下面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P148	図版15上下	2次-180	施釉瓦平瓦	破片	成形：写真の左が左側縁、下面横位の削り/縁：上面縁釉、側縁～下面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P149	図版15上下	2次-61	施釉瓦平瓦	1/6	成形：写真の下が前縁、上面横位の削り、側縁周辺無で、下面縦位の削り/縁：上面～前縁～下面前縁近く縁釉、下面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P150	図版16上	2次-61	施釉瓦特殊軒瓦	破片	成形：正面形長方形の瓦当面は貼付、文様は唐草文か(陽刻)、瓦当横の側縁部に断面形三角形で長2.5×幅1.0～1.6cm、高0.5cmの突起を貼付/縁：瓦当～上面縁釉、側縁～下面無釉。	にぶい黄橙色やや粗い	瀬戸・美濃		
P151	図版16下	2次-130	施釉瓦軒丸瓦	瓦当部1/4	文様：連珠三巴左巻13珠以上、周縁広い、連珠大きく、巴尾部長い。	にぶい黄橙色やや粗い	在地か	17～19世紀前半	
P152	図版17上下	2次-180	施釉瓦丸瓦	玉縁部	成形：玉縁長い、裏面コビキ明瞭で抜き取り痕。	鶯灰色粗い	井在地か	17世紀前半	粘土は黒色粒・白色粒多い。
P153	図版19中	3次-17	土師器壺瓶	体部片	成形：縦作り成形、横位の隆帯貼付、外面上半縦位のハケメ。	橙色焼成：良	—	6世紀	粘土は粗砂・白色粘土含む
P154	図版19中	3次-21	須恵器壺瓶	体部片	成形：縦作り成形、横位の隆帯貼付、円形の穿孔1箇所、内面上半横位のハケメ、下半は横位のハケメ。	鶯灰色焼成：良好	—	6世紀	
P155	図版19中	2次-80	青磁碗	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：外面鎬連弁文/釉：内外面青磁釉(オリーブ黄色)。	灰白色緻密	中国・竜泉窯	14世紀	
P156	図版19中	2次-141	磁器碗	口縁～体部片	成形：ロクロ水挽き成形/文様：染付:内面口縁部2重圏線、外面文字と唐草文。	白色粘土質	中国・景徳鎮	16世紀後半	口売
P157	図版19中	2次-96	陶器盤	口縁部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内外面灰釉、焼成悪く部分的に白濁。	浅黄色粗い	瀬戸・美濃	14世紀後半～15世紀前半	古瀬戸後期か
P158	図版19中	3次-2	陶器小皿	1/6	成形：ロクロ水挽き成形、糸切に続い焼あり、端反形/釉：内面～外面体部鉄釉(褐色)の上から鉄釉(黒褐色)流し掛け、高台内無釉。	灰白色緻密	瀬戸・美濃	16世紀	大窯期
P159	図版19中	3次-8	陶器大皿	体部片	成形：ロクロ水挽き成形、直口縁/釉：内外面灰釉、内面下端無釉。	灰白色やや粗い	瀬戸・美濃	14世紀後半～15世紀第3四半期	釉剥がれあり、「折縁深皿」
P160	図版19中	3次-22	陶器大皿	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内面～外面体部灰釉、畳付～高台内無釉/素詰：見込目痕1箇所残。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	14世紀後半～15世紀第3四半期	釉剥がれあり
P161	図版19中	3次-7	陶器大皿	底部片	成形：ロクロ水挽き成形/釉：内面・外面体部～高台部灰釉、畳付～高台内無釉。	灰白色粗い	瀬戸・美濃	16世紀か	釉剥がれあり
P162	図版19上	3次-17	合成樹脂ガラス不明	完形	成形：表裏不明であるが、円形の平たい合成樹脂にガラスが嵌め込まれる。ガラスの裏面には桃色の付着物あり/印紙:表面に「折武運長久三井合名會社省略」(陽刻)。	赤色(合成樹脂)	不明	20世紀前半	用途不明

遺 物 写 真 図 版

遺物写真図版 1

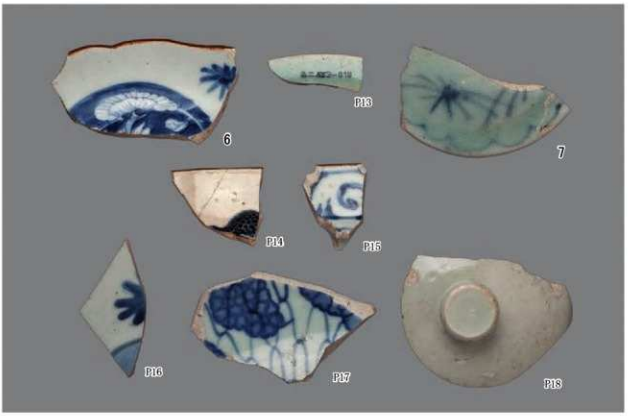
磁器（1）

P5
P6
3
2
P7
P8
1
P12
P9
4
P10
P11
0
5cm

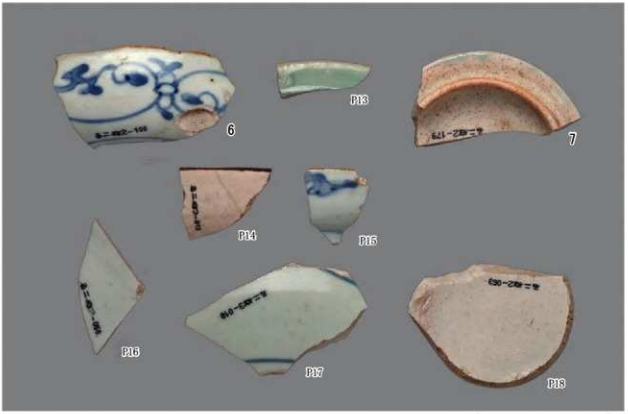

P5
P6
3
2
P7
P8
1
P12
P9
4
P10
P11
0
5cm

磁器（２）

遺物写真図版３



0　5cm



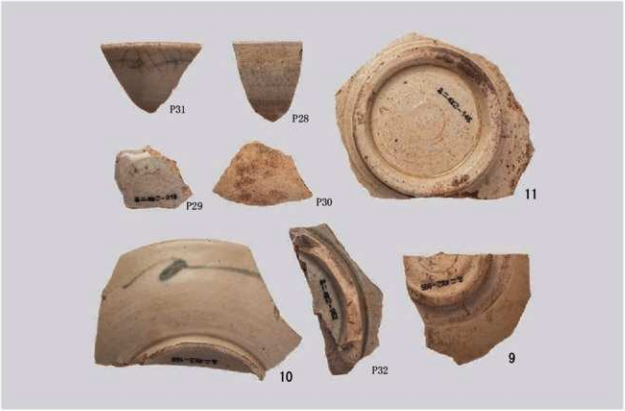
0　5cm

磁器（３）

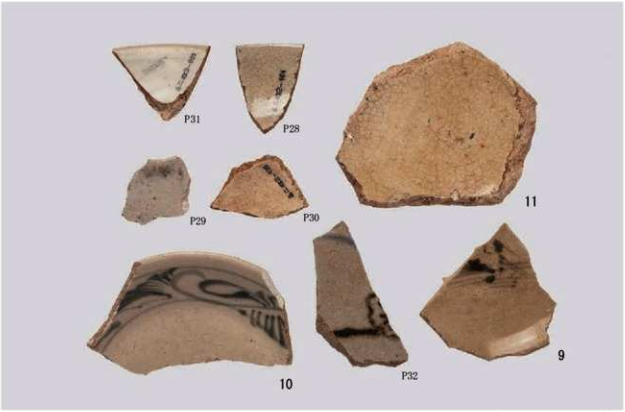
0 5cm

0 5cm

陶器（１）

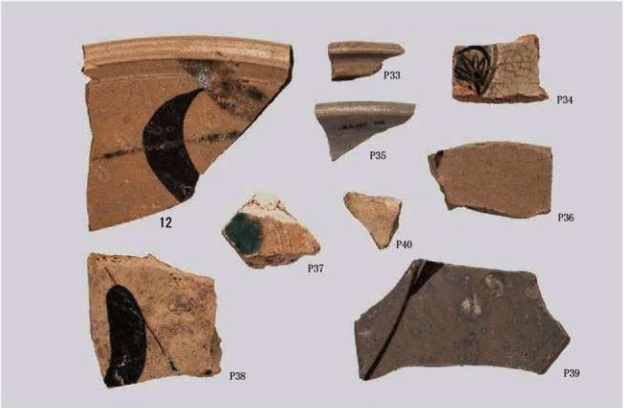


0 5cm



0 5cm

陶器（２）



0 5cm

0 5cm

陶器（3）

0 5cm

陶器（4）

0 5cm

陶器（5）

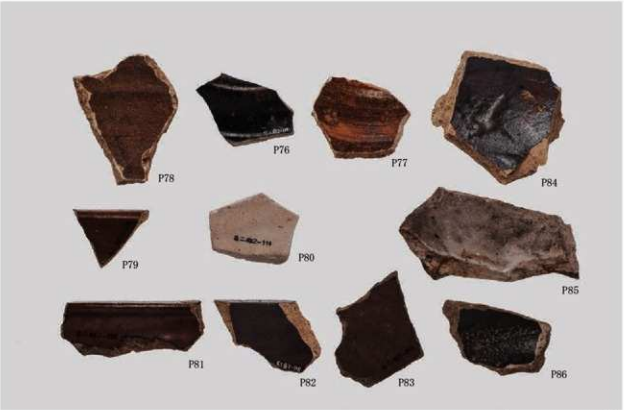
0 5cm

陶器（6）

0 5cm

陶器（7）

0 5cm



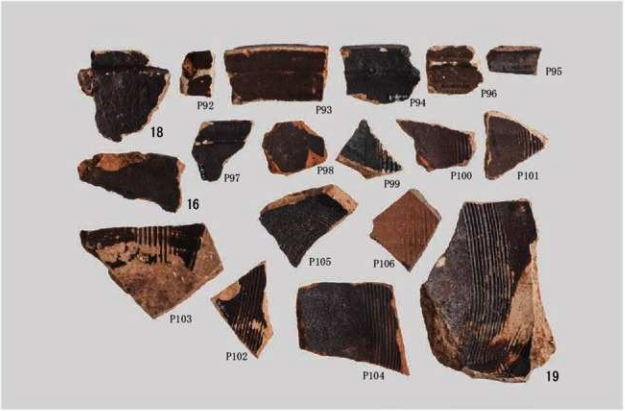
0 5cm

陶器（８）

0 5cm

0 5cm

陶器（9）


P92
P93
P94
P95
P96
18
P97
P98
P99
P100
P101
16
P105
P106
P103
P102
P104
19
0
5cm

陶器（10）

P109
P108
17
P107
P111
P114
P116
P112
P115
P113
P117
P118
P110
P119
0
5cm

陶器（11）

0 5cm

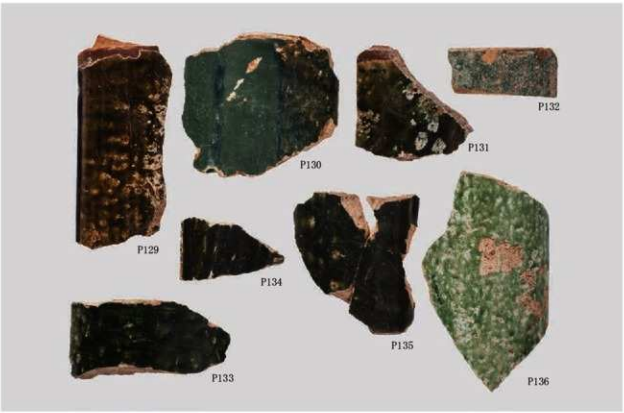
0 5cm

土器　他

0 5cm

0 5cm

施釉瓦（1）



0 5cm

0 5cm

施釉瓦（2）

0 10cm

0 10cm

施釉瓦（３）

施釉瓦（4）

0 5cm

瓦（1）

0 10cm

0 10cm

瓦（2）

瓦（3）・漆喰製品・近代の遺物（1）

0 5cm

0 5cm

0 5cm

近代の遺物（２）・中世以前の遺物

第７章　まとめ

平成25年度から着手した名勝名古屋城二之丸庭園の発掘調査は、名勝指定範囲内での初めての発掘調査であった。これまで表出部分については多くの研究が行われてきていたが、地下の状況については蓄積がなかったため、後世の改変や庭園遺構の埋没の有無などについては不明な部分が多く、調査成果が期待されるところであった。

調査の結果として、明治期以降陸軍の管理となる中で、場所によっては1.0mほどにおよぶような大きな盛土が施されていること、近世の庭園遺構は兵舎等によって破壊されている部分はあるものの、陸軍による盛土にパックされる形で比較的良好に保存されている状況が明らかとなった。調査成果からは『御城御庭絵図』等に描かれた文政期の庭園の姿を確認できる部分が多く、今後は絵図類と合わせて、より具体的な二之丸庭園の姿についての検討が可能になると考えられる。また、一方で近代以降の陸軍に関わる成果もあり、これについても名古屋城の歴史を考える上で有用な資料群である。本章では各地割ごとに調査成果をまとめ、今後の調査研究および整備の一助としたい。

笹巻山

笹巻山については調査の大部分が近代面までとなっている。また、笹-01～03区と笹-04区の西半は陸軍の将校集会所の影響から大きな攪乱が認められ、地表下1.0mほどまでの掘削を行ったが、近世遺構面を確認することができなかった。笹巻山の周囲については、西側の笹-06区で近代の盛土で埋められた築山を構成する石を確認している。掘削は行っていないが、笹巻山東側の笹-10～13区では、大きな石材が頂部を出すだけで据えられていることから、築山が現在は地中となっている標高として低い位置から立ち上がっていた可能性が考えられる。

笹巻山本体については、笹-16区の成果から近世に作られたものであると考えられるが、現在見られる石組みの中には近代以降の盛土に据えられているものもあり、明治期以降の据え直し等が想定される。特に笹巻山の南側に組まれている滝組については、近世の絵図類には表現が見られず、滝下には近代以降の盛土の上に整備された礫集積が併せて存在することから、陸軍期に整備されたものの可能性がある。

笹巻山の周辺では、近世遺構面が検出されておらず、近世の状況が明らかとなっていない。しかし、特に北側の栄螺山に伴う調査から、近世遺構面が現在の地表面から1.0mほど下がる可能性が想定されている。今後笹巻山の北側での調査が行われることから、笹巻山周辺の状況についても新たな成果が得られることが期待される。

栄螺山

栄螺山は文政期に造営された築山であり、『御城御庭絵図』には築山を周回しながら山頂へと至る園路が描かれている。近代になると、陸軍によって山頂部に忠霊祠が建てられたり園路の付け替えが行われたりした状況が、重森三玲による測量図面等から観察される。また、築山の西側は建物等の建設のために陸軍によって大きく削平されている状況であった。

栄螺山においては、築山に設けられた近世の園路の一部が確認された。特に栄-01および栄-02区におい

では、一部下方側の法面に崩落が見られるものもあったが、広い部分で幅60cmほどの平坦面として良好に確認をすることができた。栄-01区で確認した平坦面南３および４は、現在も栄螺山の南斜面に残る滝組の橋部分へ通じるような位置で確認がされた。一方、栄-04区においては、平坦面は確認されたものの、近代以降の影響が大きく園路であるとの確定までには至らなかった。

栄螺山の山頂部、栄-03区においては忠霊祠の痕跡は確認することはできなかった。小面積での調査であったため、忠霊祠の範囲外であった可能性も考えられる。また、栄螺山の北斜面（栄-04区）では大きなコンクリートブロックや近代以降の厚い堆積土が確認され、東や南斜面と比べ改変が大きかったことが想定される。『御城御庭絵図』では栄螺山の北斜面には滝石組が２カ所描かれているが、現状では１カ所でしか確認することができず、近代以降の改変による結果、現況のようになった可能性も考えられる。また、多春園周辺等での調査成果から、栄螺山の東・西・北側は近代以降に1.0ｍほどの盛土が施されている状況が確認された。

多春園

多春園は、二之丸庭園の北西部に文政期に建てられた茶席である。『御城御庭絵図』には多春園の周囲に、茶席へ至る園路や池それを超える橋などの表現が認められる。

調査では栄螺山の北～北西にかけて、多-01～04区を設定した。多-01区では近代以降の埋設物が多く、改変の影響を受けている状況が認められた。また、近代以降の盛土も非常に厚い状況であった。

多-01区では漆喰の広がりを確認し、『御城御庭絵図』に描かれた池跡の可能性を想定している。しかし、池の立ち上がりや周囲の石組み、飛び石などは確認することはできず、遺構の性格の確定には至っていない。

多-02～04区で確認した三和土は、多春園本体に関わる可能性の高い遺構である。一般的な三和土（土間状遺構）と表面を赤く化粧した三和土（化粧三和土遺構）の間にはわずかに隙間が開き、礎石状の石が４石据えられている。化粧三和土遺構に据えられた飛び石列は、礎石列のもっとも西側の礎石間へ延びており、ここに板塀と戸の存在した可能性が想定できる。また、これらの三和土の東側には礎石状の石とピットが並ぶ。建物を復元できるほどのものは確認できていないが、これらの遺構は多春園の建物に関わるものである可能性がある。

多春園周辺で確認された三和土については、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存修復科学センター分析科学研究室長の早川泰弘氏に分析を依頼した。その結果、赤色部分もそうでない部分も、基本的には成分に違いはないが、赤色部分については酸化鉄（ベンガラ）の割合が高いということが明らかとなった。

多春園周辺では飛び石列も確認された。『御城御庭絵図』等には、園路に多くの飛び石が描かれているが、実際に調査の中で確認できた飛び石列は多くはなく、二之丸庭園においては貴重な事例である。特にこの部分では、三和土の中に据えられたり周辺に玉石が敷き詰められたりと、飛び石だけでなくその整備手法やバリエーションを確認できたことも成果である。

多春園調査区では、陸軍に関わるコンクリート基礎も多く確認された。位置図によると陸軍期の建物は、この調査区付近にも複数の建物が建てられていたことが確認でき、栄螺山の北側斜面や西斜面の削平等の近代以降の改変痕跡と合わせ、積極的な利用があったことが考えられる。

御文庫

外-04区では「御文庫」跡と考えられる基礎遺構を確認した。御文庫は、徳川家康から譲られた「駿河御譲本」等が収められていたとの記録が残る蔵である。また、幕末の尾張藩主である徳川慶勝が撮影した写真にもその姿が残る。

基礎跡は径50cmほどの砂岩（河戸石）の割石を中心として、二之丸西面の石垣から東方向へ延び、南へほぼ直角に折れ曲がり続いている。基礎を形成する石の内部の一部には砂利層が認められるが、名古屋城内においては蔵の遺構は他に確認されておらず、蔵の遺構例として貴重である。

また、本調査区では近世後期の庭園整備面が石垣天端から60cmほど下がることも明らかとなった。石垣天端から庭園整備面までは、土羽状に法面を露出するのではなく、三和土状の素材が施されていた。

二子山

二子山は、栄螺山と権現山に挟まれた位置に、文政期に造営された築山である。『御城御庭絵図』には、山には石が据えられ、蘚鉄が生える状況が描かれる。

調査では二-02・03区の２ヵ所で飛び石列を確認した。特に南東側の飛び石列は直方体状の石材を南へ下がる階段状に設置をしている。二子山南側の二-01区では、築山を構成する石材が埋没しており、近世遺構面が1.0mほど下がることが確認されている。このことから、現在は南側が盛土され高低差はそれほど大きくはないが、二子山の北と南では大きな高低差があったことが明らかとなった。

二-04～06区では明確な近世の土は確認できなかった。近代にはこの辺りに池が作られていたようであり、影響や改変を受けている可能性がある。また、二-07・08区付近には、石製の手水が据えられているが、調査の結果、近代の盛土中に据えられていることが明らかとなった。重森の図面などでは、二子山の北側の池を越え、手水の前を通り、栄螺山の忠霊祠へと至る道が描かれているが、二-07区で確認された扁平な四角形の石は、池を越える橋を受ける橋台となる可能性も考えられる。

権現山

権現山は初代藩主義直によって元和期に造営された築山である。絵図等の検討から、少なくとも十代藩主斉朝の文政期の整備の際には、園路の付け替えや頂部に社を設けたりするなど改変が加わっていることが明らかとなっている。

頂部の権-03区では、南部で凝灰岩質の切石による区画状遺構と北部で砂岩の割石による基壇状遺構を確認した。『金城温古録』には権現山頂部に秋葉社と稲荷社の二社と拝殿があることが記されているが、それぞれ南部の区画が拝殿、北部の基壇が社の痕跡となる可能性が考えられる。しかし、確認した状況からは社は一つしか復元が出来ない。また、『御城御庭絵図』では頂部の周囲は塀が囲むようであるが、それらについては痕跡を確認できなかった。

また、権-02区では愛宕社跡と考えられる基壇を確認している。この基壇は南面と西面のみが残存しており、他の面については確認できなかった。『御城御庭絵図』では北側に園路が走るが、調査ではわずかに平坦面は確認できたが、園路跡との認定までは至っていない。

権-04区では、残存していた曲がった階段が、本来は『御城御庭絵図』等に描かれている直線的な階段であったのか、確認を行った。結果としては、大部分については現況の状態で築山本体の土が露出している状況であり、石段の据え付け痕等は確認が出来なかった。しかし、一部で土中より砂岩製の階段の一部となる可能性のある石材を確認した。また、現況の石段については、最下段の石材が南麓で検出した鳥居の基礎石を埋める土の上にのっており、全体のつくりも同一の手によるものと考えられることから、近代以降に下がる可能性が高いと考えられる。以上から近世における階段のについては、可能性のある石材の一部での確認にとどまり、全体の把握までには至らなかった。一方で、調査前から残されていた階段については近代以降のものであると考えられる。権現山南麓の権-05区では、鳥居基礎と飛び石群を確認した。これらの状況は、一部飛び石の据え直し等も考えられるが、『御城御庭絵図』等の絵図に描かれる状況ともほぼ一致をする。

権現山東

この調査区は、南部を中心として大部分が本来は権現山だった部分である。陸軍期に兵舎建設のため権現山の東部を削平した結果、調査前は平地となっていた。

庭園の区画に関わると考えられる遺構として、権東-溝１・２、権東-礎石列１・２が確認された。溝については『御城御庭絵図』には記載がなく、調査により初めて確認がされた。これらの溝以降は、昭和49～53年の調査で確認された北暗渠遺構へ続くと考えられる。

茶席跡として権現山下御席跡と考えられる遺構を確認した。遺構は三和土によって構築されており、一部は小砂利による洗い出し加工がなされていた。また、三和土の西部では、手水鉢等が据えられるような、底部が湾曲した三和土も確認された。三和土以外の礎石などは確認されず、『御城御庭絵図』に描かれる飛び石や区画の跡も確認できなかった。

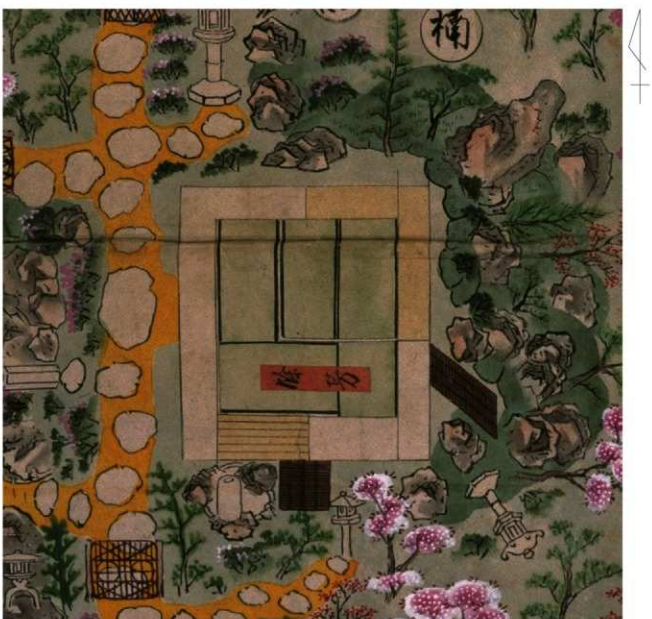
調査区の東部では、石組遺構を確認した。これは２列の石組からなるが、北側の石組は自然石、南側の石組は砂岩の割石が使われており、どちらも北側に面を持つ。また、南側の砂岩による石列は崩れている部分が多く、南側の石列を形成する砂岩を再利用して、北側の自然石列の間が埋められている。このことから、南側の石列が北側の石列に対して先行する可能性が考えられる。これらの遺構に対応するものは絵図等には見えず、性格は不明である。

石組遺構に重なるかたちで、石列遺構が確認された。この遺構は砂岩製の正方形の石がほぼ1.78m間隔で据えられ、その間に凝灰岩質の直方体状の石が据えられている。性格については明らかではないが、建物等となる可能性もある。石組遺構が検出された面よりも下からの検出であり、先行する遺構であることから、元和期の庭園の痕跡の可能性も考えられる。

権東-02区南では漆喰または三和土が貼り付けられた遺構を確認した。遺物の出土がないため時期については不明であるが、『御城御庭絵図』と比較すると、この部分は権現山の下になる部分にあたり、遺構に対応するようなものは描かれない。一方で、元和期の庭園を描いた『中御座之間北御庭惣絵』では、池が広がっている状況が描かれている。三和土が漏水対策などの池に関わる遺構であると考えた場合、確認されたのは元和期の池の痕跡の可能性も想定される。池跡の可能性のある三和土の北側では、権東-礎石１・２を確認した。文政期には権現山の下に当たる部分であり、池跡と同様、元和期まで遡る遺構の可能性が考えられる。

権東-01区北西部では、井戸跡を確認した。井戸は側面を三和土で固められている。周辺では井戸屋形などの痕跡は確認できなかった。確認された位置等から『御城御庭絵図』に描かれた井戸に該当する可能性がある。

権現山東の調査区では、陸軍の兵舎や便所に関わる遺構も確認された。確認された遺構はレンガによる兵舎の基礎であり、余-01区まで続く。この兵舎は昭和48年に火災にあったとの記録が残るが、調査では炭等の火災の痕跡も確認された。使用されているレンガには刻印が残されているものあり、北翔大学水野信太郎教授に実見いただいたところ、士族授産事業の中で設立された東洋組という会社が、明治20年代半ば頃に西尾や刈谷で製造していたものではないかということであった。



第59図　御城御庭絵図（余芳部分）

余芳

余芳は他の茶席同様、文政期に建てられた茶席である。『御城御庭絵図』には余芳の周囲に、茶席へ至る園路や手水などが描かれる。

余-01区では、調査区北東寄りで、兵舎の基礎に一部破壊されていたが、多春園周辺で確認されたものと同様の赤く化粧をした三和土が確認された。三和土は端部が失われているが、碗状に湾曲した形状で、周囲には石が据えられている部分がある。三和土以外の遺構が確認できなかったため、この遺構の性格は不明であるが、『御城御庭絵図』には余芳の南側に手水が描かれ、その手水は石と白く描かれた構造物の上にのる。この手水がのる構造物は、今回確認された三和土遺構と形状的によく似ており、これに該当する可能性がある。

調査区の西側では、文政期の北園池の東端と考えられる遺構を確認した。この遺構については、昭和49～53年の調査でも確認されている。池と考えられる遺構は側面と底面が三和土で固められている。この三和土は一部に石を模したような表現も認められる。現在までの調査で、この三和土については近世の池を踏襲しつつ、近代以降に陸軍の手によって施されたものであると考えている。

池周辺の遺構としては他に、橋に関わると考えられる橋台と橋脚の礎石を確認している。橋台は砂岩を長方形や台形に加工したものを組み合わせている。今回の調査で確認されたのは東側だけであるが、昭和49～53年の調査では西側も確認されている。橋脚の礎石は池底で確認した。花崗岩を正方形に加工し、中央に円形の穴が開けられている。礎石は４石を確認している。また、池の北側では三和土の上に円礫を敷き詰め、州浜を表現したと考えられる遺構も確認をしている。

池跡の北部および南東側では、漆喰または三和土が貼られた部分を確認した。確認された範囲は文政期の北園池の範囲より広がり、広がっている部分は近世の土で埋められている。この漆喰または三和土は権東-02区の南西部で確認されたものとよく似ており、元和期の池跡の可能性が考えられる。

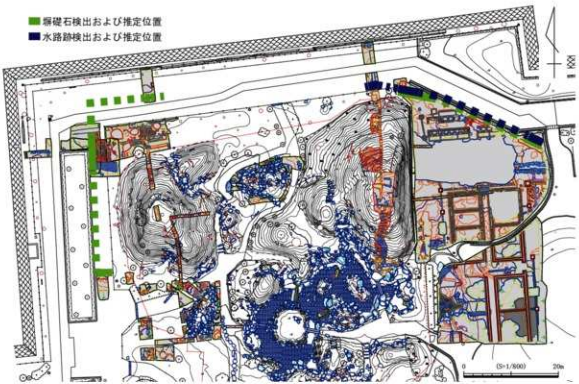
余-01区でも兵舎の基礎が確認された。兵舎の西辺は確認された北園池東端と一部が重なる。兵舎が建てられる際に池の一部が埋められ、現在の池の形状となった可能性が考えられる。

外縁

外縁では、二之丸庭園の区画に関わる遺構を確認した。外-03・05区では、二之丸庭園の内部と外部を区切る塀の礎石と考えられる石列確認した。砂岩製の四角く成形されたものが多く、間隔は90cm前後である。南西角に該当する地点と北西部は複数箇所で確認できており、各部分を延長することでほぼ塀の走るラインを確認することができる。

外-02区では水路跡を確認した。権東-01区で確認されている水路跡と同様砂岩の割石で作られており、権東-01区のものと繋がると考えられる。この部分ではコンクリート基礎が確認され、撹乱が激しいため塀の礎石列は確認できなかった。『御城御庭絵図』の検討から、付近には門も予想されることから、今後の調査が期待される。

外-01・03区では、二之丸の北辺に残される南蛮練塀と庭園の関係を確認するための掘削を行った。外-04区と同様、ここでも石垣天端と庭園整備面で60cmほどの高低差が認められた。しかし、外-04区で確認



第60図　塀及び水路位置推定図

されたような石垣天端から庭園整備面の三和土状の素材は、外-01・03区とも確認できなかった。もともと無く土羽状であったか、失われてしまったのかは今回の調査では確認できなかった。

名古屋城二之丸庭園は近世において、初代藩主義直が整備した元和期の庭園と、十代藩主斉朝の整備をした文政期の庭園の大きく２つの時期に分けることができる。調査の中では、掘削が基本的に文政期までということもあり、この２つの時期の整備面における差は確認することはできなかった。一部権東-01・02区の石列遺構と石組遺構で重なりが確認されたが、文政期の庭園の整備面は基本的に築城期の盛土の直上であり、２時期の庭園に整備面の差はほとんどなかった可能性がある。

調査では、近代以降の盛土が非常に厚い状況を確認した。場所によっては1.0mを超える部分もあった。また二子山付近を典型として、近世においては現状以上に庭園内に高低差が存在したと考えられる。築山では比高差が6.0mほどであるが、園路においても高低差が存在し、地形的な変化に富んだ庭園だった可能性も考えられる。これは調査着手前にはあまり意識をしていなかった事柄であり、名古屋城二之丸庭園の特徴の一つとして今後意識をしていく必要がある。

調査を進める中で、『御城御庭絵図』を始めとした各種の絵図類と、確認できた遺構の一致する点が明らかとなった。『御城御庭絵図』は一辺が3.0mを超える、非常に精緻な絵図であることは調査前から明らかとなっていたが、実際の遺構とどの程度一致するのかは不明な部分が多かった。実際には、築山や茶席などの構築物については、細部では異なる部分があるものの、大枠では絵図に描かれた状況が調査においても確認することができた。

これまでの江戸や他城郭における近世庭園の調査では、頻繁に改変を受ける庭園と、あまり改変を受けない庭園の二種類がある傾向が指摘されている。名古屋城二之丸庭園は、文政期に整備をされて以降、大きな改変を受けた状況が調査からは認められないため、文政期に大きな改変をうけているものの、それ以降は比較的改変の少ない庭園であったと考えられる。

しかし、大枠では『御城御庭絵図』とよく一致するもの、例えば多春園で確認された赤く化粧をされた三和土は絵図では確認することができない。これらの違いが、施工時のものからであるのか、改変の結果であるのかについては、今後の更なる検討が必要となる。現在『御城御庭絵図』は藩主への「伺い図」と考えられているが、遺構と差違がある部分について検討を行うことで、複数ある絵図類それぞれの性格について、検討が可能になると考える。また、差違が改変の結果であるとすれば、時期を絞り込むことで、施主の趣向や当時の文化との関係について、検討も可能となるだろう。

名勝名古屋城二之丸庭園は遺構の残存状況が非常に良好であるといえる。昭和49～53年の調査成果を合わせて考えると、名古屋城二之丸庭園全体の遺構が良好なかたちで保存されていると考えられる。今後も調査が引き続き行われるが、その姿が更に明らかになることが期待される。

【参考文献】

吉川需「名古屋城二之丸庭園の資料と「寝覚の御庭」について」『造園雑誌』18(1) 1954-08-25 社団法人日本造園学会

歩六史編集委員会 1968『歩兵第六聯隊歴史』歩六史刊行会

重森三玲・重森完途 1973『日本庭園史体系第十二巻 桃山時代の庭 (五)』社会思想社

愛知県郷土資料刊行会 1973『愛知県郷土資料叢書第十五集の二 愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第二巻』愛知県郷土資料刊行会

愛知県郷土資料刊行会 1974『愛知県郷土資料叢書第十五集の三 愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告第三巻』愛知県郷土資料刊行会

名古屋市土木局緑地部 1975『名城公園旧二之丸庭園試掘及び調査報告書』名古屋市

名古屋市教育委員会 1976『名古屋城二之丸庭園発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会

名古屋城振興協会編 1980『名勝史蹟名古屋城の庭園』財団法人名古屋城振興協会

内藤昌 1985「二丸御殿」『日本名城集成名古屋城』小学館

東京都埋蔵文化財センター2000～2010『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅰ～Ⅻ』東京都教育文化財団

㈱イビソク編2011『名古屋城三の丸遺跡』国立病院機構名古屋医療センター

井上光夫 2013『中御座之間北御庭惣絵 考』名古屋市教育委員会

木村有作 2013「名古屋城二之丸庭園」『新修名古屋市史 資料編 考古２』名古屋市

白根孝胤 2013「名古屋城庭園の植栽空間と徳川斉朝」『徳川林政史研究所研究紀要』48 徳川黎明会

名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所 2013『名勝名古屋城二之丸庭園保存管理計画書』名古屋市市民経済局文化観光部名古屋城総合事務所

徳川義崇監修 徳川林政史研究所編 2014『写真集 尾張徳川家の幕末維新』吉川弘文館

東北大学埋蔵文化財調査室 2016『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点』

報 告 書 抄 録

ふ り が な	めいしょうなごやじょうにのまるていえんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	名勝名古屋城二之丸庭園発掘調査報告書
副 書 名	第１次（2013）～第３次（2015）
編 著 者 名	市澤泰峰・近藤真人・鈴木裕子
編 集 機 関	株式会社 イビソク（文化財コンサルタント事業部文化財調査部）
所 在 地	〒503-0854　岐阜県大垣市築捨町三丁目102番　TEL　0584-89-5507
発 行 機 関	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所
所 在 地	〒460-0031　愛知県名古屋市中区本丸１番１号　TEL　052-231-1700
調査資料等保管	名古屋市観光文化交流局名古屋城総合事務所
所 在 地	〒460-0031　愛知県名古屋市中区本丸１番１号　TEL　052-231-1700
発行年月日	西暦　2017年　3月　24日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
名勝名古屋城（めいしょうなごやじょう） 二之丸庭園（にのまるていえん）	愛知県（あいちけん） 名古屋市中区（なごやしなかく） 二の丸（にのまる）２番	23100	市遺跡番号 7-1 県遺跡番号 007001	35度 11分 6秒	136度 54分 8秒	2013/07/22 ～ 2015/12/28	2,065㎡	名勝整備

遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名古屋城跡 那古屋城跡	城跡	近世・近代	茶席跡・園路跡・礎石跡・築山跡・社跡・池跡・兵舎跡ほか	近世陶磁器・近代陶磁器・瓦ほか	－

要　約

名古屋城二之丸庭園は、藩政の中心であった二之丸御殿に接して造営された大名庭園である。名勝二之丸庭園の保存整備に必要である基礎資料を得るために、残存状況や往時の姿を確認することを目的として、発掘調査を実施した。本書では平成25～27年度に行った発掘調査を報告した。

平成25年調査は、笹巻山周辺で文政期に改修された庭園の地盤を確認するため実施されたが、近代の盛土面までの確認にとどまった。平成26年度調査では、多春園や権現山下御席といった茶席の痕跡と、栄螺山の園路、権現社、愛宕社、塀跡といった御庭を形成する要素が明らかとなり、文政期に描かれた『御城御庭絵図』が精密な絵図であったことが分かった。また明治期の兵舎基礎などを確認し、明治期で削平および盛土された地盤を正確に把握することができた。平成27年度調査では前年度調査の結果を踏まえ、北園池の東端、余芳、御文庫などの痕跡を確認し、前年度確認できなかった多春園の全容を明らかにすることができた。多春園で検出した赤く化粧を施された化粧三和土遺構は、『御城御庭絵図』には描かれておらず、特筆すべき成果であったと言える。

名勝名古屋城二之丸庭園
発掘調査報告書

－第１次（2013）～第３次（2015）－

平成29年３月24日　発行

発　行　名古屋市観光文化交流局
名古屋城総合事務所
愛知県名古屋市中区本丸１番１号
TEL 052-231-1700

編　集　株式会社イビソク
岐阜県大垣市築捨町三丁目102番
TEL 0584-89-5507

印　刷　冨士出版印刷株式会社